井尻B遺跡 25

－第25次,第32次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1251集

2015

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから中国大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されています。しかしながら、都市の発展に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、本市の重要な責務として発掘調査を行い、記録保存を行っています。

本書は、南区井尻１丁目における個人専用住宅建設に伴う井尻Ｂ遺跡第25次および第32次発掘調査について報告するものです。第25次調査では、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡群や、井尻Ｂ遺跡では数少ない弥生時代前期の遺構として小児用木棺墓が検出されました。また第32次調査では、弥生時代後期後半の竪穴住居からガラス製の小玉と管玉が多数出土しました。ガラス玉が墳墓ではなく住居跡から多く出土することは比較的少ない貴重な成果です。さらに弥生時代中期前半の井戸が検出され、井尻Ｂ遺跡の弥生時代集落が発展する初期であり注目されます。

これらの調査成果は、当遺跡が地域の歴史において重要であることを示しており、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には，発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成27年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　言

１．本書は、福岡市教育委員会が、平成18年5月15日から同年5月31日まで発掘調査を実施した井尻Ｂ遺跡第25次調査および、平成20年11月10日から同年12月8日まで発掘調査を実施した井尻Ｂ遺跡第32次調査の報告書である。なお、発掘調査費用負担は国庫補助金を適用している。

２．発掘調査は、いずれも個人専用住宅建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行っている。

３．遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をＳＤ、竪穴建物（竪穴住居）をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、柱穴などピット状遺構をＳＰ、その他の遺構（不明遺構，特殊遺構，近代以降の攪乱）をＳＸとした。

４．本書の遺構図に用いる方位北は、25次は磁北、32次は国土座標北である。磁北は西偏約６°20′である。なお調査地付近の国土座標基準点（教育委員会埋蔵文化財課設置）から調査地の国土座標を求めているが、これら基準点は日本測地系（第Ⅱ系）であり、その後の周囲調査では世界測地系基準点の使用に変わっているので注意されたい。調査区の標高は、いずれも道路下水道局が市立小学校（本調査では宮竹小学校）に設置している水準点のレベルを移動して求めている。

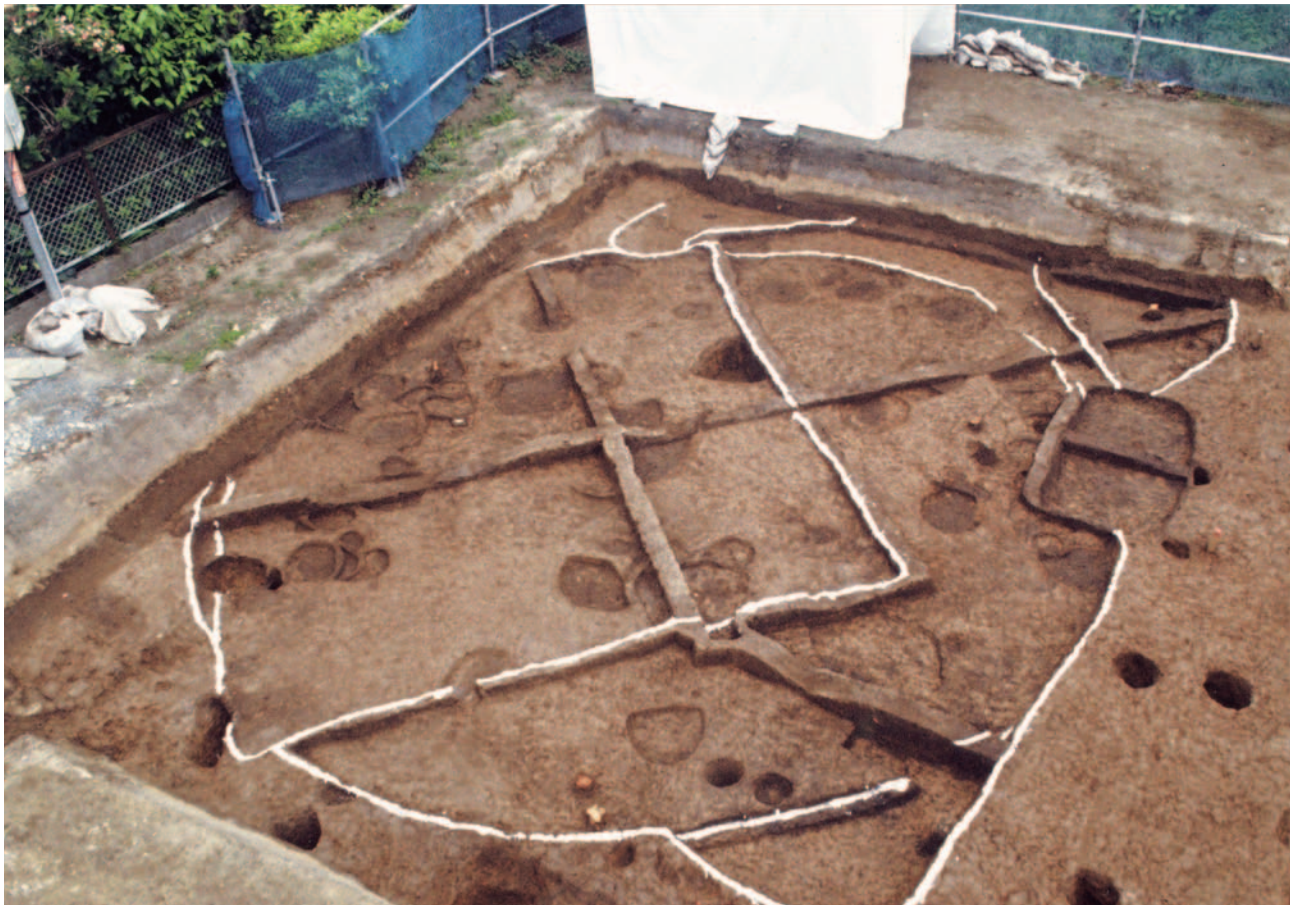
５．本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄（当時・教育委員会埋蔵文化財第１課）が主に行ったが、25次調査は藤野雅基（埋蔵文化財課技能員）、32次調査は坂口剛毅（埋蔵文化財課技能員）および阿部泰之（当時・埋蔵文化財第1課）の助力を得た。遺物の実測は、土器類を25・32次出土分ともに山崎悠郁子（当時・別府大学学生、現・春日市教育委員会）、西拓巳（当時・福岡大学大学院、現・久留米市）および平川敬治（埋蔵文化財課技能員）が行い、久住が補足・修正した。その他、石器類は両調査とも板倉有大（埋蔵文化財審査課）が、32次出土の鉄器は石井（西澤）千絵里（当時・埋蔵文化財センター嘱託）が、32次出土のガラス玉類は谷澤亜里（九州大学大学院）がそれぞれ実測した。製図は久住のほか、上方高弘（埋蔵文化財調査課技能員）、松下伊都子（整理作業員）が行った。本書に用いる遺構写真および遺物写真は、ほぼ全て久住が撮影したが、ガラス玉類は谷澤が撮影した。なお表表紙写真は、「井尻Ｂ32次調査Ⅱ区全景（南から）」である。

６．本書の編集は久住が行い、ガラス玉類を谷澤が（表を含む）、石器を板倉が執筆（表を含む）した他は、久住が執筆した。

７．本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

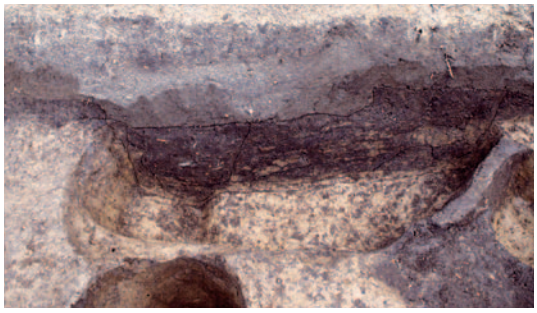
本 文 目 次

Ⅰ．はじめに ・・・



1．井尻B25次調査全景（北西から）

2．井尻B25次SK123木棺墓（西から）



3．井尻B25次SK21,SP65木棺墓（西から）

4．井尻B25次SC04-SK37炉址土層（北から）

5．井尻B32次I区南半・SC05東部（西から）

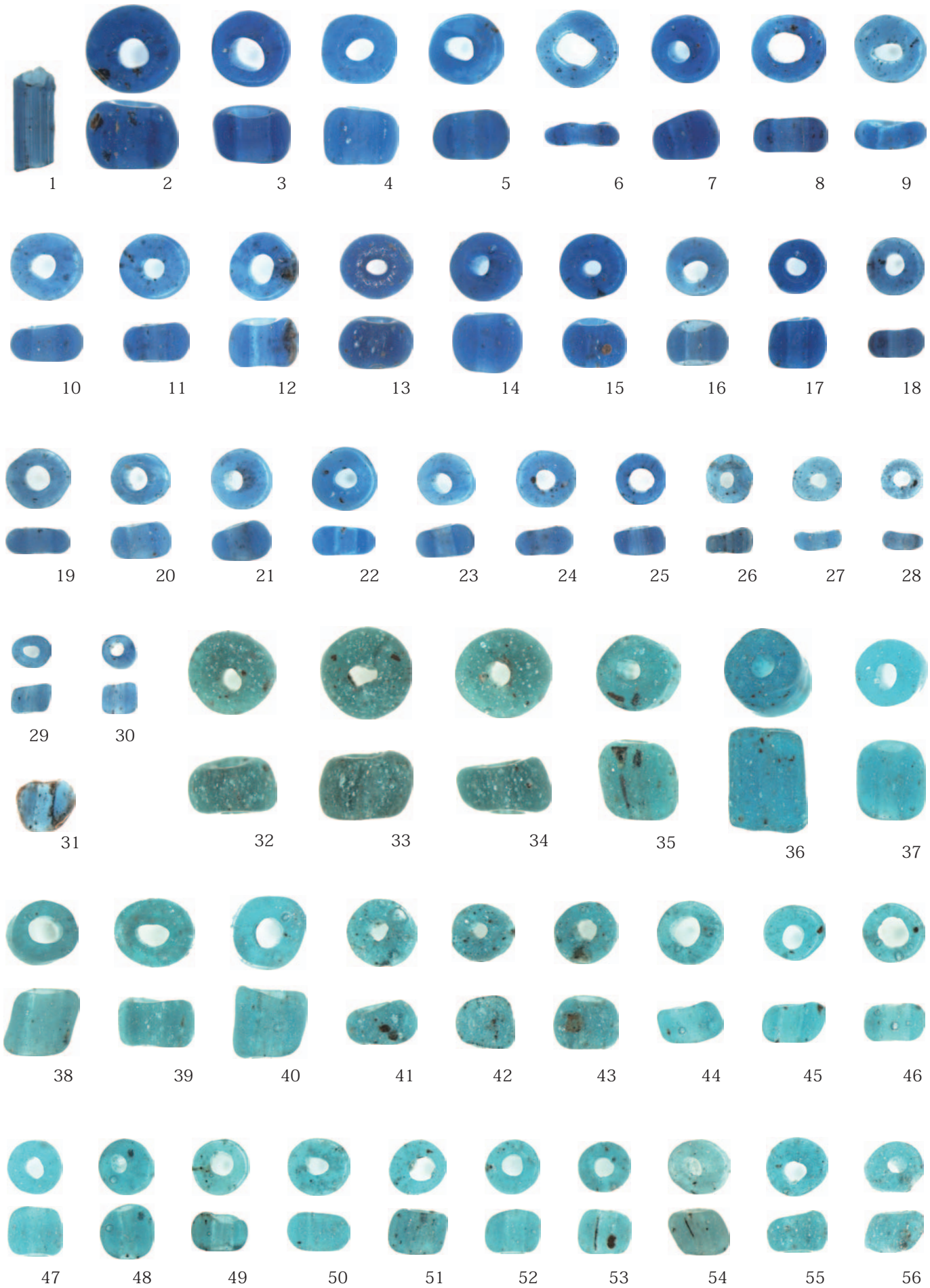
１．井尻B32次Ⅲ区SC21北半ほか（南から）

２．井尻B32次Ⅱ区遺溝検出状況（東から）

４．井尻B32次Ⅲ区SE111北半（南から）

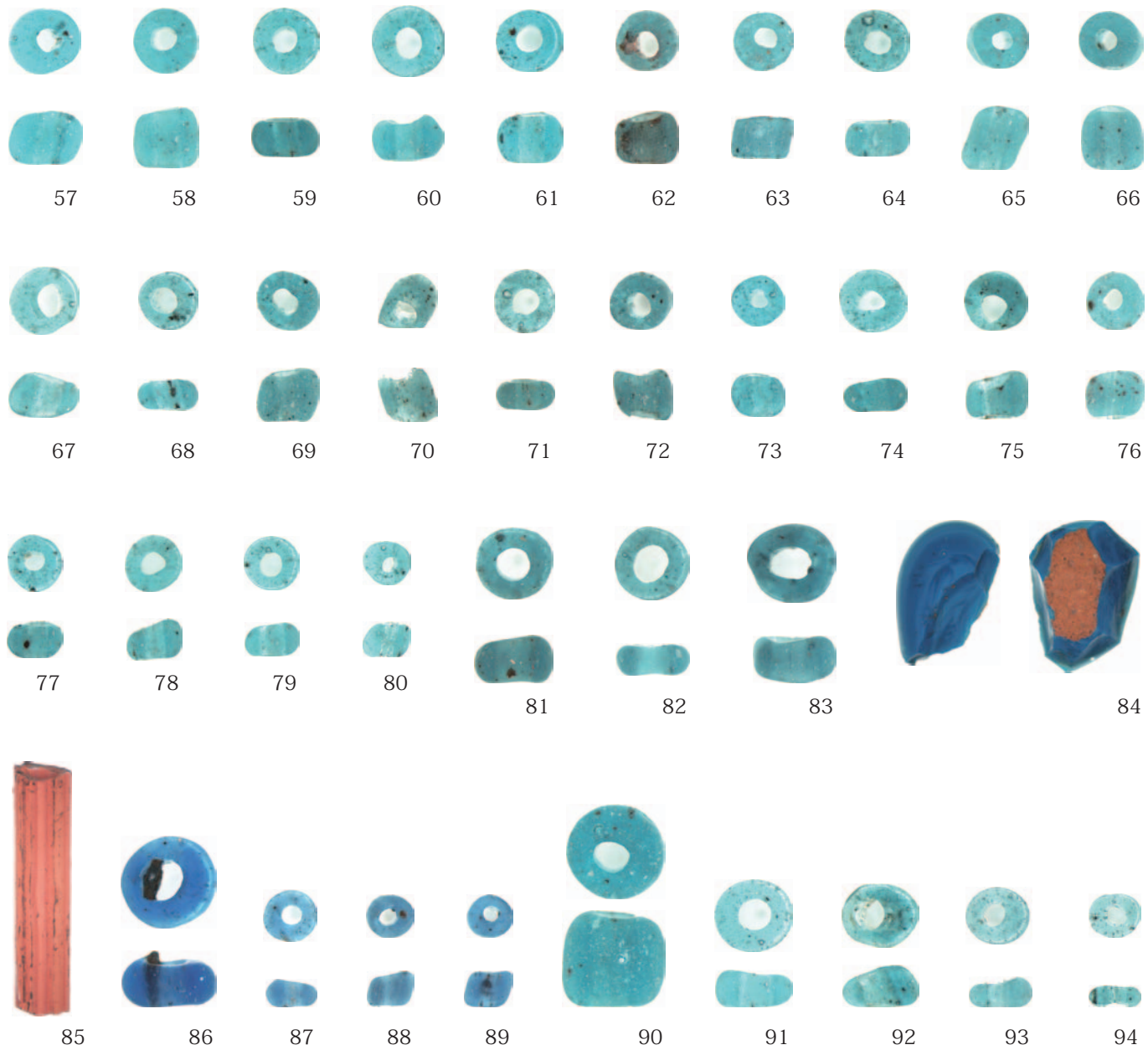
３．井尻B32次Ⅲ区SK127土層（東から）

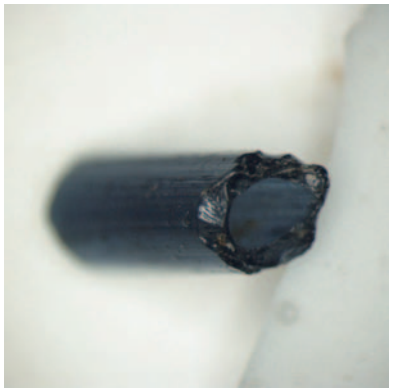
５．井尻B32次Ⅱ区SE111南半（南から）



Ph. 1　SC21 出土ガラス製品

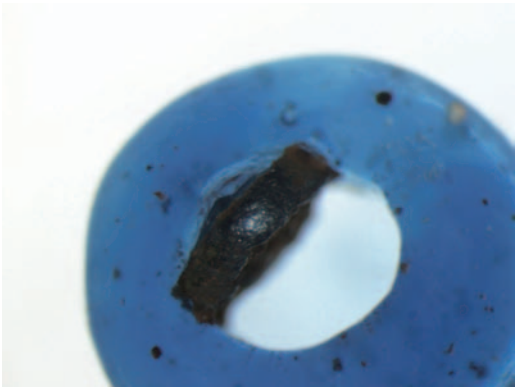
巻頭図版４
（32 次ガラス製玉類）





No.1 小口面の状態

No.85 小口面の状態



No.86 鉄片噛み込み状況

Ph. 2　SC21 および SX121 出土ガラス製品

Ⅰ．はじめに

・井尻Ｂ遺跡の立地と歴史的環境

井尻Ｂ遺跡は、那珂川と御笠川水系にある諸岡川に挟まれた段丘上にあり、弥生時代から古墳時代前期前半に栄えた「奴国」の二大拠点集落（「都市的」との評価もある大拠点）である須玖岡本遺跡群（春日市）と比恵･那珂遺跡群（博多区）を結ぶ線上のほぼ中間に位置している（Fig. 1）。遺跡には、主に弥生時代から古墳時代前期前半の集落と墓地、古墳時代中期の古墳（井尻Ｂ１号墳）、飛鳥時代後期（九州須恵器編年Ⅵ期）～平安時代の集落、官衙遺構、推定寺院址などが展開する。井尻Ｂ遺跡は、大正年間にすでに九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士が踏査および部分的な調査（遺物採集、断面観察など）を行い、弥生時代の甕棺墓や竪穴、古代の寺院基壇と思われる整地層（「井尻廃寺」）の存在についてすでに報告され、考古学界に知られていた（中山平次郎 1925「井尻村の弥生式遺跡」『考古学雑誌』第 14 巻第 12 号、同 1927「井尻および寺福童の甕棺」『考古学雑誌』第 17 巻第 12 号）。さらに近世の青柳種信による『筑前国續風土記拾遺』にも、那珂郡井尻村の条において、「熊野権現」の「鉾の鎔範」（推定地は Fig. 2 のイ）や「大塚」（井尻Ｂ１号墳？）、「古瓦多く」「昔大寺など有りし」（井尻廃寺）との記述があり、遺跡としての認識がすでにみられる。なお「井尻廃寺」については、井尻Ｂ３次の報告による考察があり（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 411 集）、さらに３次調査の南北溝延長上の試掘調査で北東隅角とみられる溝があり（事前審査番号 9-2-220）、その範囲は Fig. 2 のように推定される（福岡市第 788 集参照）。

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡の位置と周辺遺跡分布図（1/40,000）

1. 井尻Ｂ遺跡　2. 比恵遺跡群　3. 那珂遺跡群　4. 山王遺跡　5. 五十川遺跡　6. 寺島遺跡　7. 御陵遺跡　8. 須玖岡本遺跡群　9. 曰佐遺跡　10. 大橋Ｅ遺跡　11. 三宅Ａ遺跡・三宅廃寺　12. 雀居遺跡　13. 東那珂遺跡　14. 那珂君休遺跡（那珂深ヲサ，那珂久平遺跡を含む）　15. 諸岡Ａ遺跡　16. 諸岡Ｂ遺跡　17. 笹原遺跡　18. 板付遺跡　19. 高畑遺跡　20. 三筑遺跡　21. 麦野Ａ遺跡　22. 麦野Ｂ遺跡　23. 麦野Ｃ遺跡　24. 南八幡遺跡　25. 久保園遺跡　26. 席田大谷遺跡（赤穂ノ浦遺跡を含む）　27. 宝満尾遺跡　（25 ～ 27 席田遺跡群）　28. 下月隈Ｃ遺跡　29. 井相田Ｄ遺跡　30. 仲島遺跡　31. 井相田Ｃ遺跡　Ａ．剣塚北古墳（ぐ末）･東光寺剣塚古墳（６世紀中葉）、Ｂ．那珂八幡古墳（早期～初頭）、Ｃ．今宮神社古墳（前期前葉？）　Ｄ．須玖御陵古墳（前期初頭）　Ｅ．板付八幡古墳（６世紀後葉）　Ｆ．井尻Ｂ１号墳（中期中葉）　Ｇ．諸岡２号墳（７世紀前葉？）　Ｈ．諸岡３号墳（６世紀初頭）　Ｉ．水町古墳（中期後葉、横穴式石室は６世紀後葉）　Ｊ．比恵 36・55 次（前方後方墳？、早期）　Ｋ．那珂 114 次 SX1100（前方後方墳、前期初頭）　Ｌ．那珂 114 次 SX3060・3059・4005（前方後円墳？、前期初頭）

※上図の遺跡範囲はおよその範囲を示したものであり、また「周知の埋蔵文化財包蔵地」の全てを示していない。さらに現在の埋蔵文化財審査課窓口における分布地図上の包蔵地範囲と若干異なるものもあり、さらに今後の調査研究の進展によりその範囲が変動することもあり注意されたい。また本図の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）範囲は、一部に隣接する春日市域および大野城市域のものも含まれている。

井尻Ｂ遺跡は、およそ南北 900 m、東西 300 mの広がりを有する遺跡であり、弥生時代中期後半から古墳前期前半の遺跡（居住域＋墓域）範囲は約 25ha を有し、青銅器生産関係遺物の出土からは（北部の 17 次、南部の６次など）「拠点集落」とするに足る内容である。弥生時代は前期から中期初頭は断続的かつ散発的だが、中期前半（須玖Ⅰ式）以降になると継続的かつ分布が広がり（現状では中期前葉～後期前葉までは北半部に多いが、その時期の墳墓遺構の分布は南半部にもあり、当該期の集落が南半部にも分布している可能性が高い）、後期中葉以降に遺構がさらに増加して遺構分布が後期後葉には一体的になる。そ

の後、古墳時代初頭まで大規模集落として続くが、古墳時代前期中頃に衰微する。福岡平野においては、100ha 級の須玖岡本や比恵・那珂の遺跡規模や出土遺物の質や量が圧倒的であるため、それに次ぐ第２ランクの地位にある。他に第２ランクには、席田遺跡群、雀居遺跡などがある（Fig. 1）。井尻Ｂにおける青銅器およびガラス製品生産関係遺物の出土地点としては、南半集落では伝「熊野権現の後広藪」（推定 19 次北側）の広形銅矛鋳型、６次の小型倣製鏡・銅鏃両面鋳型（ＳＫ 10：後期中葉）、銅鏃鋳型および青銅塊（SK16：後期前葉）、北半集落では 11 次の中細形銅矛鋳型（中期前葉～末）、17 次Ｂ・Ｃ区出土の広形銅戈鋳型（Ｂ区 SC4063：後期後葉古相）、青銅滴付着土器・ガラス勾玉鋳型（Ｃ区 SE05：後期中葉）、ガラス勾玉鋳型（Ｃ区 SC01：後期前葉、Ｂ区 SC4064：終末期新相）、取瓶（Ｃ区 SE03：後期中葉～後葉古相）がある。北部と南部にそれぞれ工房（弥生時代後期前葉～終末期）があったことが分かる。その他、10 次地点では下層に中期後葉（須玖Ⅱ式古相）がある条溝があり、これが途切れる溝の南東側には１×１間の門柱を想定させる遺構があり、集落の出入口施設と考えられる。条溝の検出は部分的で、今のところ集落を大きく囲郭するような環濠などは想定できない。遺跡北端の 17 次Ｆ区と 36 次では直線的な大溝があるが、弥生時代後期後葉新相以降の掘削で、状況的に

Fig.2　井尻B遺跡の範囲と調査地点（1/5,000）

は多目的の水路とみられる。また遺跡中部（南半部北端）東側の１次では、古墳前期前後の水路と水溜遺構がある（111 集）。削平があり導水路が不明だが大型湧水土坑 SH04（弥生後期か）は溜井かもしれない。これらから、五十川遺跡との間の段丘北西部や、段丘東側裾に水田の存在が推定される。集落の展開としては、須玖Ⅰ式中頃ないし新相から井戸が掘削されることが注意される（４次井戸 40、32 次 SE111）。段丘中位における井戸の掘削開始は、周囲の自然湧水の利用よりも居住域内に生活用水を求めたということであり、以後の継続的な集落展開の象徴となる出来事である。弥生時代後期から終末期は井戸の掘削が多い。井戸掘削開始時期に若干先行して、井尻Ｂにおいて甕棺墓地が営まれ始める（17 次Ｅ区・16 次、21 次周辺）。汲田式の時期である。この時期に井尻Ｂの南北に集団が定着し、開発拠点的に集落が営まれ始めたことを示す。井尻Ｂにおける井戸は古墳前期前半までであり、その消長は集落の衰微と一致する。

北部の 16・17 次Ｅ区の墓地は、その中央から東側に前期後半（板付Ⅱｂ式～）から須玖Ⅰ式古相の土壙墓群がある（16 次報告で「土壙墓」としていない「土坑」の一部も墓である可能性もあろう）。本報告の 25 次に前期後半前後の墓域が認められるが、16 次の土壙墓群と同様に当該期（須玖Ⅰ式古相まで）の集落遺構は不明確である。16 次・17 次Ｅ区では、土壙墓・土壙群の北側と西側に、汲田式（須玖Ⅰ式併行、中期前葉～中葉）や小型棺は一部須玖Ⅱ式古相（中期後葉）までの甕棺墓群がある。その後を継ぐのは東に少し離れた 27 次地点の墓地である。立岩式甕棺（須玖Ⅱ式新相）から後期初頭の小型棺、後期と考えられる土壙墓・木棺墓群がある。後期後葉頃の建物群に切られるまでの時期であるが、後期の墳墓には多くベンガラが伴う。おそらく、16 次と 27 次の間に両者をつなぐ時期（中期後葉～末）の墳墓群があると予想する。南部の 21 次の墓地は、中期前葉～中葉の汲田式甕棺墓群だが（小型棺もあり）、同じ列に推定土壙墓が２基ある。中山平次郎が観察した甕棺はこの北側隣接地であり、一定規模の墓地の展開が考えられる。その後は断絶期があるが、終末期の推定土壙墓がある（SK10）。南半部南端の 34 次では、中期後葉～末の甕棺墓（ST01・15）と後期初頭前後（？）の土壙墓（SR11）があり、さらに後期前葉～中葉の土器が出土する土壙（SK02・13）や標石のある 10 号土坑は後期の土壙墓の可能性がある。さらに調査区内には後期後葉～末の土器もあり（SD07・09 の複合口縁壺）、当該期の墓地が周囲に展開している可能性がある。続いて、古墳時代初頭には方形周溝（SD07・08・09）があるが、周溝内埋葬や周溝に平行・直交する埋葬が多くあることから（土壙墓、木棺墓、石蓋土壙墓がある）、主体部が削平された周溝墓とするのが類例からも妥当であろう。一辺 15m の方形周溝墓であろう。さらに北半部西側の 10 次（本報告 32 次の南方）のＬ字状溝は、あまり例がない精製の脚付小型丸底壺などもあり、古墳時代前期前葉新相の大型方形周溝墓の隅角部の可能性がある。溝幅から一辺 20 m前後を想定しておきたい。これに隣接する 32 次の竪穴住居（弥生時代後期後葉）からガラス玉が多数出土したが、あるいはこの地区付近は上位階層の居住区があった可能性も考慮すべきだろう。次に南部の２次地点（411 集）には土壙墓・石蓋土壙墓群があるが、上限は弥生時代後期後葉とみられる。水銀朱とベンガラが伴う墳墓群は類例から後期後葉から古墳時代初頭前後の特定集団墓であろう。同地点でベンガラのみの石蓋土壙墓２基は古墳前期に下る可能性が高い。さらに、方形周溝（一辺 8m）内にある 16 号土壙墓（ベンガラ撒布）は、本来は箱式石棺ないし石棺系小石室の可能性があり、古墳前期後半と考えられる。２次では、他にも周溝墓の可能性がある弧状溝（SD01）などもあり、周囲に古墳前期の周溝墓群が展開している可能性がある。この延長として、古墳中期中葉（TK216 併行期）に埴輪を伴う井尻Ｂ１号墳（径 25m）の成立をみるのだろう。

さて、井尻Ｂ遺跡では古墳時代初頭以降に集落の一部に周溝墓が築かれ、その展開過程の前期中葉には集落が衰微し消滅する。居住関係遺構の減少は古墳時代初頭から漸移的に始まっているが、その一部は谷を挟んだ東側の笹原遺跡（Fig. 1）に移動した可能性がある。古墳時代初頭から笹原遺跡北部で集落が形成され（1 次・４次）、その当初から一辺 16 × 20m（推定）の方形区画（４次）

が成立しており、集落の象徴的な祭祀空間として古墳中期初頭まで機能していたことが判明している（1224 集）。

井尻Ｂ遺跡は古墳時代前期後葉以降、中期に古墳があるものの、それ以外の遺構が認められない。後期後葉ないし飛鳥時代前期（須恵器ⅢＢ期～Ⅳ期）には僅かな遺構と遺物があるが、本格的かつ爆発的な遺構の再展開が飛鳥時代末期（須恵器Ⅵ期新相；７世紀末）にある。この時に出現する遺構群は正方位を志向し、推定寺院址（「井尻廃寺」、３次周辺）、官衙域、倉庫域、一般集落域が整然と計画的に配置された街区状空間があった可能性が高い（22 次報告 923 集）。これらの遺構最盛期には、谷を挟んだ東側の笹原遺跡西端（２次）付近に同時期の土壙墓群が存在することも注意される（642 集）。なお寺院域以外でも 17 次Ａ区の官衙的な掘立柱建物群などで瓦の出土があるが、「廃寺」付近の瓦出土量には劣り、部分的な瓦葺きである「甍棟」の官衙建物の存在が想定される。これらの官衙遺構群は奈良時代初頭までの限られた期間だが、701 年大宝律令の「評」「郡」転換期を前後した一時期の「那珂評（郡）衙」が井尻にあった可能性も検討すべきであろう。17 次Ａ区の文字瓦（「豊評」「山部評」）、「寺」字銘ヘラ描き須恵器（11 次）の存在がそれを示唆する。その後、奈良時代中頃から平安時代前期（９世紀）までの遺構がみられるが分布は減少しており、それ以降は遺構の展開が非常に少なくなる。しかしそのことが、古代の正方位街区の名残を現代に伝える要因になっているともみられる。

Fig.3　井尻B遺跡第25次、第32次調査の位置と周辺の調査（1/1,250）

Ⅱ．第 25 次調査の報告

1．調査の概要と検出遺構

1．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区井尻一丁目 754 番 2 の一部における、個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 18 年 3 月 27 日付で受理した（事前審査番号 17-2-1240）。

これを受け、教育委員会（当時）埋蔵文化財第 1 課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡（分布地図番号 25-0090）に含まれており、周囲の発掘調査および試掘調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成 18 年 4 月 27 日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下 60cm 前後で弥生時代とみられる遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、工事計画は埋蔵文化財への影響が回避できないことから、住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成 18 年 5 月 12 日付で建築主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務に関する事前協議確認書を締結し、同年 5 月 15 日から発掘調査を実施することになった。なお調査費用については、当該建設工事が個人建築主による専用住宅建設であるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、国庫補助金を適用することになった。

本調査は予定通り平成 18 年 5 月 15 日に開始し、同年 5 月 31 日に終了した。資料整理および報告書作成は、当初の計画では翌年度に行う予定であったが、調査担当者の業務過多など諸般の事情によりその実施が遅れ、平成 26 年度に資料整理を行い、平成 27 年 3 月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は以下の表のとおりである。

2．調査の組織

調査主体：　福岡市教育委員会
調査委託：　個 人
（本調査　平成 18 年度）
調査総括：　教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課　課長　山口譲治
　同課調査係長　山崎龍雄
調査庶務：　文化財管理課管理係　鈴木由喜
事前審査：　埋蔵文化財第 1 課事前審査係　本田浩二郎
調査担当：　埋蔵文化財第 1 課調査係　久住猛雄
（資料整理・報告書作成　平成 26 年度）
整理・報告総括：　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
　同課調査第 1 係長　吉武 学
整理・報告庶務：　埋蔵文化財審査課管理係　横田 忍
整理・報告担当：　埋蔵文化財調査課調査第 1 係　久住猛雄

なお文化財部は組織改編のため平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

遺跡名	井尻Ｂ遺跡	調査次数	25 次	調査略号	IGB-25
調査番号	0613	分布地図図幅名	井尻	遺跡登録番号	020090
申請地面積	258.96 ㎡	調査対象面積	68.99 ㎡	調査面積	80.04 ㎡
調査期間	平成 18（2006）年 5 月 15 日～ 5 月 31 日			事前審査番号	17-2-1240
調査地	福岡市南区井尻一丁目 754 番 2 の一部				

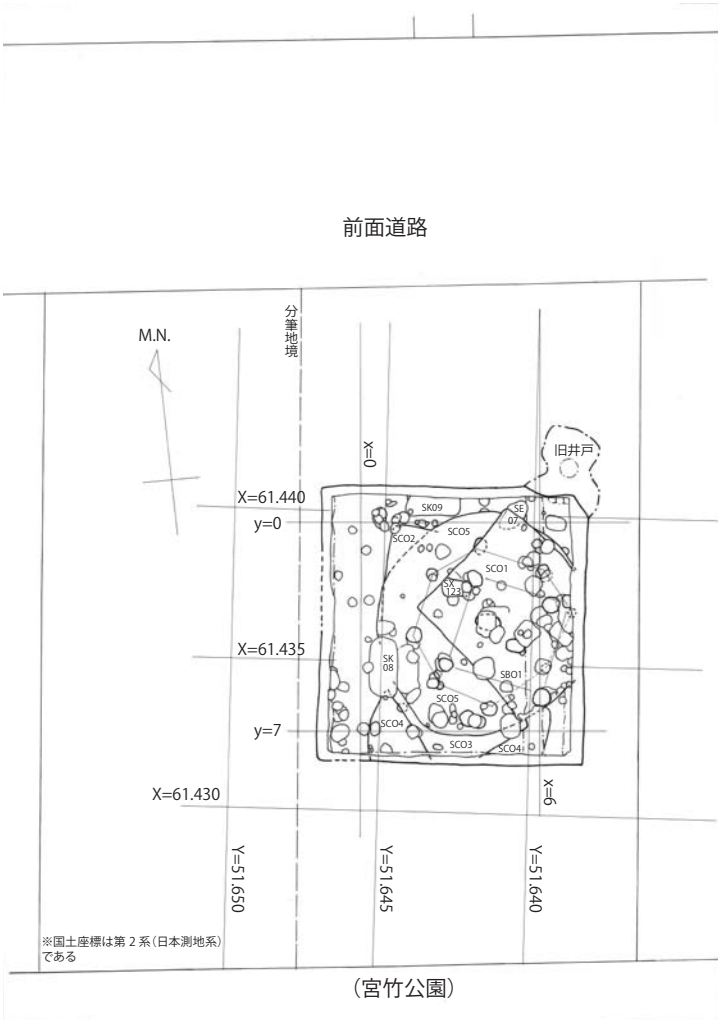


Fig.4　第25次調査区と周囲地割平面図（1/250）

３．調査の概要と基本層序

25 次調査地点は井尻Ｂ遺跡群の北部東側、遺跡が立地する段丘の北東縁辺部近くに位置し（Fig.2）、調査地の近隣では北東側に 4 次調査、西側に 17 次調査の各地点がある（Fig.3）。周囲の標高は 12.6 ～ 12.9 m前後で、南側が若干高い。北側前面道路の標高は 12.6 m前後で、調査地点の宅地との段差はない。調査は住宅建設予定部分について重機により表土を掘削して開始した。この際、調査範囲の設定（線引き）が調査側に委任されたため、結果的に調査面積が本来の調査対象面積（住宅建設予定面積）よりわずかに一回り大きくなっている。表土は、上からマサ土盛土（Fig.11-「SK21 土層」0 層、以下同じ）、黒褐色土・暗褐色土＋マサ土の混合土（1 層）、灰色シルト＋黒褐色土・褐色土混合土（2 層）で、0･1 層近年の盛土･造成土で、2 層はそれ以前の耕作土とみられる。これらを除去した現況 GL － 60cm（調査区北西側）～ 70cm前後（調査区東～南東側）で地山の鳥栖ローム上面となる。この面で遺構を検出した。遺構の覆土は暗褐色土ないし多くは黒褐色～極暗褐色土（色調の標記は『標準土色帖』による表現に準拠する）であり、後者が多い。調査区のうちおよそ 80％を遺構が占める比較的濃密な遺構分布であった（Fig.5・6）。**検出遺構**は、竪穴住居（SC）５棟、土坑（SK）４基以上（「SK」としたものには柱穴もある）、井戸（SE）１基、柱穴多数を検出したほか、竪穴住居の下部から小型の木棺墓を１基検出した。柱穴群からは、現場での検討および整理作業過程で掘立柱建物５棟を推定した。なお竪穴住居が全て重複しており、遺構覆土が類似していたため、上面での切り合い把握を当初間違えて掘り始めており、最終的な遺構番号について整理作業過程で再整理している。また調査時においては、調査面積の多くを占める竪穴住居群の完掘後に、それらの掘り方下面で遺構検出を行っており、実質的に２面の調査となった（Fig.6「調査下層遺構平面図」）。このように遺構が濃密かつ重複が顕著であったため調査は手間がかかり、平成 18 年 5 月 15 日に表土掘削した後、同年 5 月末に終了させる必要があったため、期間中は雨天日以外ほぼ休みなく作業している。

各遺構については後に詳述するが、以下は主な遺構について概要を記す。竪穴住居は、小型長方形住居（SC02,SC03,SC04）→円形住居（SC05）→方形住居（SC01）と展開する。SC01 は弥生時代後期前葉頃とみられるが、それ以外は全て弥生時代中期前葉（須玖Ⅰ式）で、中期中葉（須玖Ⅱ式古相）を下限とする。井戸（SE07）は、当初土坑としたが、湧水層まで掘削しており、小規模だが井戸とした。当初概要報告では弥生時代中期前葉としたが、出土遺物に後期初頭ないし前葉のものがあり、SC01 直前の時期とみられる。竪穴住居群の下層で検出した小型木棺墓（SX123）は、土層と小口板掘り込み痕跡から小さいが木棺墓と認定した。弥生時代中期前葉以前で、前期後半の土

器片が散見されることからその時期だろう。掘立柱建物は調査区が狭いこともあり、調査区外に展開すると推定したものはよく分からないところもある。しかしうち１棟は、１×１間ながら南北に独立棟持柱が推定できるものである（SB01）。柱穴群および掘立柱建物は、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭が大半とみられるが、一部には覆土の土色（暗褐色土）から古代の可能性があるものもあった。

出土遺物は総量でパンケース６箱分がある。大部分が弥生土器の破片であり、中期なかんずく中期前葉の土器が多く、後期～終末期の土器もあるがやや少ない。わずかに前期の土器片がある。また古墳時代初頭～前期前葉の土器が若干ある。古代前期（飛鳥時代～奈良時代）の土師器と須恵器の破片もあるが、量的にわずかで、図化にたえるものはなかった。また石器が出土しており（Fig.16, 表1）、その大半は弥生時代前半期（中期前葉まで）の所産とみられるが、ごくわずかに縄文時代と旧石器時代とみられる石器も出土している。

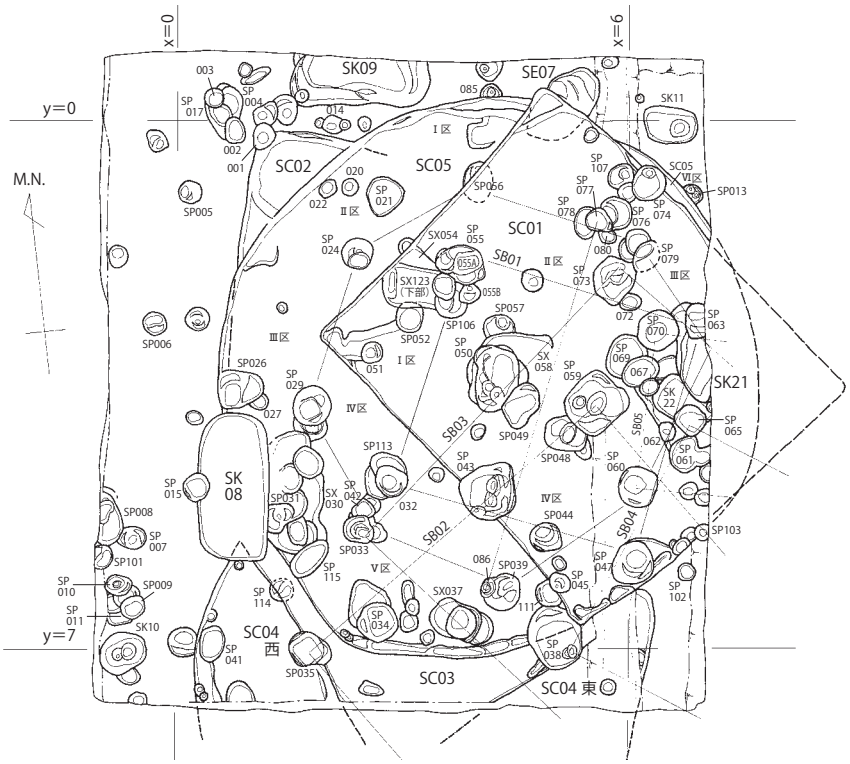


Fig.5　第25次調査遺構平面図（1/100）

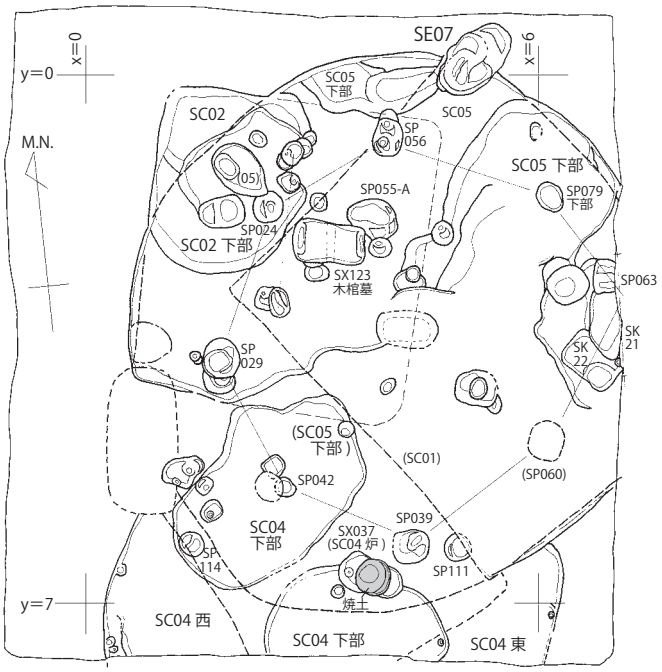


Fig.6　第25次調査下層遺構平面図（1/100）

４．検出遺構

（１）竪穴住居

（PL. 1-1, 2-1, 2-4, 3-1～6, 4-4～6）

・SC05（Fig.7）

調査区中央から東側にかけて検出した円形住居址。住居址中央から東側をSC01に、西側の一部をSK08に切られる。当初、SC02との切り合いが不明確で、方形住居が新しいという思い込みのもと

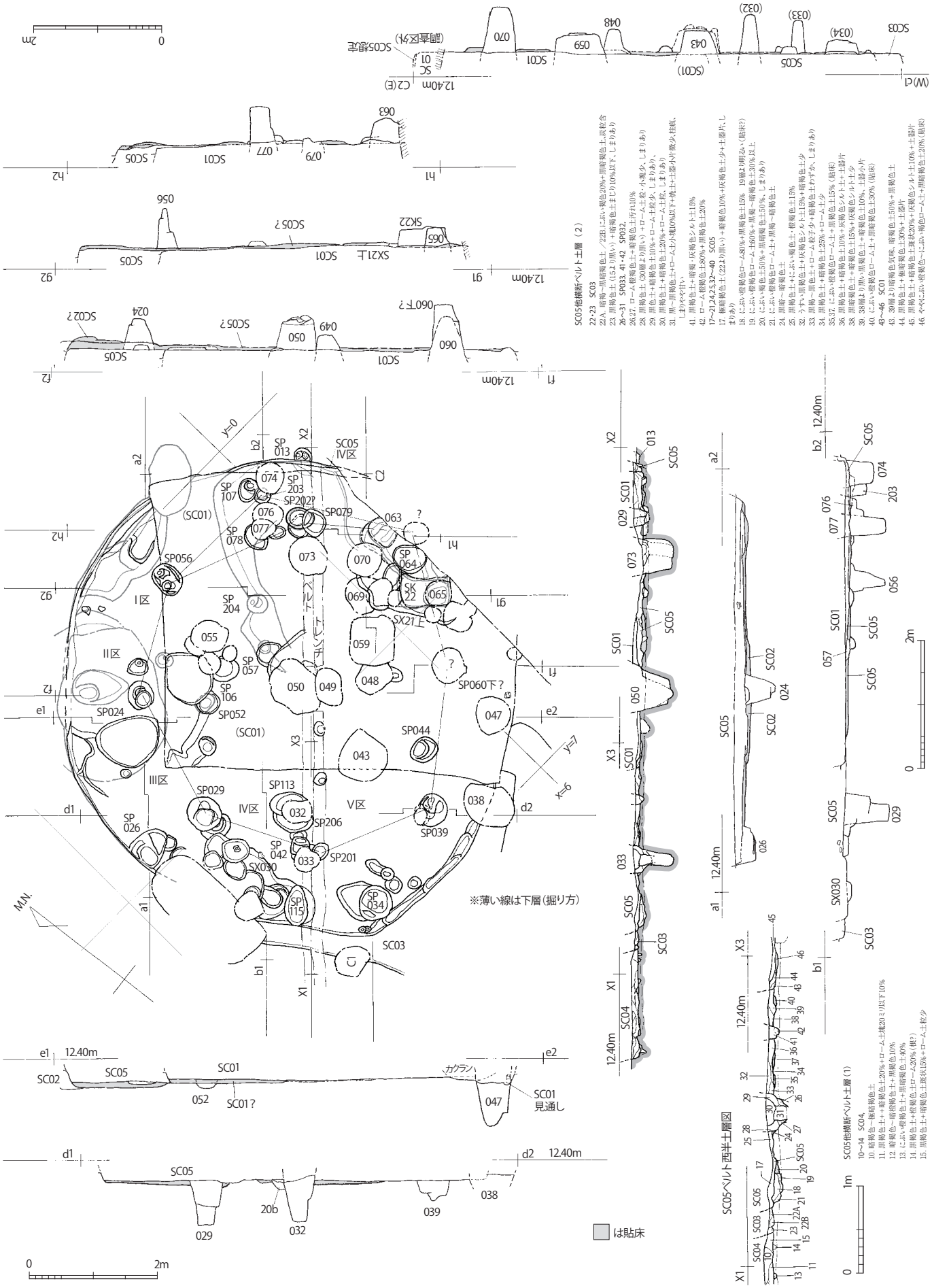


Fig.7　SC05実測図（1/80, 土層図一部1/60）

SC02 を新しいものとして掘り始めたが、土層断面により逆と判明して掘削途中で修正している（PL. 3-4、Fig.8 上 SC02 土層図）。そのため一部の出土遺物について SC02 と混在してしまった。覆土上

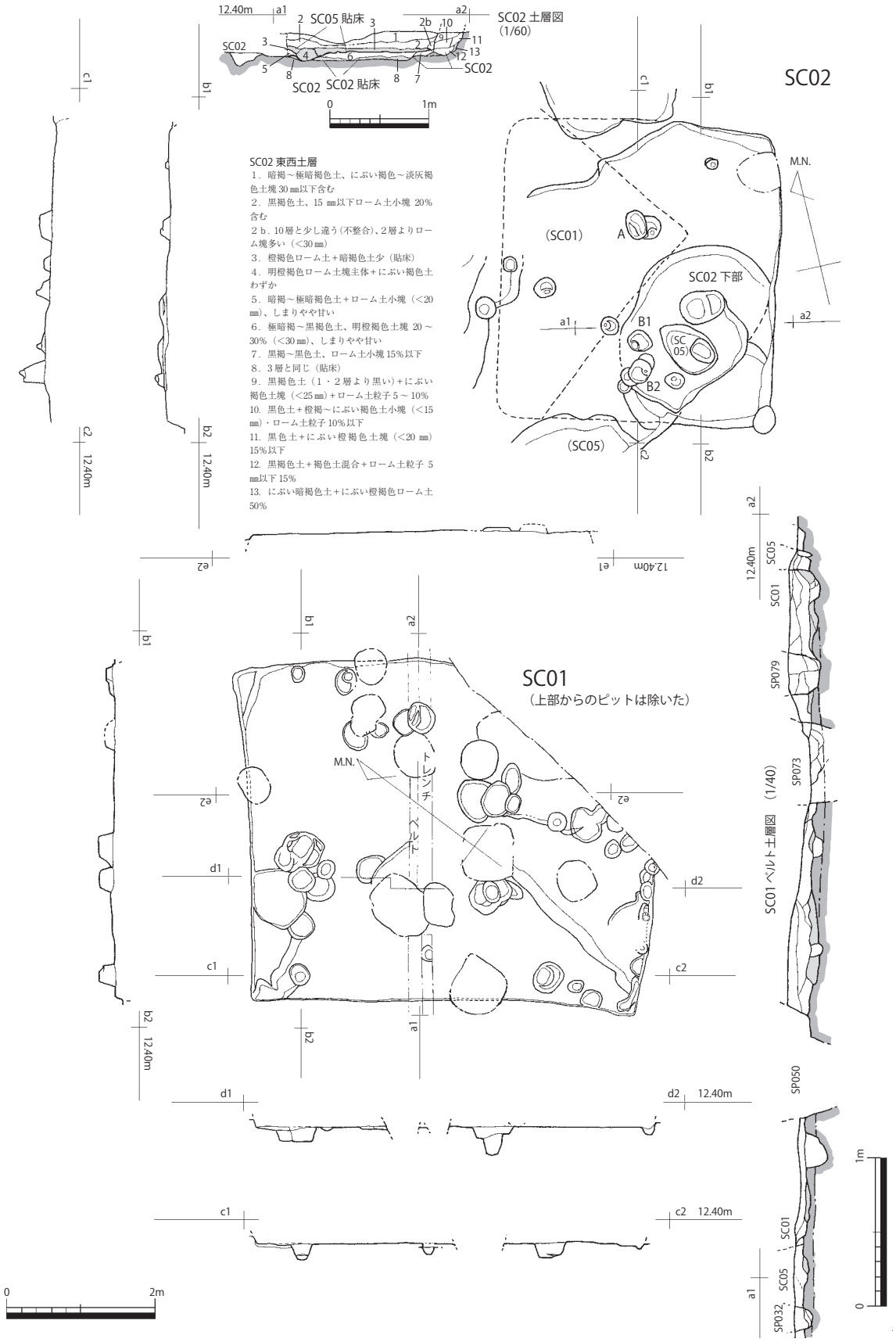


Fig.8　SC01、SC02実測図（1/80, 土層図は1/60, 1/40）

部から柱穴がいくつも切り込んでおり、円形住居の主柱穴があるはずの位置のいくつかはそれと重複しているとみている。東側が調査区外となるが、直径約 7.2 m であり、やや大型である。ただし正円にならず、やや不整円形ないし一部多角形状となる。覆土の深さは、床面まで最深 18cmの遺存である。中央炉ないし中央土坑は SC01 に切られ、また SP050 がある位置のため不明。壁溝は南側のみ検出でき、全周しない模様。主柱穴は図の下（南西）から右回りに、SP201（浅）－ SP029（深）－ SP024（深）－ SP056（深）－ SP203（やや深）または SP202（浅）－（調査区外）－（SP060 下部に重複？）－ SP039（やや深）－ SP201 の不整八角形となる。このうち浅い（というか凹み程度）の SP201 と SP202 は対向する位置にあり、かえってこの復元でよいだろう。床は貼床で、掘方下面に凹凸がある。住居址西側縁辺に不整形土坑 **SX030** があり、SK08 に切られ不明確だが、あるいは入口関係施設の可能性もある（出土遺物から SC01 より新しい可能性もある）。出土土器（Fig.13-30 ～ 36，14-1 ～ 11・13 ～ 15；一部 SC02 混入）には弥生時代後期ないし終末期がわずかにあるが、より新しい SC01 が後期前葉と考えられ、住居址形態からも中期とすべきでありそれらは混入としてよい。それ以外に新しいものは上層出土だが須玖Ⅱ式古相が 1 点ある（Fig.14-6）。しかし他は須玖Ⅰ式で、おそらく須玖Ⅰ式新相（中期中葉）と考えておきたい。

・SC01（Fig.8）

SC05 を切る 4.7 × 5.5 m 前後のやや歪な形態の長方形住居。長軸は、N（磁北）－ 37°－ W（以下方位北は磁北）。床面までの深さは最深 25㎝である。壁溝ないし壁際の小ピット列は南辺のみである。貼床は不明確で、土層図で貼床とした部分は重複する住居のものである可能性も

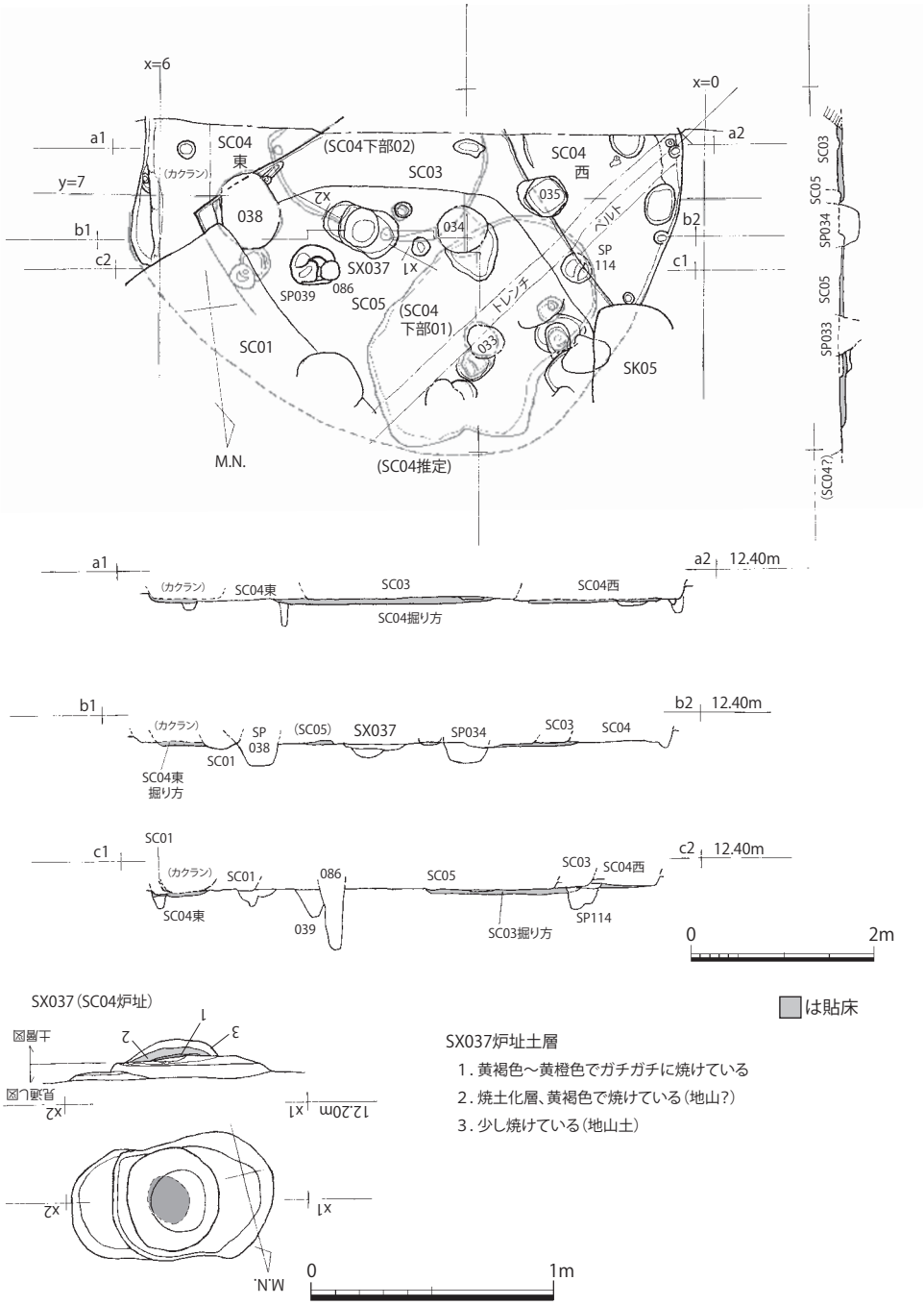
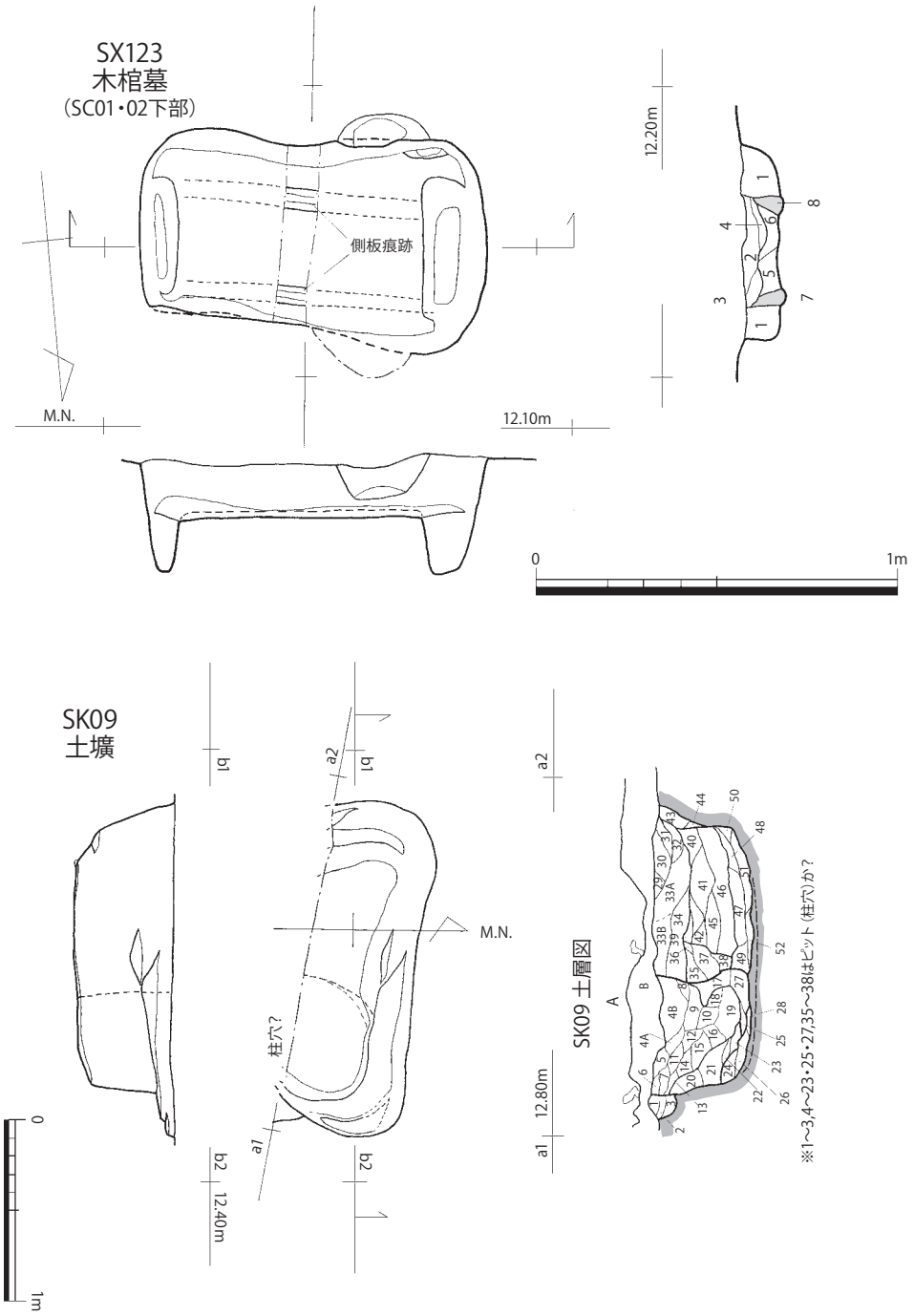


Fig.9　SC03-04実測図（1/80, 炉址は1/30）



SX123木棺墓横断土層

1．黄橙褐色ローム土＋暗褐～褐色土汚れ
2．黒褐色土＋橙褐色ローム土粒子＋暗褐色土10～15%（蓋板落込み痕跡？）
3．橙褐色ローム土塊（<30㎜）30%＋黒褐色土
4．ローム橙褐色土（<10㎜）30%斑状＋黒褐色土
5．黒褐～黒色土＋暗褐色土20%＋ローム土粒子（<5㎜）5%
6．黒色～黒褐色土＋暗褐色土30%以上
（5・6．底板痕跡？）
7．黒褐色土＋明褐色ローム土粒子10%
8．黒褐色土＋暗褐色土半々＋ローム土粒子少
（7・8．側板痕跡）

SK09およびピット土層

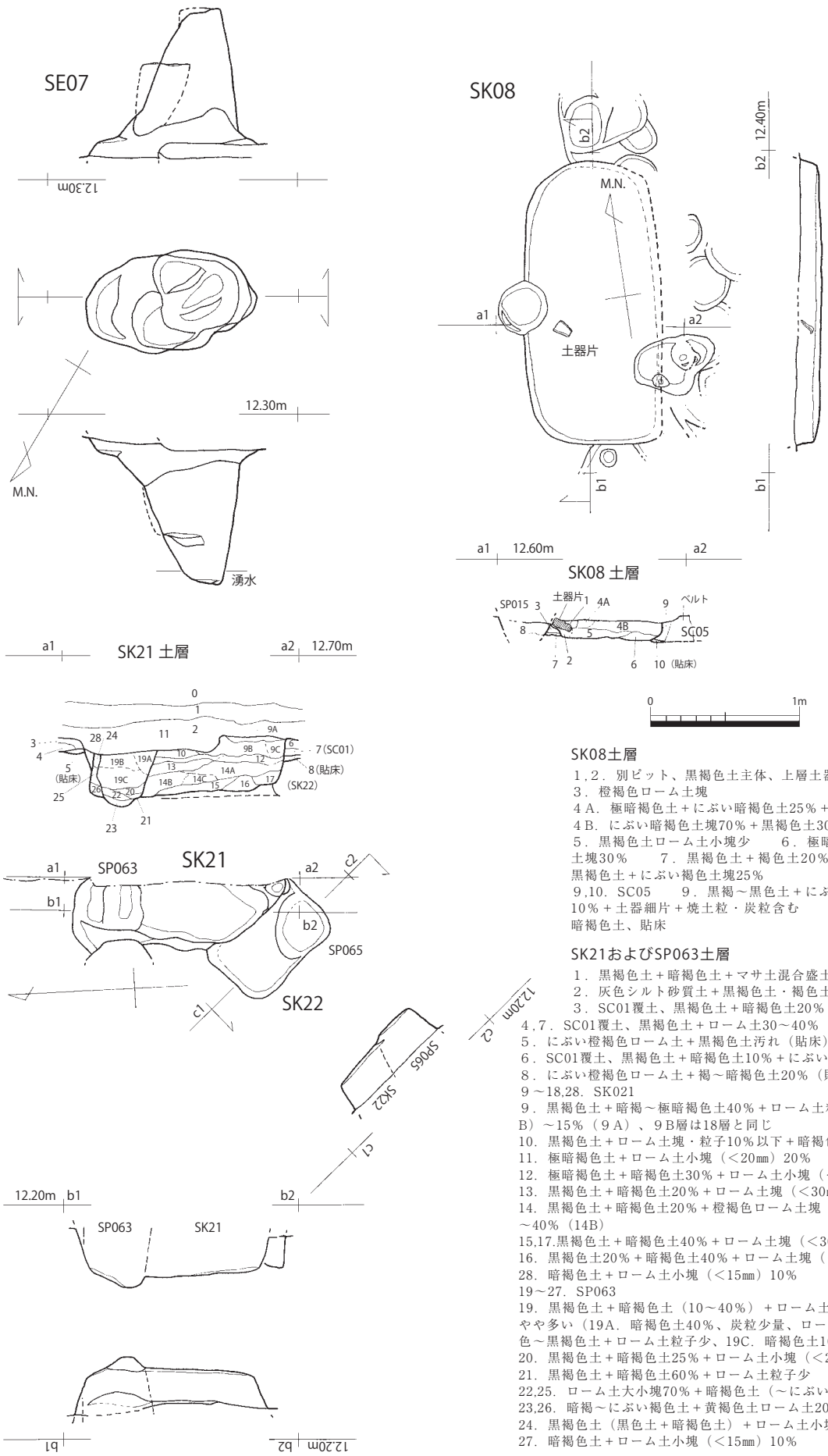
A．盛土（マサ土＋瓦礫）
B．旧耕作土（にぶい灰褐色土～暗灰色砂質土＋粗砂＋暗褐色土混合）
1～3．小ピット（暗褐色土～黒褐色土）
4～28．ピット（柱穴：柱抜き取りか）土層
4A,5,8～11,14,17,21．黒褐（～極暗褐）色土＋褐～暗褐色土5～10%（＋ローム土粒子僅か）
4B, 23．黒褐～極暗褐色土＋暗褐色土10～20%
6．暗褐色土＋褐灰色土20%＋褐色土20%
7．灰白～黄灰白色粘土＋暗褐灰色土10%
12,15,16,22．黒褐色土＋にぶい橙褐～褐色土20～30%
13．にぶい橙褐～褐色土＋黒褐色土40%
18．にぶい褐色土＋黒褐色土50%
19．極暗褐色土＋にぶい橙褐～褐色土35%
20,27．黒褐色土＋暗褐色土10～20%＋にぶい褐色土10%
24,25．黒褐～極暗褐色土＋にぶい橙褐色ローム土10～20%
26．（極）暗褐色土＋にぶい褐色ローム土10%
28．にぶい橙褐色ローム土＋暗褐色土20%
29～52．SK09土層
29,33B,34,35,40．黒褐色土主体（混入15%以下）
31．暗褐色土主体（混入10%）
32,33A,38．黒褐色土＋ローム混入20～30%
36．暗褐色土＋ローム土・褐色土混入30%
37．にぶい橙褐色ローム土80%＋黒褐色土少
39．黒褐色土＋にぶい橙褐～褐色土50%
41．にぶい橙褐～褐色土＋暗褐色土30%
42A．極暗褐（～黒褐）色土＋にぶい褐色土30%＋橙褐色ローム土（<10㎜）10%
43．暗褐～極暗褐色土＋にぶい橙褐～褐色土30～40%
42B,45．黒褐（～極暗褐）色土＋橙褐色ローム土40%
46,47．ローム土＋暗褐色土混入20～40%
48,49．暗褐～極暗褐色土＋ローム土汚れ
44,50～52．地山ローム崩れ＋暗褐～褐色土汚れ

Fig.10　SX123木棺墓、SK09（土壙墓＋ピット）実測図（1/20, 1/40）

ある。主柱穴は不明で、無いタイプのものか。中央の炉や土坑も不明である。時期は遺物が少なく不明確だが（Fig. 13-1 ～ 29）、一部に終末期があるのは見落としたピットなどの混入の恐れがあるため除くと（ベッドがないなど住居址形態が合わない）、後期とみられるものが複数あり（Fig.13-2,5,7,8,11,26,27）、おそらく後期前葉ないし中葉だろう。

・SC02（Fig.8 上）

SC05 に切られる方形住居。当初、SC05 より新しいと考えたが逆であった（Fig.8 上の土層図）。上面では北西隅以外は不明であったが、SC05 下部で南西隅が判明した（Fig.6）。A-B（B1 または B2）の二本主柱と考えられ、約 3.7 × 4.2 mの長方形住居であろう。方位は、N － 13° － W。床面ま



SK08土層

1,2．別ピット、黒褐色土主体、上層土器片
3．橙褐色ローム土塊
4A．極暗褐色土＋にぶい暗褐色土25％＋ローム土粒子10％
4B．にぶい暗褐色土塊70％＋黒褐色土30％
5．黒褐色土ローム土小塊少　6．極暗褐色土＋にぶい橙褐色土塊30％　7．黒褐色土＋褐色土20％　8．柱穴（新）、黒褐色土＋にぶい褐色土塊25％
9,10．SC05　9．黒褐～黒色土＋にぶい暗褐色土（＜15㎜）10％＋土器細片＋焼土粒・炭粒含む　10．橙褐色ローム土＋暗褐色土、貼床

SK21およびSP063土層

1．黒褐色土＋暗褐色土＋マサ土混合盛土
2．灰色シルト砂質土＋黒褐色土・褐色土混じり
3．SC01覆土、黒褐色土＋暗褐色土20％
4,7．SC01覆土、黒褐色土＋ローム土30～40％
5．にぶい橙褐色ローム土＋黒褐色土汚れ（貼床）
6．SC01覆土、黒褐色土＋暗褐色土10％＋にぶい橙褐色土10％
8．にぶい橙褐色ローム土＋褐～暗褐色土20％（貼床）
9～18,28．SK021
9．黒褐色土＋暗褐～極暗褐色土40％＋ローム土粒子（＜15㎜）5％（9B）～15％（9A）、9B層は18層と同じ
10．黒褐色土＋ローム土塊・粒子10％以下＋暗褐色土20％
11．極暗褐色土＋ローム土小塊（＜20㎜）20％
12．極暗褐色土＋暗褐色土30％＋ローム土小塊（＜20㎜）斑状30％
13．黒褐色土＋暗褐色土20％＋ローム土塊（＜30㎜）10％
14．黒褐色土＋暗褐色土20％＋橙褐色ローム土塊（＜70㎜）60％（14A）～40％（14B）
15,17.黒褐色土＋暗褐色土40％＋ローム土塊（＜30㎜）40％
16．黒褐色土20％＋暗褐色土40％＋ローム土塊（＜30㎜）40％斑状
28．暗褐色土＋ローム土小塊（＜15㎜）10％
19～27．SP063
19．黒褐色土＋暗褐色土（10～40％）＋ローム土粒子10％以下、土器片やや多い（19A．暗褐色土40％、炭粒少量、ローム土粒子5％、19B．黒色～黒褐色土＋ローム土粒子少、19C．暗褐色土10％、土器片多）
20．黒褐色土＋暗褐色土25％＋ローム土小塊（＜20㎜）斑状30％
21．黒褐色土＋暗褐色土60％＋ローム土粒子少
22,25．ローム土大小塊70％＋暗褐色土（～にぶい褐色土）
23,26．暗褐～にぶい褐色土＋黄褐色土ローム土20～30％（26は＜10㎜）
24．黒褐色土（黒色土＋暗褐色土）＋ローム土小塊（＜10㎜）15～20％
27．暗褐色土＋ローム土小塊（＜15㎜）10％

Fig.11　SE07, SK08, SK21, SK22実測図（1/40）

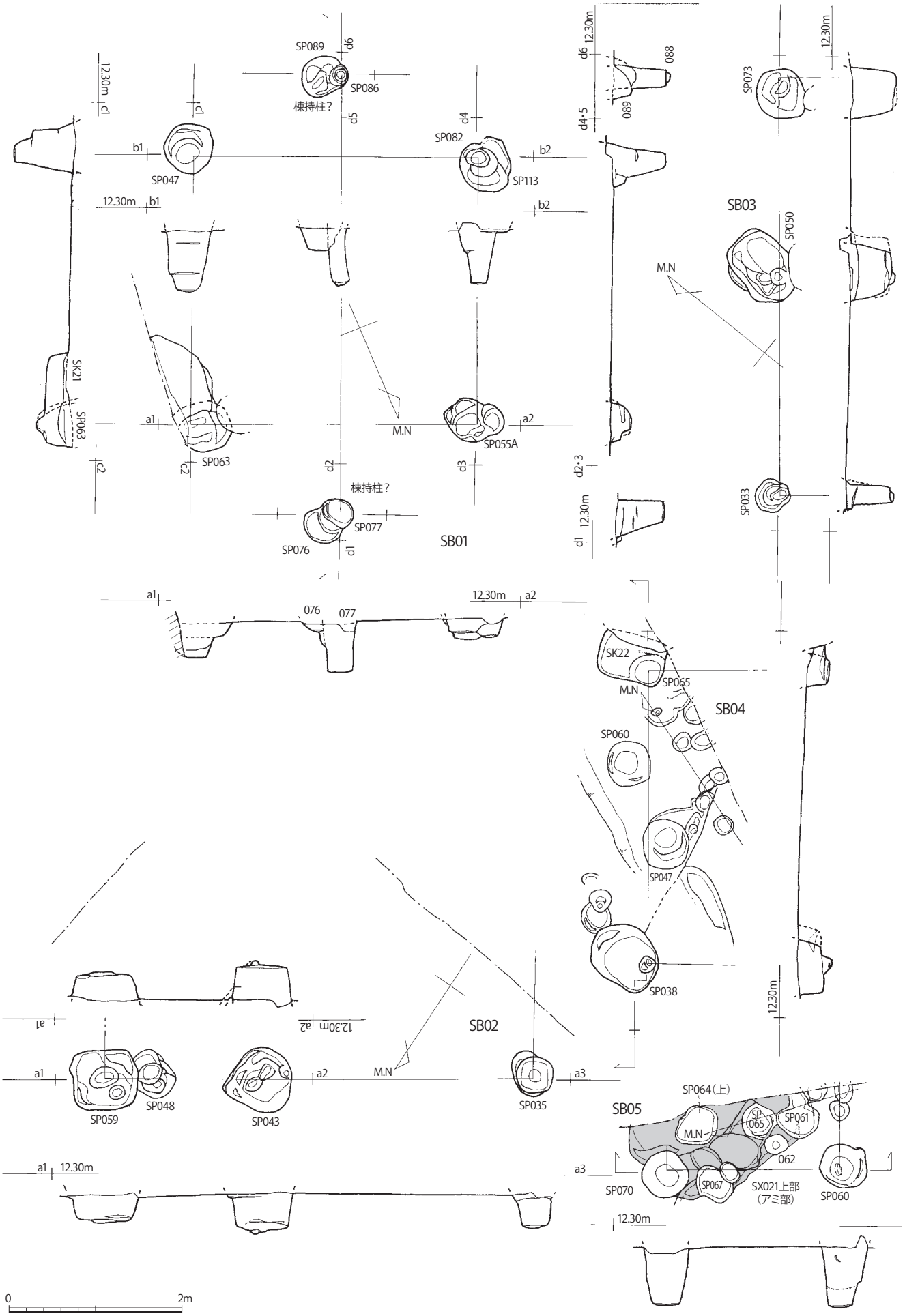


Fig.12　掘立柱建物実測図(1/60)

での深さは25㎝。薄いが貼床あり。なおSC04と重複関係にある可能性が微妙にあるが関係は不明である。時期は、一部出土遺物がSC05と混在したため確実に伴う土器が少ないが、須玖Ⅰ式古相の甕（Fig.14-12）が示すだろう。

・SC03（Fig.9）

SC05に切られ、SC04を切るとみられる長方形住居。南辺と西辺の一部が分かるが、北東隅はSC01で不明、北西隅はSK08で不明、南隅は調査区外のため規模が確定しないが（南東隅はある）、おそらく約3.3 × 4.1 mとなる。長軸方位は、N － 16° －W。主柱穴、屋内土坑、壁溝は不明でなかった可能性もある。貼床あり。SX037炉址は次のSC04に伴うと考えたが、SC03の中軸上にあることも注意される。時期は遺物が少なく不明だが（Fig.14-16など）、前後関係から弥生時代中期前葉の幅内だろう。

・SC04（Fig.9）

SC03とSC05に切られる推定隅丸長方形の住居址。東辺と西辺は直線をなさない。推定約4.1 × 5.95 m。方位はN － 63° －W。床面まで最深15㎝の遺存（SC03も同じ）。主柱穴は不明（なし？）、壁溝や屋内土坑も認められない。貼床はある。**SX037炉址**はSC05の掘り方下面で検出した（Fig.9下，巻頭図版１-4，PL. ３-6）。約50 × 85㎝の不整楕円形状土坑、中央が深くなりかなり焼けている。主軸方位（N － 75° －W）がSC04にやや近く、SC04に伴うと考えるが、SC03に伴う可能性もある。時期は、出土土器（Fig.14-17 ～ 21）から須玖Ⅰ式古相としてよい（Fig.14-17は「以東系」高坏か）。

（２）土坑・木棺墓など

・SX123（Fig.10上，巻頭図版１-2，PL. ４-7,8）

SC01北東側掘り方下部で検出した。調査期限が迫っていたため急ぎ掘削してしまったが、中央横断ベルトを残し掘削し、長軸に平行する両側板の痕跡土層が黒褐色土としてつかめた。両側板痕跡は平面的には掘り方底面にあまり及ばず、部分的にわずかに凹みがかかる程度である。それに比して、両短辺側の小口板痕跡は掘り方下部に明瞭で深い掘り込みがある。掘り方は長軸97㎝、東短辺が50㎝、西短辺が58㎝である。長軸方位は、N － 83° －W。側板・小口板痕跡の内法は、長軸75㎝、短軸22 ～ 25㎝であり、非常に小規模である。改葬や再葬などを想定しなければ、小児というより幼児の埋葬の可能性がある。時期であるが、遺物が直接伴わず断定できないが、少なくとも竪穴住居群（SC04が須玖Ⅰ式古相）以前、この遺構に直接伴わないが木棺墓上部のSC01を切り込むSP50から弥生時代前期後半（板付Ⅱｂ～Ⅱｃ式）の壺形土器片が出土しており（Fig.14-31,32）、関連すると考える。

・SK09（Fig.10下，PL. ４-3）

調査区北辺中央で検出した土坑。およそ残り25％前後が調査区外になるか。長軸約185㎝、短軸70㎝＋α（東側が広い梯子形平面だろう）、深度は約55㎝の遺存である。長軸方位は、N － 80°前後 －W。東辺、西辺は曲線をなす。ただし土層を確認すると遺構の東半は柱を抜いたような断面である。いくつかの解釈ができるが、新しい柱穴が切り込んでいると考えるか、この土坑全体が大型柱穴でありこの「柱穴」を柱の抜取り痕とすることもできる。西半の土層を見ると柱穴掘り方充填土とみることもできる。周囲の調査に正否が委ねられるが、大型建物の柱穴かもしれない。もう一つの解釈は、本来は土坑でありかつ土壙墓とするものである。SX123木棺墓と方位がほぼ直交することもある。これも周囲での遺構展開で分かるだろう。ただし時期は、覆土の土色や質から弥生時代～古墳時代前期の可能性が高いものの、出土遺物がわずかでありさらなる特定はできない。

・SK08（Fig.11右上，PL. ４-1）

SC05西辺を切る土坑。94 × 195㎝の略長方形土坑だが両短辺は丸くなる。長軸はN － 7° － Eで真北に近い。最深14㎝の遺存。なお東側ラインは土層ベルトの確認で掘りすぎが判明したので図では点線で復元している。覆土は黒褐色よりは暗褐色気味で、出土遺物に弥生土器があるが（Fig.14-24,25）、重複するSC05などからの混入で、実際は方位も考慮し飛鳥～奈良時代の遺構と判断する。

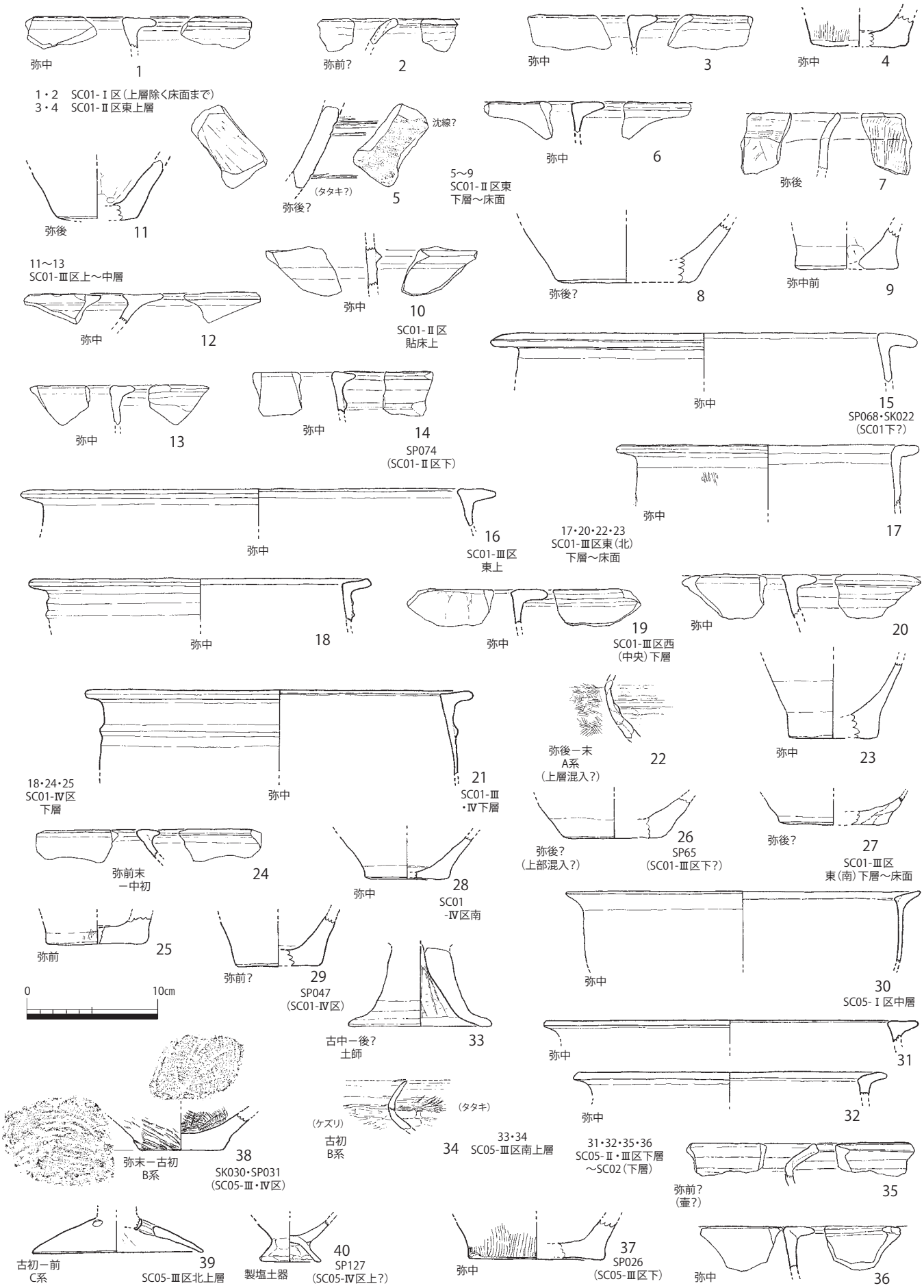


Fig.13　井尻B25次出土土器実測図(1)(1/4)

・SK21（Fig.11 左下，巻頭図版１-3，PL. ４-2）

調査区東縁でSC01を切るとした土坑。長軸146cm×46cm＋αの不整長方形か不整楕円形、最深40cm前後の遺存。長軸はＮ－３°－Ｅ前後の方位。当初はSC01覆土との区別が分からなかったが、最終的に調査区東壁の観察でSC01よりも新しいと判断した。さらに平面と土層断面から北側で柱穴**SP063**が切り込む。SP063は**建物SB01**を構成する柱穴である。図にはなく土層断面にもかからないが、SK21中央には上部で**SP064**が検出されている。土坑自体は、北側がわずかに低くなり、かつ一部オーバーハングし、弥生時代後期の土壙墓の一類型に類似するのが注意される。時期はSC01（弥生時代後期前葉）を切ること、SP064･SK21上層か不明だが後期後葉～末の土器片があり（Fig.15-3）、その間（後期中葉？）であろう。

・SK22（Fig.11 左下）

SK21に切られる小型長方形土坑。土坑としたが、**SP065**を柱抜取り痕とする柱穴の可能性が高い。**建物SB04**を構成する。SC01との関係は微妙であるが、SK22（SP065）と対になるとした**SP038**がSC01に切られているとみられ、それ以前か。SK22上位または上面検出のSP066・068からは弥生時代終末期ないし古墳時代初頭の土器片がある（Fig.15-13）。これよりは確実に古い。なおSC05よりは新しい。弥生時代中期後葉から後期初頭であろう。

（３）井戸

・SE07（Fig.11 左上，PL. ３-7,8）

SC01北隅角に切られる。約70×106cm前後の不整楕円形で長軸方位は、Ｎ－56°－Ｅ。当初は大型柱穴か土坑と考えたが、他より深く（最深約100cm）、底面で明らかに湧水があり、井戸址と判断した。最下部は鳥栖ロームから八女粘土への漸移層。壁面勾配は東側がなだらかで、西側が急である。掘り方壁面にステップ状のオーバーハングがあるのも素掘り井戸的。SC05との前後関係は微妙だが、出土土器には弥生時代後期初頭～前葉の器台があり（Fig.14-22）、SC05より新しく、SC01直前の時期であろう。

（４）掘立柱建物（Fig.12）

・SB01　SC01覆土を切る柱穴からなる１×１間の建物。整理過程で中軸上に対称して位置する深い柱穴の存在に気付き**（SP086，SP077）**、これが**独立棟持柱**と考えた。南東の**SP055A**のみ若干浅いが、ほぼ直角で各柱穴が結びつくので問題ないだろう。独立棟持柱の存在から、特殊な性格の小規模高床倉庫や、祠堂のような宗教的小建物（高床？）などを想定する。3.1×3.3 m、独立棟持柱間は5.1 m。方位は、Ｎ－23°－Ｅ。SP077から古墳時代初頭の土器が出土し（Fig.15-10）、その時期であろう。

・SB02　類似する覆土と掘り方（平面形や深度）の柱穴がほぼ直線に並び、建物の一辺とした。北側には展開せず、南側の調査区外に展開を想定する。推定１×２間。**SP043**の対面が調査区南東で確認されず梁間は4.2 m以上となるが、間の束柱が浅く削平されたとすべき。**SP059-SP044**間は1.85 m、**SP044-SP035**間は3.1 m、全長4.95 m。Ｎ－56°－Ｅ。**SP059**から弥生終末～古墳初頭の土器片（Fig.15-7,8）が出土し、時期を示すだろう。SC01→（時間幅あり）→SB02→SB01となる。

・SB03　同様に類似の覆土と深度の柱穴が並ぶので建物の一辺とした。SB02ほど掘り方平面の類似度はないが、しかし深さは一致する。推定１×２間。**SP050**の対面を想定する南東側に、調査区内で対称する柱穴が確認されず、梁間は3.8 m以上となる。**SP033-SP050**間は3.54 m、**SP050-SP073**間は2.34 m、全長4.88 m。方位はＮ－51°－Ｅ。建物構造や規模、方位からSB02と建替関係だろう。SP050に土器片が多くあるが（Fig.14-29～36）、下部の竪穴住居群からの混入に占められ時期を示さない。SC01より新しく、SB02→SB01が連続的（弥生末→古墳初頭）であるので、SB03はSB02の前だろう。

・SB04　SK22のところで述べたが、**SK22＝SP065**と**SP038**が組み合うとした。SC01に切られ、SC05を切る。柱間は3.4 m、方位はＮ－34°－Ｅ。竪穴住居に空白がある弥生時代中期後葉から後期初頭か。

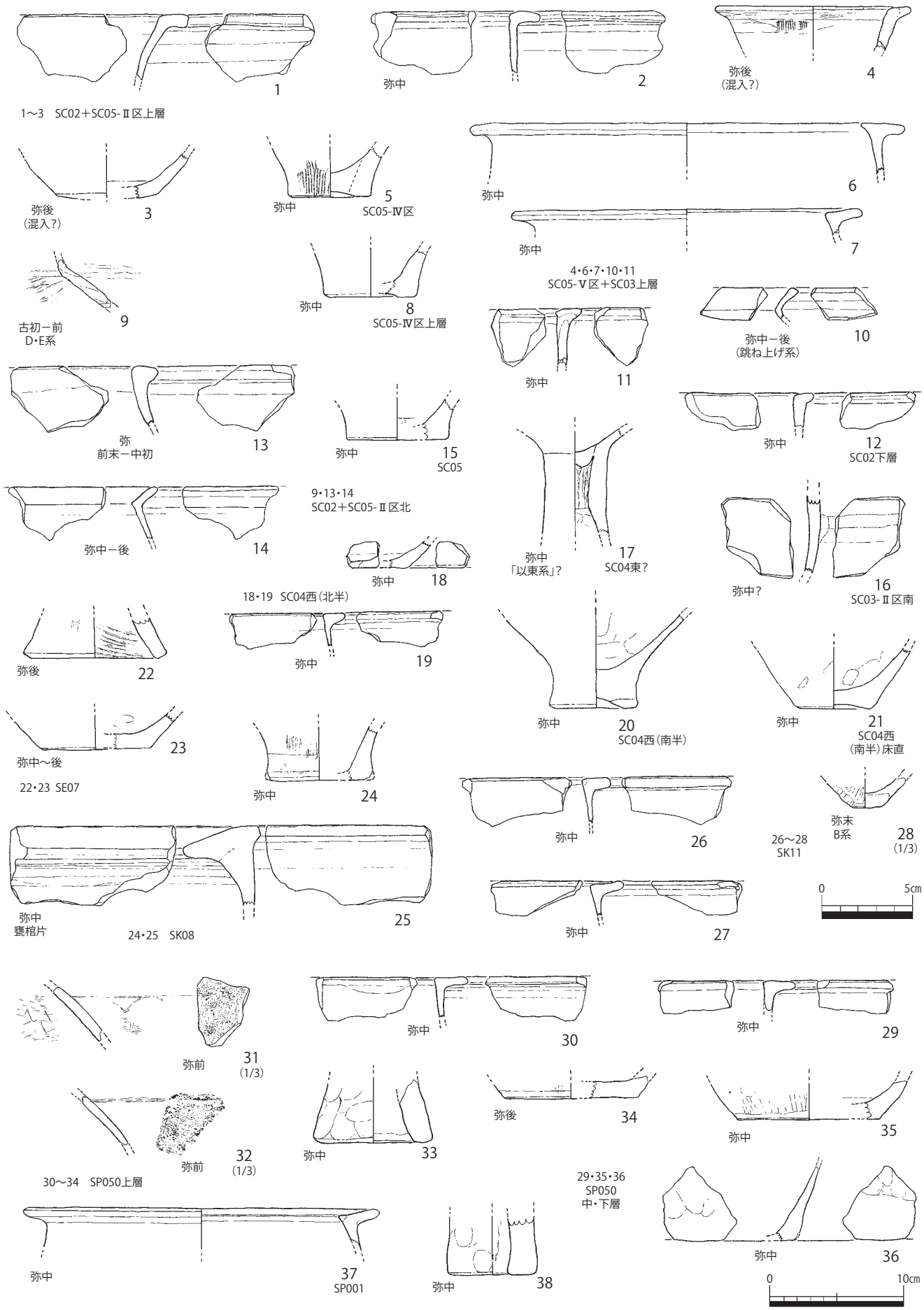


Fig.14　井尻B25次出土土器実測図(2)　(S=1/4, 一部1/3)

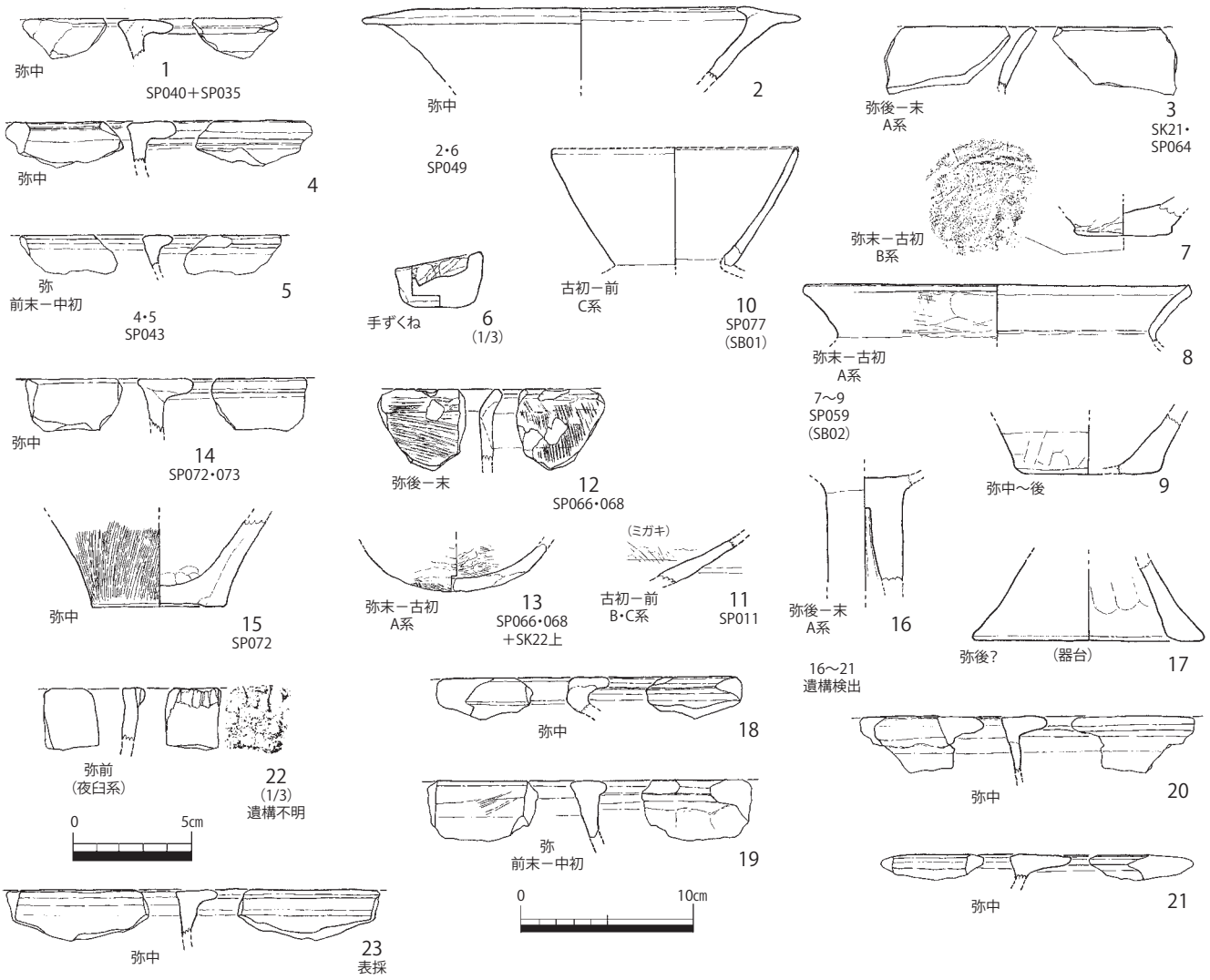


Fig.15　井尻B25次出土土器実測図(3)　(S=1/4, 一部1/3)

・**SB05**　SC01 東側上面で検出した **SP070** と **SP060** が掘り方形状や深さが類似し対応するとした。柱間は 2.0 mと狭くこれが梁間だろう。短軸になるが、方位はN－11°－E。時期は不明確だが、SK21 より新しく、正方位に近いので（ここまでの方位北は磁北、西偏約 6° 20′）、古代の可能性がある。

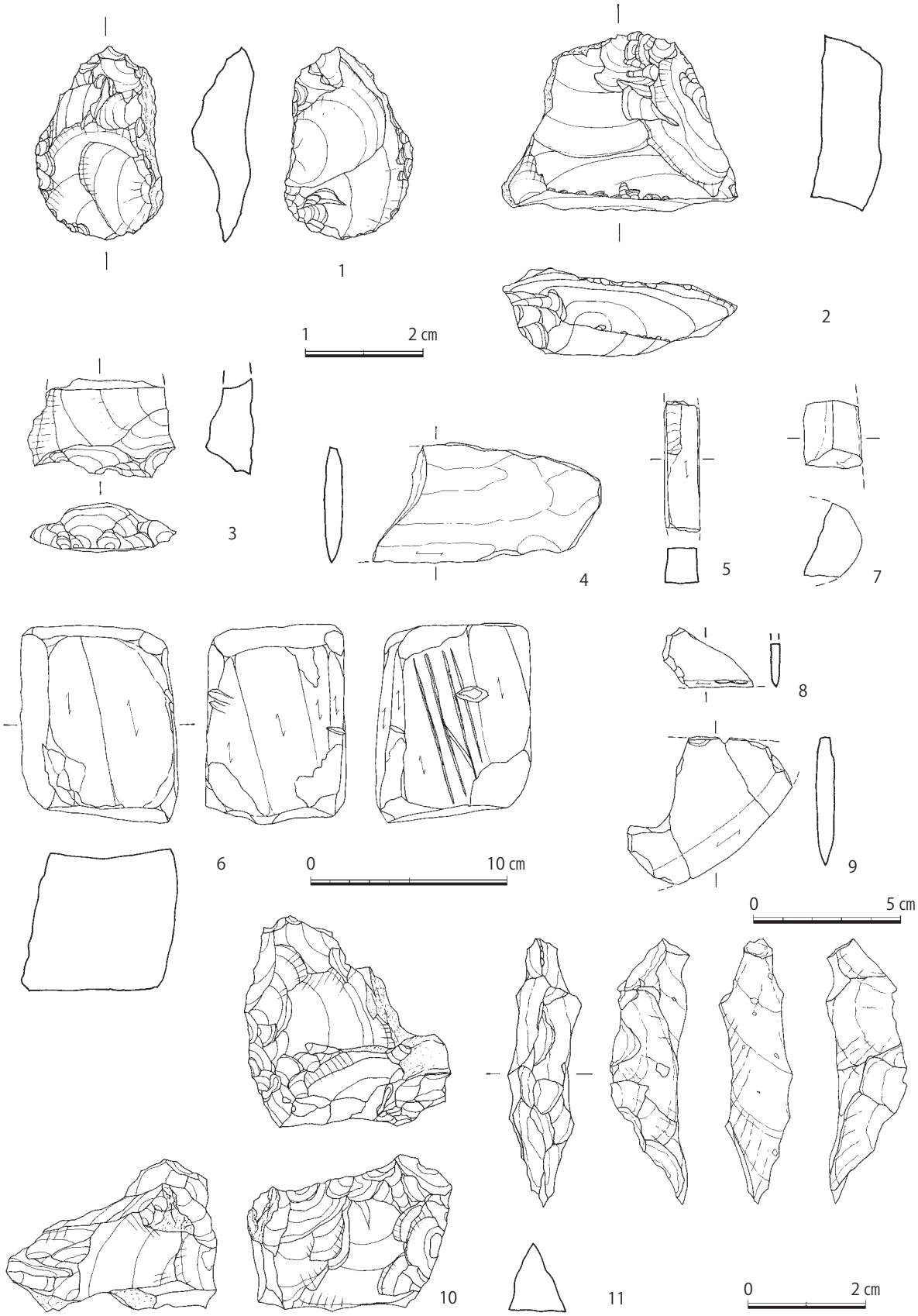
２．出土遺物

１．土器（Fig.13 ～ 15）

遺物の大半は弥生土器で、少量の古墳時代前期の古式土師器がある。飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器もあるが、いずれも小片で図化に堪えない。以下、紙幅の都合で各遺物について詳述できないので、挿図にはそれぞれの出土遺構や出土位置・層位を入れ、また遺物の時期を略称で示した。

＜凡例＞「弥」は弥生時代、「弥前」は弥生時代前期、「弥中」は同中期、「弥後」は同後期、「弥末」は同終末期。「前末」は前期末、「中初」は中期初頭、「中末」は中期末、「後初」は「後期初頭」など。「古」は古墳時代、「古初」は古墳時代初頭（ⅡA期）、「古前」は古墳時代前期。弥生時代終末期から古墳時代前期土器の時期区分や系統分類（「A系」「D系」など）は p.52 の参考文献（久住 1999）、および『笹原３』（－笹原遺跡第４次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1224 集、p.28）を参照のこと。弥生時代中期は田崎博之 1985、後期は久住・久住 2008 による（p.52 頁参考文献）。

以下、特記すべきものについて触れる。**Fig.13**-5 は沈線状の文様が入り、後期としたが不詳。7 は後期の鉢、11 は後期前葉～中葉の甕底部。22 は後期後葉～終末の壺だがおそらく混入、ピットを見



1～6.　SC01　　7.　SC03　　8・10.　SC05　　9.　SX21 北　　11. 遺構検出一括

Fig.16　井尻B25次出土石器実測図(1～3･10･11は1/1, 4･5･7～9は1/2, 6は1/3)

逃したか。25,29 は弥生前期甕の底部。26 は弥生後期で、SP065 は本来上部からもしくは SC01 に伴うピット。33 は古墳中期～後期の土師器高坏脚部か。井尻Ｂでは珍しい時期。２,35 は弥生前期壺の口縁部。38 はＢ系（伝統的Ｖ様式系）甕だがタタキ方向が逆向きに変容。40 は瀬戸内系製塩土器。34,38 ～ 40 の時期は古墳初頭前後でまとまり、見逃した遺構があった可能性あり。**Fig.14** － 3,4 は弥生後期の鉢および甕底部、9 は古墳前期前半の壺だがいずれもおそらく混入。10 は「跳ね上げ口縁」系で体部が張るが中期後半でよい。11 ～ 13 は中期初頭の可能性がある。14 は「内湾「く」字」系口縁の祖形で須玖Ⅰ式新相からⅡ式古相。17 は坏部の深い弥生中期の高坏で、丹塗がなく須玖Ⅰ式、坏部 - 脚部の接合が「充填法」の「Ｂ技法」（武末純一 1986「須玖式土器」『弥生文化の研究４　弥生土器Ⅱ』雄山閣）であり、「以東系」（実際は「東部系」とするほうが適切）に多いが、胎土は在地か。20 は須玖Ⅰ式古相の甕底部。25 は汲田式甕棺口縁部で、本来は須玖Ⅰ式の竪穴住居に伴う。31,32 は弥生前期後半の壺肩部で、31 は沈線＋弧文、32 は沈線。**Fig.15**-2 は須玖Ⅱ式古相の広口壺。6 は手づくねのミニチュア土器で、古墳時代前期か。10 は庄内系精製長頸壺。12 は弥生後期中頃前後の鉢または小型甕。13 は弥生終末～古墳初頭の在地系小型壺底部。17 は弥生後期の器台か。18 は須玖Ⅰ式の甕のバリエーションか。19 は前期末か中期初頭の可能性。22 は夜臼系（突帯文系）甕だが、刻み目の特徴や口縁部端面の特徴から板付Ⅱａ式まで下る。残念ながら出土遺構が不明である。

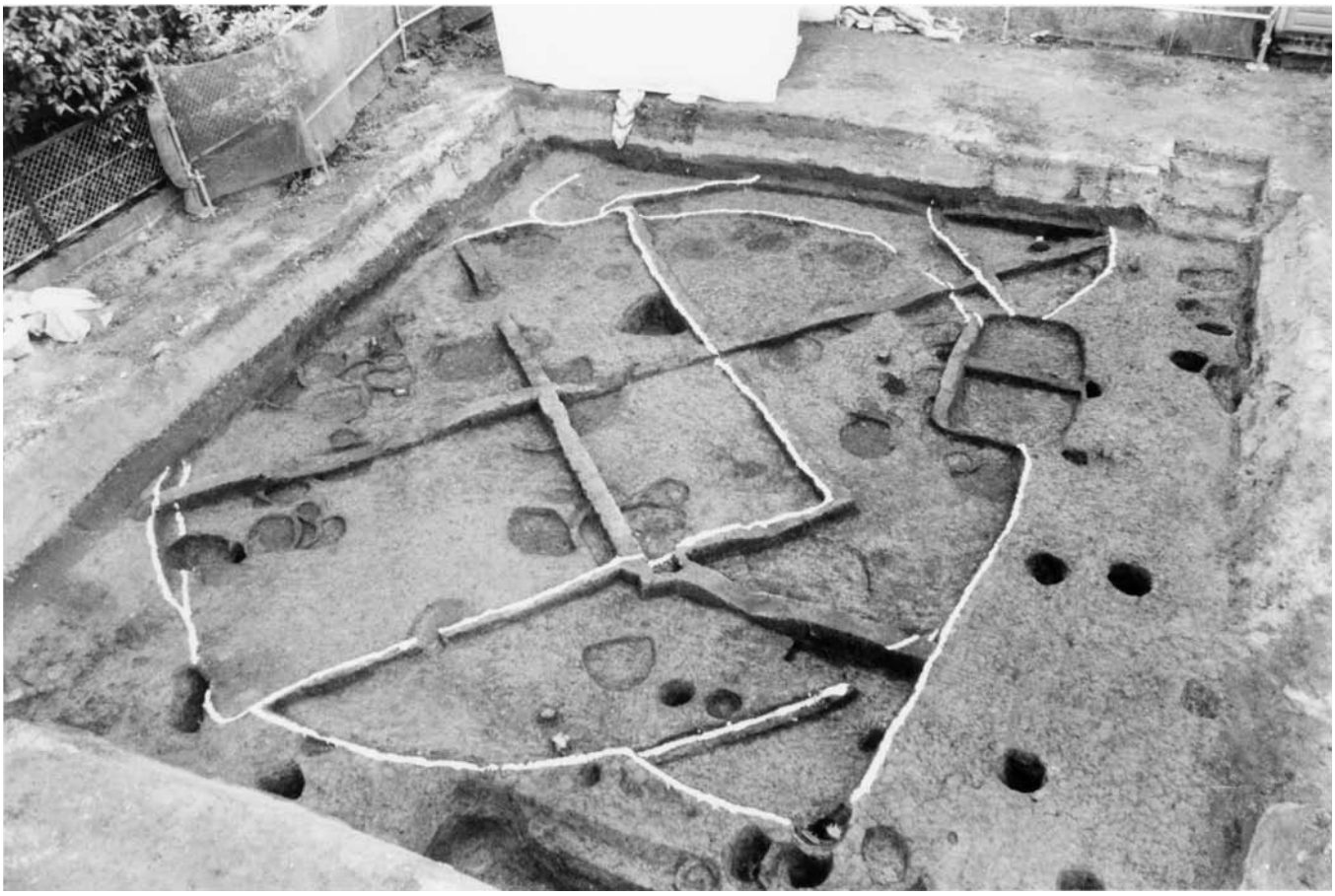
２．石器

25 次調査では主に弥生時代前半期の石器が出土し、その一部を図化した（Fig.16）。以下、各石器の概要や特記すべき事項について記すが、法量や詳しい観察については表１（p.40）を参照されたい。

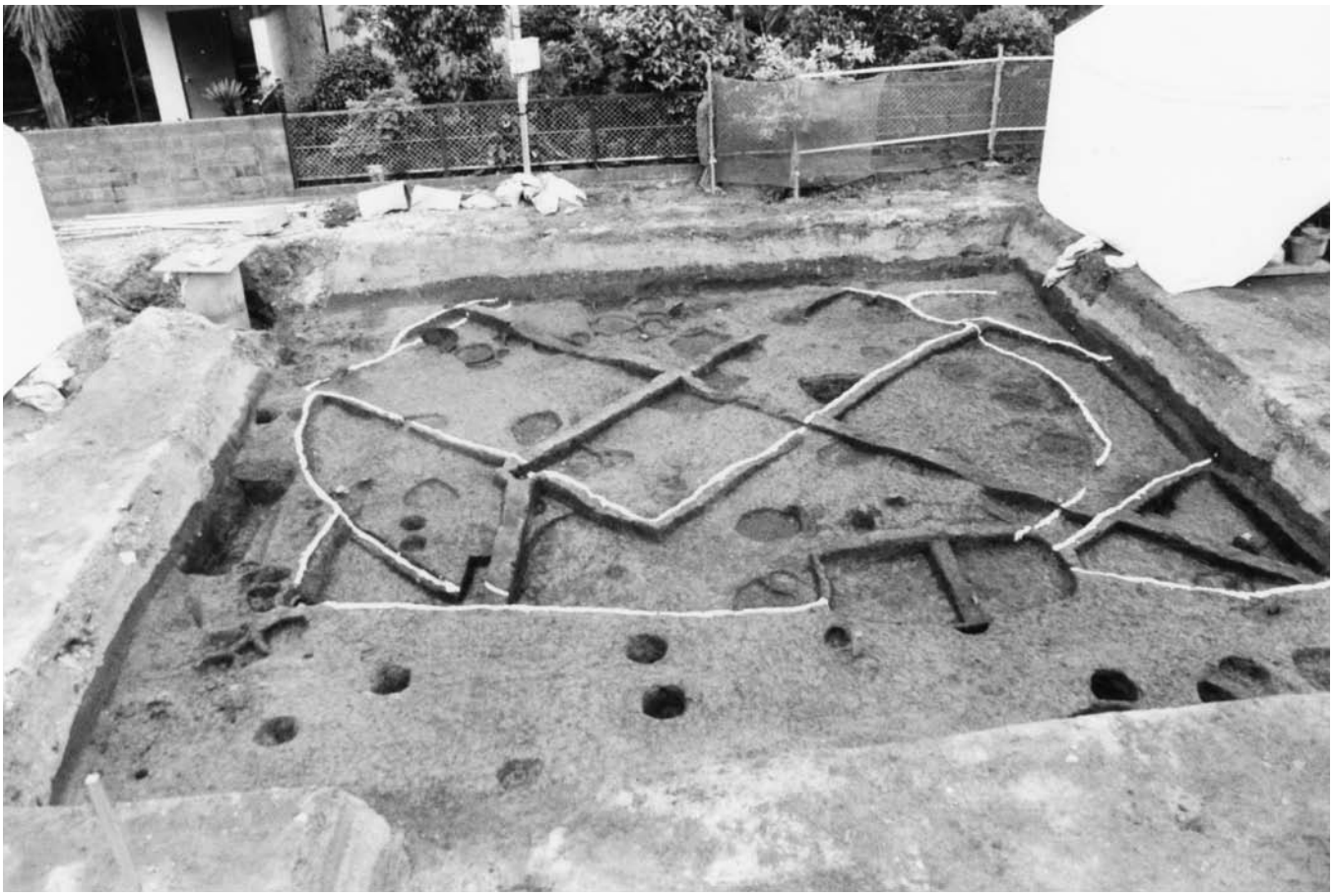
１～６は SC01 から出土した。１は黒曜石の二次調整剥片で、石鏃・石錐の未成品の可能性がある。２は黒曜石の使用痕剥片石器で、大型剥片の折断部縁辺に両面微細剥離が認められる。掻器として使用したと考えられる。３は黒曜石の二次調整剥片で、下端に刃部を形成しているが、微細剥離等の使用痕が認められない。体部の折れが生じた結果使用されなかったようだ。４は風化が著しく詳細は不明だが、片岩の刃器で、刃部は両面研磨成形され、断面形は前面がわずかに凸となり片刃状を呈す。磨製石鎌の可能性がある。５は砂岩の小型砥石で、上下端は欠損、四面に長軸方向の砥痕が認められる。６は砂岩の置き砥石で、三面が砥面、幅３～ 4cmの幅広な砥痕と幅 1mmの溝が形成される。７は SC03 から出土した玄武岩の太型蛤刃磨製石斧の破片で、２cm角程度に分割破砕されている。８は SC05 から出土した凝灰岩の石庖丁片で、前面の刃面幅が狭く、断面形が片刃状を呈す。９は SX21 北から出土した結晶片岩の石庖丁片で、平面形は半月形、刃部断面形は刃角の小さい両刃を呈す。10 は SC05 から出土した黒曜石の石核で、４cm角ほどの角礫素材から２cm程度の剥片を剥離している。11 は検出面から出土したサヌカイトの稜付き剥片（crested flake）で、使用痕は認められない。

その他、SC01 から黒曜石砕片・剥片、SC02 から花崗岩製砥石片、SC04 から黒曜石剥片、SC05 から黒曜石剥片、SC06 から頁岩製砥石片、SK11 から黒曜石砕片、SP003・004 から玄武岩砕片（石棺材片か）などが出土している。

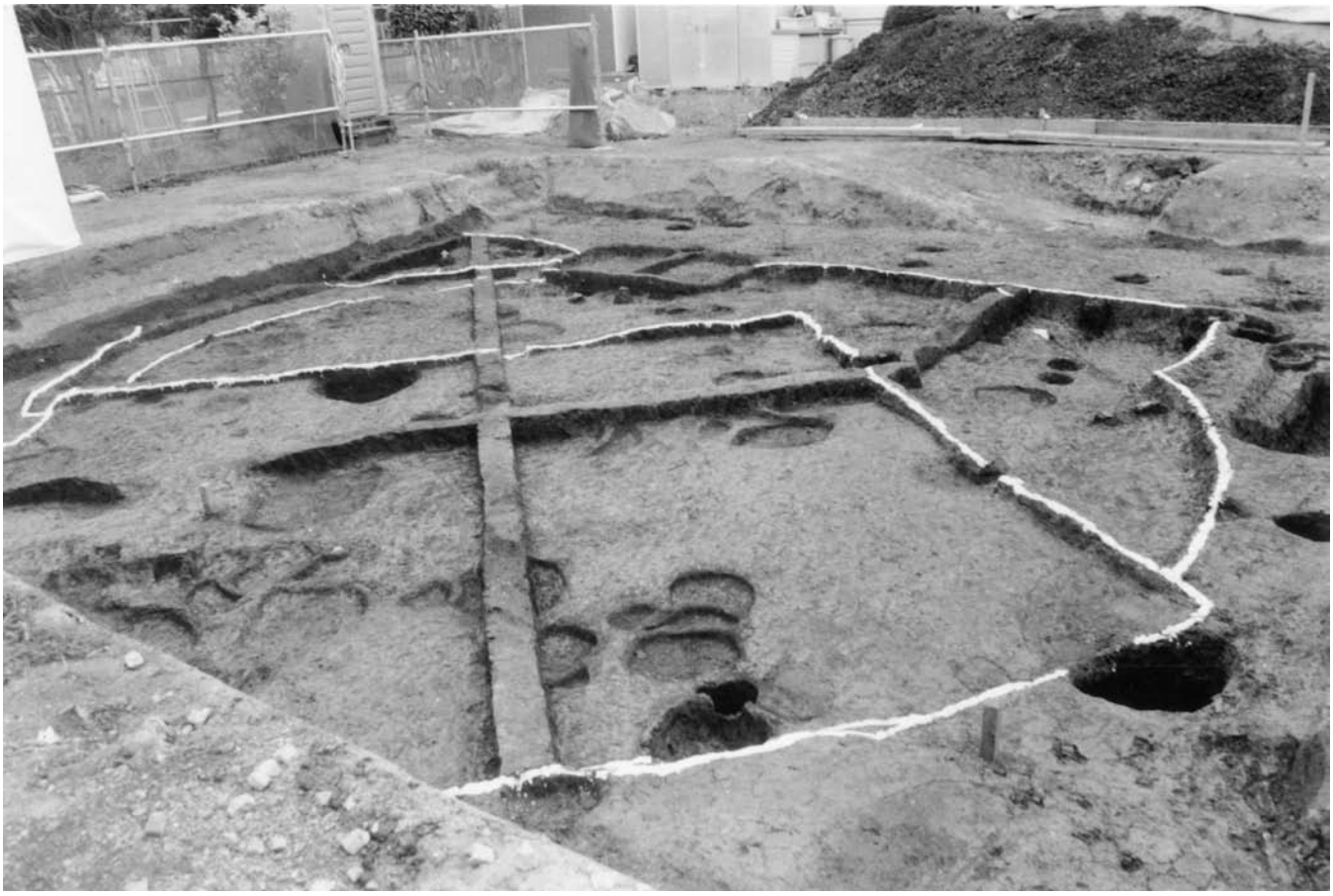
石器の時期については、11 は縦長剥片もしくは石刃を得るために石核に形成した鶏冠状稜を除去した際に生じた剥片で、風化度合いが強く後期旧石器時代に属する可能性もあるが、調整は比較的粗雑で剥離面も短いため、縄文時代後期の鈴桶型縦長剥片剥離技法に伴う可能性の方が高いと考える。その他の黒曜石石器については，すべて伊万里市腰岳産で，中・小型石材からの石鏃・石錐・小型刃器等素材の獲得を目的とした剥片剥離に伴うものであり、弥生時代前半期の所産と考えられる。その他磨製石鎌，磨製石庖丁，磨製石斧，砥石も弥生時代の所産と考えてよいであろう。この点は出土土器の傾向とも矛盾しない。（板倉有大）



１．井尻B25次調査全景（北西から）



２．井尻B25次調査全景（西から）



1．井尻B25次調査全景（北東から）

2．井尻B25次調査作業状況（南東から）

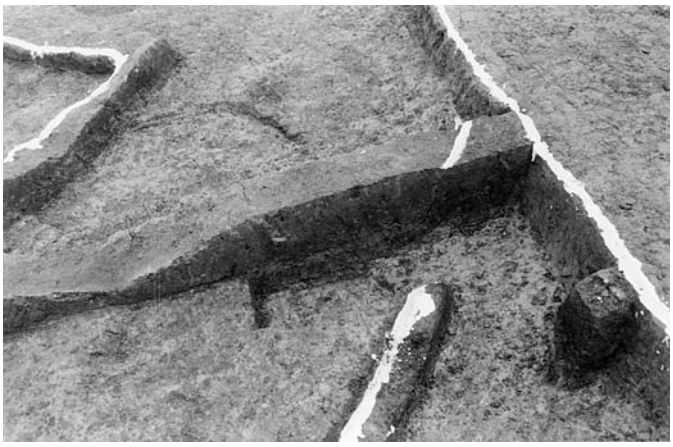
3．井尻B25次調査区西半（北から）

4．SC04－Ⅱ区土層・土器出土状況（南から）

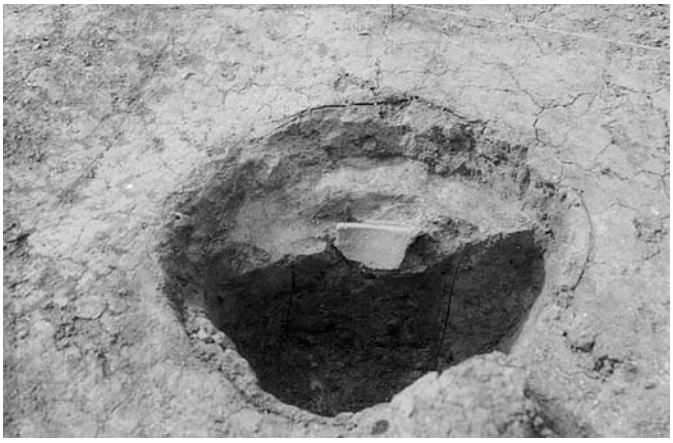
１．SCO01中央～東半土層（南東から）

２．SCO01東半－SC05東端土層（南東から）

３．SC05－SC01西半土層（南東から）



４．SC05－Ⅱ区・SC02土層（北から）



５．SC05（？）－SP60土層断面（南から）

６．SC04（？）－SK37炉址（北から）

７．SE07（南西から）

８．SE07（北西から）

1．SK08（南から）

2．SK21・SP64（西から）

3．SK09（南から）

4．SC05、SC04、SC03掘方下面（西から）

5．SC05、SC02掘方下面（北から）

6．SC05掘方下面（東から）

7．SK123木棺墓土層（西から）

8．SK123木棺墓（南から）

Ⅲ．第 32 次調査の報告

１．調査の概要と検出遺構

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区井尻一丁目 712 番 7 における、個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 20 年 8 月 5 日付で受理した（事前審査番号 20-2-370）。

これを受け、教育委員会（当時）埋蔵文化財第 1 課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡（分布地図番号 25-0090）に含まれており、周囲の発掘調査および試掘調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成 20 年 10 月 10 日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下 100cm 前後で弥生時代とみられる遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、基礎杭打ちを伴う工事計画は埋蔵文化財への影響が回避できないことから、住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成 20 年 11 月 7 日付で建築主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務に関する事前協議確認書を締結し、同年 11 月 10 日から発掘調査を実施することになった。なお調査費用については、当該建設工事が個人建築主による専用住宅建設であるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、国庫補助金を適用することになった。

本調査は予定通り平成 20 年 11 月 10 日に開始し、同年 12 月 8 日に終了した。資料整理および報告書作成は、当初の計画では翌年度に行う予定であったが、調査担当者の業務過多など諸般の事情によりその実施が遅れ、平成 26 年度に資料整理を行い、平成 27 年 3 月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は以下の表のとおりである。

２．調査の組織

調査主体：　福岡市教育委員会
調査委託：　個 人
（本調査　平成 20 年度）
調査総括：　教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課　課長　山口譲治
　　同課調査係長　米倉秀紀
調査庶務：　文化財管理課管理係　井上幸江
事前審査：　埋蔵文化財第 1 課事前審査係　阿部泰之
調査担当：　埋蔵文化財第 1 課調査係　久住猛雄
（資料整理・報告書作成　平成 26 年度）
整理・報告総括：　経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
　　同課調査第 1 係長　吉武 学
整理・報告庶務：　埋蔵文化財審査課管理係　横田 忍
整理・報告担当：　埋蔵文化財調査課調査第 1 係　久住猛雄

なお文化財部は組織改編のため平成 24 年 4 月 1 日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

遺跡名	井尻Ｂ遺跡	調査次数	32 次	調査略号	IGB-32
調査番号	0849	分布地図図幅名	井尻	遺跡登録番号	020090
申請地面積	220.92 ㎡	調査対象面積	98.90 ㎡	調査面積	98.20 ㎡
調査期間	平成 20（2008）年 11 月 10 日～ 12 月 8 日			事前審査番号	20-2-370
調査地	福岡市南区井尻一丁目 712 番 7				

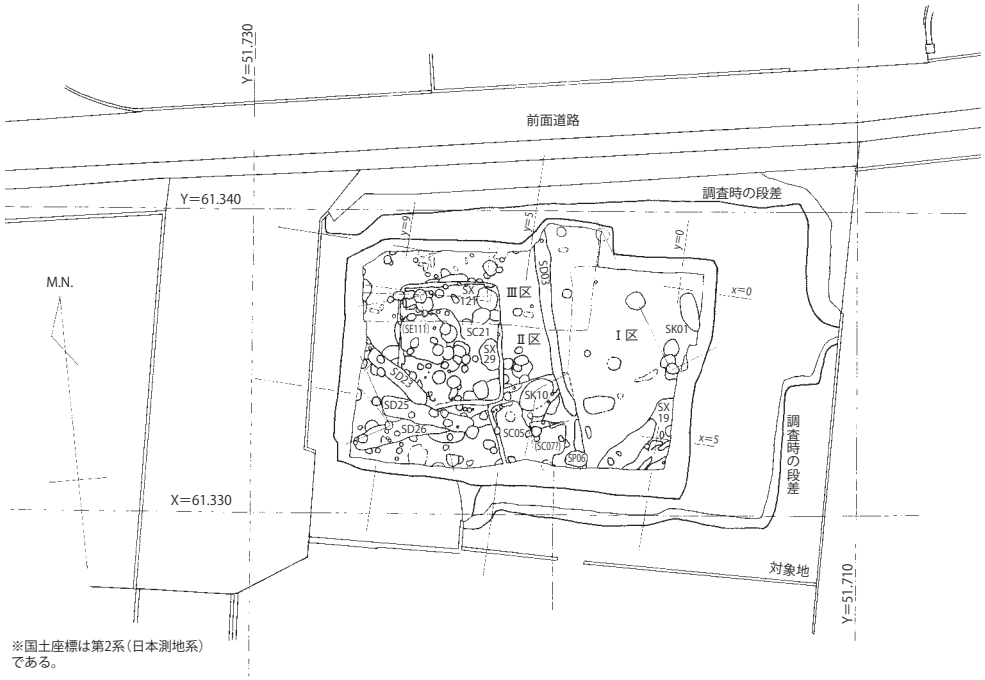
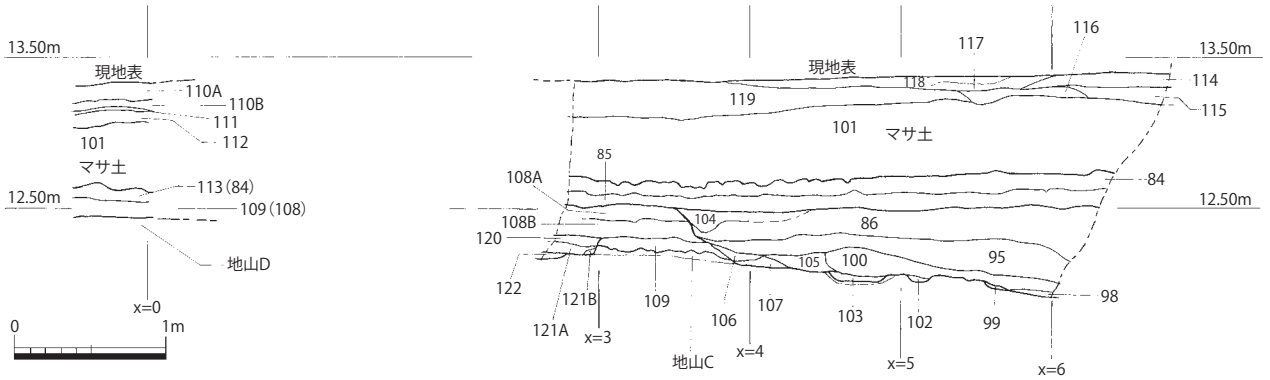


Fig.17　第32次調査区と周囲地割平面図(1/250)

3，調査の概要と基本層序

32 次調査地点は井尻Ｂ遺跡北半部中央、その西寄りに位置する（Fig.1)。周囲では南南西約 30 mに 10 次、北西約 60 mに 17 次調査Ｂ・Ｃ区の各地点があり、これらから濃密な遺構分布が想定される地区である（Fig.2)。32 次の周囲道路面標高は、北側が 12.6 ～ 12.8 mで北西が低く、西側が 12.8 ～ 13.0 mである。調査地は道路面より高く、南西が 13.0 m、北西が 13.2 m、東側が 13.4 m前後であった（敷地南・東側はさらに一段高く 13.6 ～ 13.7 m)。その地表から、南東は GL － 120 ～ 130cm、北東は GL － 100cm、北側から北西は GL － 80 ～ 90cm、南西は GL － 70cm、南側は GL － 80 ～ 90cmを重機で掘削し下げると、標高 12.0 ～ 12.5 mで赤褐～橙色の鳥栖ローム地山上面となり遺構を検出した。地山上面



Ⅰ区東壁（北）土層

101. 明褐～にぶい黄橙色 (10YR7/4-7/6) マサ土＋橙色 (5YR6/6-6/8) 土ブロック混入
110A. にぶい黄褐色 (10YR5/4-4/3) 土+10YR～7.5YR7/6マサ土+バラス多+ガレキ多
110B. 10YR7/6-7. 5YR7/6マサ土+バラス
111.　バラス多+マサ土
112.　暗褐色 (7.5YR3/4) 土60%+バラス+明褐色ローム土塊+明黄褐色マサ土
113 (=84) .　暗褐～褐色 (7.5YR4/3-3/4) シルト土、しまりややあり～やや甘い、粘性乏しい、砂レキ・炭粒わずか (旧耕作土)
109.　暗赤褐色 (5YR (-7.5YR) 3/4) 土、しまりあり(～ややあり)、粘性少し
地山D. (にぶい)赤褐色 (5YR4/4-4/6) ローム土、粘性あり、しまりあり

Ⅰ区東壁（北）土層

地山C.　赤褐色 (5YR4/6) ローム土、しまりあり、粘性ややあり(Fig.27-SP02 A・Bより粘性弱い)
84.　旧耕作土 (最近の盛土以前) 、10YR3/2-3/3 シルト土 (少し青みがある) 、しまりやや甘い、粘性欠、炭粒・砂レキ少し含む
85. わずかに灰色味のある暗赤褐 (5YR4/3-3/4) 色～にぶい赤褐色(5YR4/4)　シルト土+10YR3/3－4/3シルト少し含む、しまりややあり、粘性欠、酸化マンガン粒沈殿含む、上辺酸化鉄沈殿黄橙色化、86層よりやや明るい
86.　暗赤褐色 (5(-7.5)YR3/4-4/4) シルト土、しまりややあり～やや甘い、粘性少～ややあり
98. にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト土+5YR4/6ローム土塊10～20%、しまりやや甘い、粘性少
99. 103層と同じ (地山にしみ入る)
100.　にぶい赤褐色 (5YR4/3-4/4) シルト土+5YR5/6-4/6ローム土粒子・小塊全体に5%、しまりややあり、粘性ややあり～少 (105層より少し明るく、しまりやや甘い)
102.　にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト土+5YR5/6ローム土40% 、しまりやや甘い、粘性ややあり
103.　5YR5/6ローム土(地山)+7.5YR3/4土　しみしまりあり　粘性あり
104. 108層より少し暗い(黒い)、7.5YR3/4シルト土+ローム粒子わずか、炭粒わずか、しまりやや甘い、粘性わずか
105. 5YR4/4(-3/4)シルト土 (100層より少し暗い)＋ローム土粒子・小塊5%以下、しまりややあり (100層よりしまる) 、粘性少し
106. 暗赤褐色 (5YR3/4) シルト土+ローム土粒子少、しまり(やや)甘い、粘性ややあり～少し
107. 106層から漸移　5YR-7.5YR3/4土+ローム土粒子・小塊5YR4/6斑状5～10%　、しまりやや甘い、粘性ややあり、炭粒あり
108. (86層と似るが間に104層が入るので分離) 5YR-7.5YR3/4シルト土、炭粒わずか、　しまりやや甘い～ややあり／108A(上). しまりややあり／108B(下). しまりやや甘い
109. 5YR3/4-4/4シルト土 (120層より少し明るい)＋5YR4/6-5/6ローム土粒・小塊斑状5%＋炭粒わずか、しまりやや甘い、粘性少
114.　マサ土+バラス(小)混合
115.　暗褐色土(+マサ土少し)
116.　暗褐色土主体+マサ土・バラス混合
117.　バラス(小)+粗砂礫+暗褐色シルト土
118.　101層マサ土+110層マサ土+117層バラス(小)混合
119. 101層マサ土+バラス・瓦礫混合
120.　5YR3/4(-4/4)シルト土+5YR4/6ローム土粒・小塊10%以下、しまり(やや)甘い、粘性少
121A. 5YR3/4(-4/4)シルト土+5YR4/6ローム土、しまりやや甘い、粘性ややあり
121B. 5YR4/4-4/6ローム土+5YR3/4シルト土30%、しまり甘い、粘性ややあり
122. 7.5-5YR3/4暗褐～暗赤褐色シルト土+極暗褐色 (7.5YR2/3) 土塊30%+5YR4/6ローム土塊30%、しまり甘い、粘性ややあり

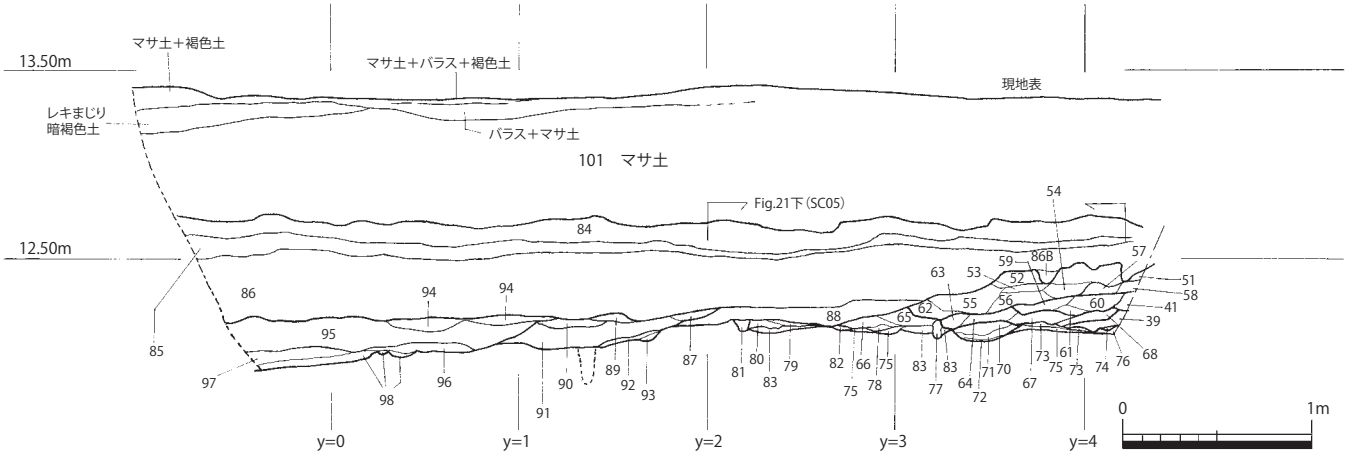
Fig.18　第32次調査Ⅰ区東壁土層図(1/50)

Fig.19　第32次調査遺構平面図(1/80)

は南東側が低く、近隣の試掘調査成果も考慮すると東側に狭小な谷地形が入るらしい。一方、北側と南西側が若干高い。基本層序は以下の通り。南側東半と東側は旧表土の上に近年の厚い盛土がある(Fig.18・20, 巻頭図版１-5, PL. ２-5)。調査区全体に近年の盛土（バラスおよびマサ土層）があり、その下は旧表土（水田耕作土など)、さらに二次的な包含層（畠耕作土か）があり、その下が鳥栖ローム上面となる。なお発掘調査は、廃土処理の都合から調査区を３分割（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区）して実施している（Fig.17)。

検出遺構は、竪穴住居２棟以上（同一地点での建替、さらに貼床のみの竪穴住居痕跡と覆土上部に浅い竪穴痕跡あり)、井戸１基（掘り直しがあり実質２基)、溝状遺構４条（うち３条は竪穴住居掘り方か)、土坑４基以上、柱穴多数である（Fig.19)。一部の柱穴から掘立柱建物を４棟復元した。竪穴住居２棟は弥生後期後葉～終末期、いずれも平面長方形でベッド状遺構を２辺ないし３辺に有し、２本主柱構造と推定される。２棟は重複し、新しい **SC21** からは主に床面直上から**ガラス玉類**が 80 点以上出土し、さらに柱穴 **SX121** からも 10 点出土した（巻頭図版３・４)。SC21 の貼床下部には大型土坑があり、ローム下部の八女粘土まで掘削され湧水があり、井戸と判断した（**SE111**)。遺物が少ないが弥生中期前葉に遡るとみられ、福岡平野では比較的古い井戸である。検出遺構の多くは弥生時代から古墳時代前期だが、柱穴などから飛鳥時代末～奈良時代の須恵器や瓦も出土し、井尻Ｂの他地点と同様に古代前期もある。

出土遺物は弥生土器が多く（中期～終末期)、また古墳時代前期の古式土師器、飛鳥～奈良時代の須恵器や瓦が少し、わずかに中世の土師器がある。土器類は６箱程度出土し、土器類以外の遺物は併せて１箱程度である。鉄器２点、石器・石製品が 16 点ある。特筆すべきは**ガラス玉類（小玉・管玉）94 点**の出土である。なおガラス玉類は細かい遺物のため、慎重に掘削しても全てを原位置で把握できないため、検出以後は SC21 と SX121 の覆土の大半について土壌洗浄を行った。そのため、現地での調査終了



(Fig.18も参照)
51～58, 62　包含層？
39, 59～61, 63, 64, 67, 68　SC07？
41, 65, 66, 69, 73, 74, 77～81　SC05覆土
75, 76, 82, 83 SC05貼床
70～72　土坑？(SC07下部？またはSC05炉址)
39. 暗褐～暗赤褐色(5YR(-7.5YR)3/4)シルト土+5YR5/6-4/6ローム土粒・小塊やや多(斑状10%)+極暗褐～黒褐色土粒子わずか、しまりややあり、粘性少、
41. 5-7.5YR3/4シルト土、しまりやや甘い～ややあり、粘性少、ローム土粒少
51. 5YR3/4(-3/3)シルト土+ローム土粒少、　しまりややあり、粘性少し
52. 7.5YR3/3-5YR3/3シルト土+褐色(5YR-7.5YR4/4)シルト土15%+5YR74/4-4/6ローム土5%弱、粘性少～ややあり、しまりやや甘い～ややあり、土器小片あり、焼土わずか、86層より暗く55層より少し明るい
53. 暗赤褐～暗褐色(5YR(3/-3)3/4)シルト土+7.5-5YR2/3黒褐色土+にぶい暗褐色土ブロック20%+5YR5/6ローム土粒・小塊少し、やや粘性あり、しまりややあり、炭粒ごくわずか、55層より明るく53層よりわずかに暗い
54. 暗赤褐～暗褐色(5-7.5YR3/4～3/3)シルト土主体+7.5-5YR2/3極暗褐色土塊20%+5YR5/6ローム土粒・小塊少し、53層よりわずかに暗い
55. 暗褐～極暗赤褐色(5YR3/3-2/3(～7.5YR3/3)土+5YR4/6ローム土粒・小塊まばら5%、86層に比べて黒い(暗い)、土器小片あり、焼土・炭粒わずか、しまりあり、粘性ややあり(～あり)
56. 暗褐～暗赤褐色(5-7.5YR3/3)シルト土+5YR4/6ローム土粒(やや大)斑状5～10%+極暗褐色(7.5YR2/3)シルト土塊わずか(5%以下)、53層より暗い、しまりややあり、粘性ややあり
57. 7.5(-5)YR3/4-3/3　シルト土、まじり少ない(ローム土粒わずか)、しまりややあり、粘性少～ややあり
58. 暗赤褐色(5YR(3/3-)3/4)土シルト+5YR4/6ローム土粒5%、しまりやや甘い、粘性少、57層より明るい
59.　56層より明るい褐色(5-7.5YR3/3-3/4)シルト土+5YR4/6ローム土粒　斑状5%以下、しまり(やや)あり、粘性ややあり
60.　57層より少し明るく59層より少し明るい5YR(-7.5YR)3/4シルト土+5YR4/6ローム土粒・小塊斑状5～10%、しまりややあり～あり、粘性少～ややあり
61. 5YR-7.5YR3/3シルト土35%+5YR4/6ローム土塊大主体、しまりあり、粘性あり
62.　5-7.5YR3/3シルト土+5YR5/6-4/6ローム土塊大小15%+ローム土粒少、粘性(やや)あり、しまりやや甘い～ややあり
63.　極赤褐色(5YR3/3-2/3～7.5YR2/3)+ローム土粒わずか、しまりあり(ややあり)　、粘性あり　炭粒・土器片わずか
64. 暗赤褐色(5YR-7.5YR3/3)土主体+5YR4/6ローム土塊20%、しまりあり、粘性ややあり
65. 5YR-7.5YR3/3シルト土+ローム土粒少、しまりややあり～あり、粘性あり
66A. 暗赤褐色(5～7.5YR3/3-3/4土+5YR4/6-5/6ローム土塊、しまりややあり～やや甘い、粘性あり、土器小片少、周囲より少し明るい
66B.　66A層より少し暗い、5-7.5YR3/3シルト土+ローム土粒・小塊10%+土器細片、しまりやや甘い、粘性あり
67. 7.5-5YR3/3(64層とほぼ同色)　シルト土+　極暗赤褐色(～黒褐) 7.5YR2/3シルト土塊(小)わずか+5YR4/6ローム土粒・小塊斑状15～20%、り、粘性ややあり
68. 暗赤褐～暗褐色(7.5YR-5YR3/4)土+5YR4/4-4/6ローム土(小塊10%斑状、しまりややあり～あり、粘性少し
69.　41層より漸移し少し暗い、5(-7.5)YR3/3シルト土+5YR6/6-5/6ローム土粒・小塊10%+極暗褐色(7.5YR2/3)土5%、しまりややあり
70.　5(-7.5)YR3/3シルト土+5YR4/4-4/6ローム土粒・小塊斑状10%、しまりやや甘い、粘性少
71.　73層から続く黒色層、黒褐(極暗褐)色(7.5YR)2/3シルト40%+暗褐色(7.5YR3/3)50%+ローム土粒少+焼土粒わずか、しまり(やや)甘い、　粘性少し、炉址?
72. 暗褐色(7.5YR3/3)土+5YR4/6ローム土塊30%、　しまりやや甘い、粘性ややあり
73. 黒褐～極暗褐色(7.5YR2/2-2/3)シルト土60～70%+5YR4/6ローム土塊30%、しまりやや甘い、粘性ややあり
74. 暗褐色(7.5YR3/3)土+5YR4/6ローム土小塊30%　、しまりやや甘い、粘性ややあり
75.　赤褐色(5YR4/6)ローム土+極暗褐色(7.5YR2/3)土25%、しまりあり、粘性あり(貼床)、83層より黒褐～暗褐色土混入多い
76.　貼床　5YR4/6ローム土+5YR3/3暗赤褐色土20%、しまりあり、粘性あり
77. 杭跡?、5YR3/4(-4/4)粘質シルト土+5YR(4/4-)4/6ローム土20%、しまり甘い、粘性ややあり
78.　赤褐色(5YR4/6)ローム土+暗褐色(7.5YR3/4)土35%、しまり(ややあり、粘性ややあり、貼床より軟らかい
79.　にぶい赤褐～暗赤褐色(5YR3/4-4/3)土+ローム土粒子5%、粘性あり、しまりやや甘い
80.　暗褐色(5YR3/3-3/4)粘質シルト土+5YR4/6ローム小土塊15%+暗褐色(7.5YR3/3-2/3)土20%　、しまりやや甘い、粘性ややあり
81. 7.5～5YR3/3-3/4　シルト土+5YR4/6ローム土塊30%+7.5YR2/3シルト土少、しまりややあり、粘性ややあり
82.　暗赤褐～にぶい赤褐色(5YR)色土+5YR4/6ローム土10%、しまりやや甘い、粘性あり
83. 赤褐色(5YR4/6)ローム土+暗褐色(5～7.5YR2/3-3/3)土10%、しまりあり(かたい)、粘性あり、貼床土
84～86. Fig.18参照
86A.　86層土+7.5YR3/3～3/4シルト土少し含む、しまりやや甘い、粘性ややあり
86B.5-7.5YR3/4シルト土、しまり甘い、粘性少
87.　86層の5-7.5YR3/4シルト土+5YR4/6ローム土小塊15%+焼土粒含む
88.　暗褐色(7.5YR3/4-3/3)シルト土、86層よりやや暗い、粘性少～ややあり、しまりやや甘い
89. 暗褐色(7.5YR3/4)土+5YR4/4～4/6ローム土塊10%、やや粘性、しまりややあり
90. 5YR4/4-3/4シルト土+ローム土粒少、しまりややあり、粘性少、95層に漸移
91. 95層より少し明るいが赤くない、5～7.5YR4/4～3/4シルト土+5YR4/6ローム土粒・小塊5%、しまりややあり、粘性ややあり(95層よりあり)
92. にぶい赤褐色(5RY4/3～4/4)～暗赤褐色(5YR3/4)土+ローム5YR4/6土小ブロック15%、しまり・粘性あり
93. 5YR5/6ローム土+5YR4/4-3/4シルト土少
94. 5YR4/3-3/4土+5YR4/6-5/6ローム土塊25%+暗褐色～極暗褐色(7.5YR3/3-2/3)色シルト土小塊わずか、粘性ややあり、しまりやや甘い
95. 5YR4/4わずか+砂礫ごくわずか、しまりやや甘い、粘性ややあり～少し、90層から漸移
96. 5YR4/3-4/4(-3/4)シルト土+ローム土粒少、　しまりややあり(～やや甘い)、粘性ややあり
97. 5YR3/4シルト土+ローム土粒子・小塊、粘性わずか、しまりやや甘い

Fig.20　第32次調査Ⅰ区南壁土層図(1/40)

後もさらに数日間土壌洗浄による玉類の抽出を実施し、その結果計94点のうち70点を洗浄で検出した。

発掘調査は、遺構検出面までの表土深度のため廃土量からため3分割せざるを得ず、それでも敷地狭小で廃土処理に苦労した。遺構密度も小さくなく、さらに調査途中でガラス玉類をまとまって検出したため、併行して土壌洗浄を行うことも含めてより慎重な調査作業をせざるを得なくなった。そのため、調査期間は休日も返上する日があるなど、厳しいものになったことを付記しておく。

4．検出遺構

（1）竪穴住居

・SC05（Fig.21，巻頭図版1-5，PL. 1-3～5，PL. 2-5,6）

Ⅰ区南西からⅡ区南東で検出した長方形住居。東西2.75 m、南北3.25 m以上で、住居の約1/3が調査区外と想定される。床面まで最深30cmの遺存である。長軸方位はN－14°－Wである（以下、32次報告では方位北は国土座標北）。Ⅱ区の遺構確認時、当初はSC21→SC05と認識したが、若干掘り下げた段階で逆の切合いと判断した（巻頭図版2-2，PL. 2-9）。他はSD03、SP105、SP06、SK10に切られる。北側にベッド状遺構（高床部）があり（当初ベッド部を「**SC11**」とした）、短辺L字形だが、東側が幅広く方形状（1.6×1.75 m）となり、北西側は幅0.5 mと狭い。ベッド部は居間部床面より15cm前後高い。ベッド北辺と東辺を除く各辺に壁溝があり、ベッドの下端も南辺に仕切溝がある。屋内土坑や炉址は確認していない。貼床は全体にあるがベッド部以外の居間部は薄く、ベッド部は場所により厚い。住居北東隅は削平されるがベッドよりさらに一段高い。**SP09**は（Fig.26下中央）、土器出土状況（PL. 2-1）とⅠ区西壁土層（Fig.21左下）から上部から切り込むとみたが、ほぼ中軸上で二本主柱とした場合

Fig.21　SC05、SC07実測図（1/40）

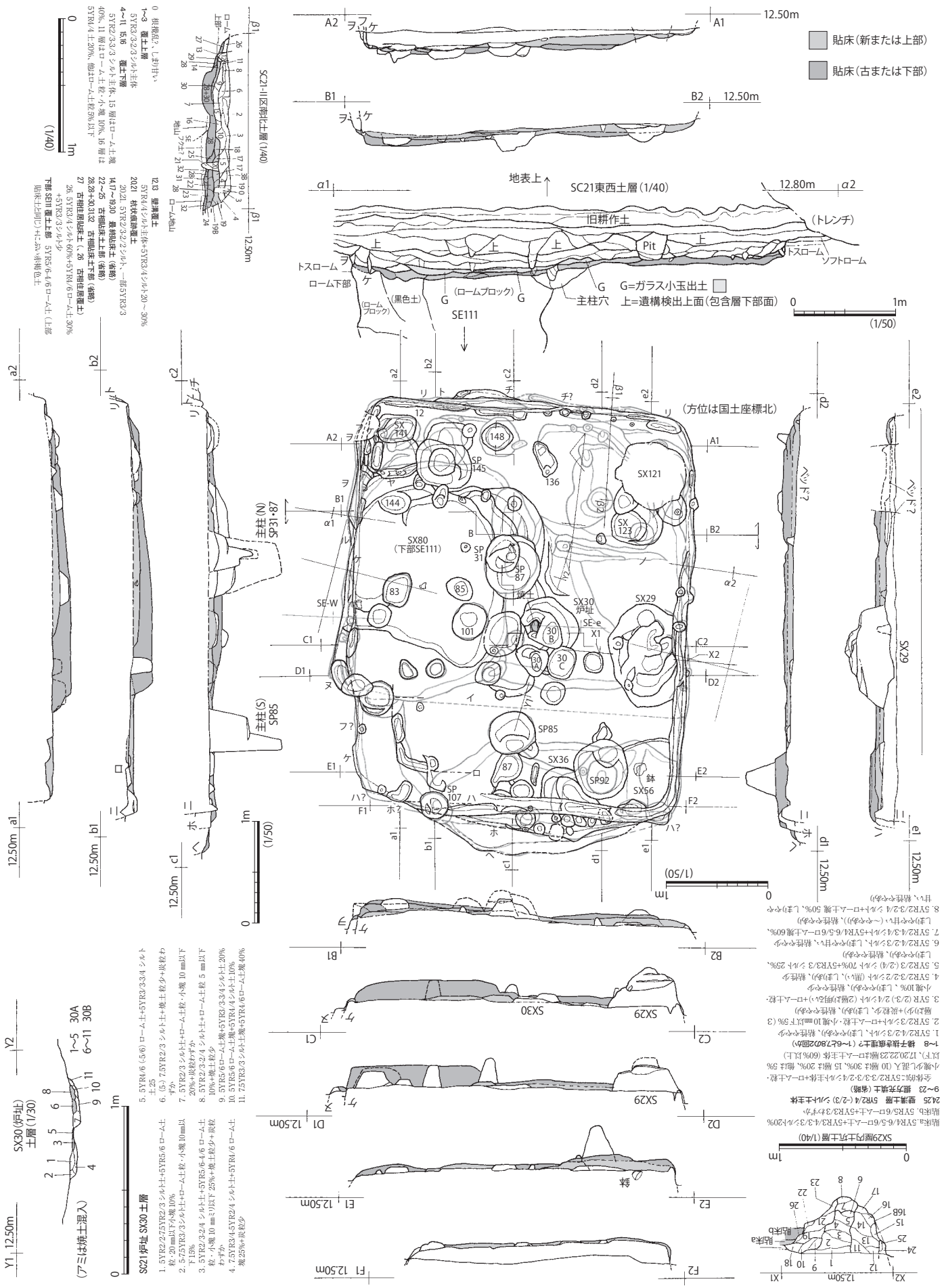


Fig.22　SC21実測図(1/50、土層図は1/30, 1/40)

に相応しい位置にあり、上部ピットと下部のSC05に伴う柱穴は別であった可能性がある。南側主柱は不明で調査区外だろう。貼床をはがした掘方は顕著な凹凸はなく、ベッドも地山削り出しが基礎にあった（PL. 1-3, PL. 2-10）。なおベッド中央南辺に斜めの別の遺構ラインが入り、上層で平面的に検出できなかった別の小型竪穴住居（**SC07**）があったらしいことなど、出土遺物の帰属と遺構の時期が問題となる。SC05を切るSP09（上部）には弥生時代終末期の壺（Fig.28-1）があるがこれ以前、またSC05を切るSC21は弥生後期後葉でありそれ以前である。しかし出土土器（Fig.28-2～16）には終末期が多い。ただしその多くは上層ないしベッド部上（SK10や小ピットが重複）である。居間部の下層遺物には中期末～後期初頭がある（Fig.28-2,3）。ところがそれではL字形ベッドを有する竪穴住居形態のとしてはやや古い。おそらく、覆土中だが後期中葉前後の土器片がSC05の時期であろう（Fig.28-8,10,11）。

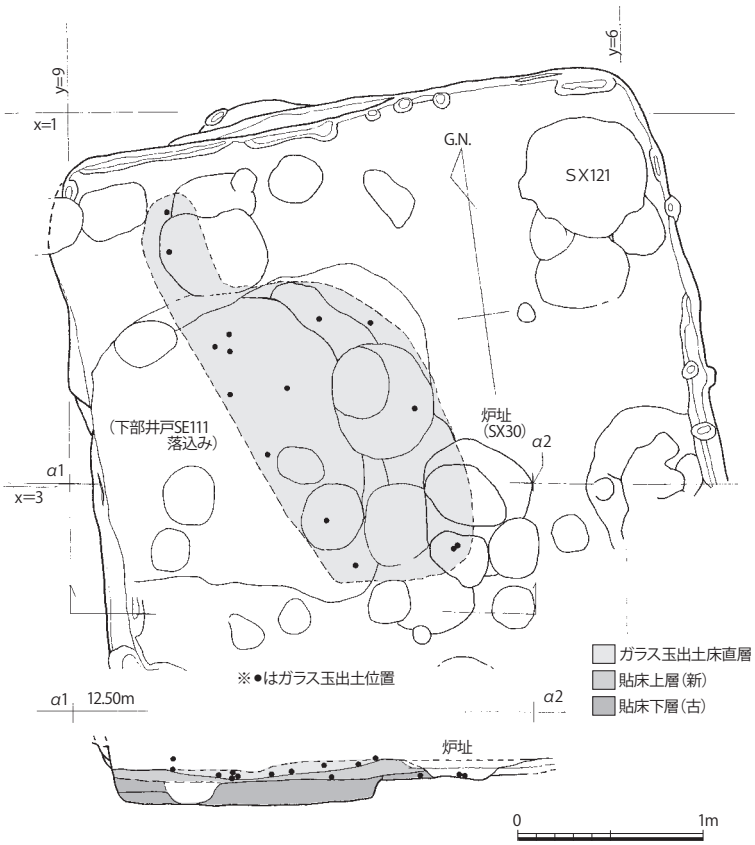


Fig.23　SC21ガラス玉類出土状況（1/40）

・SC07（Fig.21）

SC05の北側ベッドで異なる方位の段差があり、小型竪穴住居の北辺と判断した。Ⅰ区西壁土層（Fig.21左下）とⅠ区南壁土層（Fig.20）の観察から対応する土層境界が分かり、プランを図上復元した。東西1.68 m×南北1.5 m以上、方位はN－3°－Eと推定する。北側はベッド状だった可能性があり、土層断面から南側居間部との段差は6～7cm。確認した北辺には壁溝はないが小ピット列がある。SC05のベッド部以外で「SC05上層」とした遺物の一部は鉄鎌（Fig.30-5）も含めSC07の覆土に帰属する可能性がある。

・SC21（Fig.22，表表紙写真，PL. 3-1，PL. 4-5，PL. 5-3）

Ⅱ区で南側2/3を、Ⅲ区で北側1/3を検出した長方形住居。南北4.05 m×東西3.2 m、長軸はN－4°－W。床面まで最深20cmしか遺存しない。北側にベッド状遺構があり、居間部から5cm未満しか段差がない。片側短辺L字形である。壁溝はベッド部も含めほぼ全周するが、南西隅付近はない。ベッド部の下端南辺にも仕切溝がある（ベッド東半南側下端の溝は貼床除去後に判明）。ベッド西半の幅は0.7 m、中軸で東が広くなり幅1.4 mとなる。長軸二本主柱構造である（**SP31・87－SP85**）。**炉址（SX30）**は中央よりやや東で検出した（Fig.22左下に土層，PL.3-6）。炉址の凹みは3箇所あり、複数回の建替痕跡と対応する。東辺中央やや南に**壁際土坑SX29**がある。土層を観察すると（Fig.22右下，PL. 3-3）、中央に柱の抜取り痕がある。また一度掘り方を埋めた後に壁溝が築かれている。抜取り痕はよく見ると複数ある。おそらくこの土坑は、梯子ないしその支柱を埋めた**出入口施設**と考えられ、壁溝に重複して二つの小ピットがあるのも関係施設であろう（PL. 3-5）。掘り方埋土（充填土）からは石製品（砥石、石皿）などが出土しているが（PL. 3-4）、祭祀行為かもしれない。貼床はほぼ全面にあり、ベッド部は多くは貼床で整形している。掘り方は凹凸があり（PL. 4-1，PL. 5-4）、特に下部で井

戸が検出され部分は大きく凹み（SX80）貼床が厚く、南辺も若干凹んでいる（SX56,SX36）。貼床は土層を見ると大きく二段階、おそらく三段階があり、炉址の数と一致する。住居プランもよく観察すると、出入口が想定される東辺を除き、各辺に複数時期の壁がある。最初は西辺「ル－ヌ」から壁が屈曲し、「イ」に南辺が来る正方形に近い住居（南北3.0ｍ×東西3.4ｍ）だった可能性がある。北辺は最終壁面の「リ」の外に「チ」があるが、これは掘り方かもしれない。しかし西辺は最終壁面の「ケ－ハ」以外に「ヲ」「ル」「ヌ」がある（PL. ３-2）。さらに南辺は最初は不整形に張り出す「ヘ」があり、「ホ」の壁面ラインには壁溝はないが小ピット列があり、確実に一時期の南辺だろう。「ホ」の時

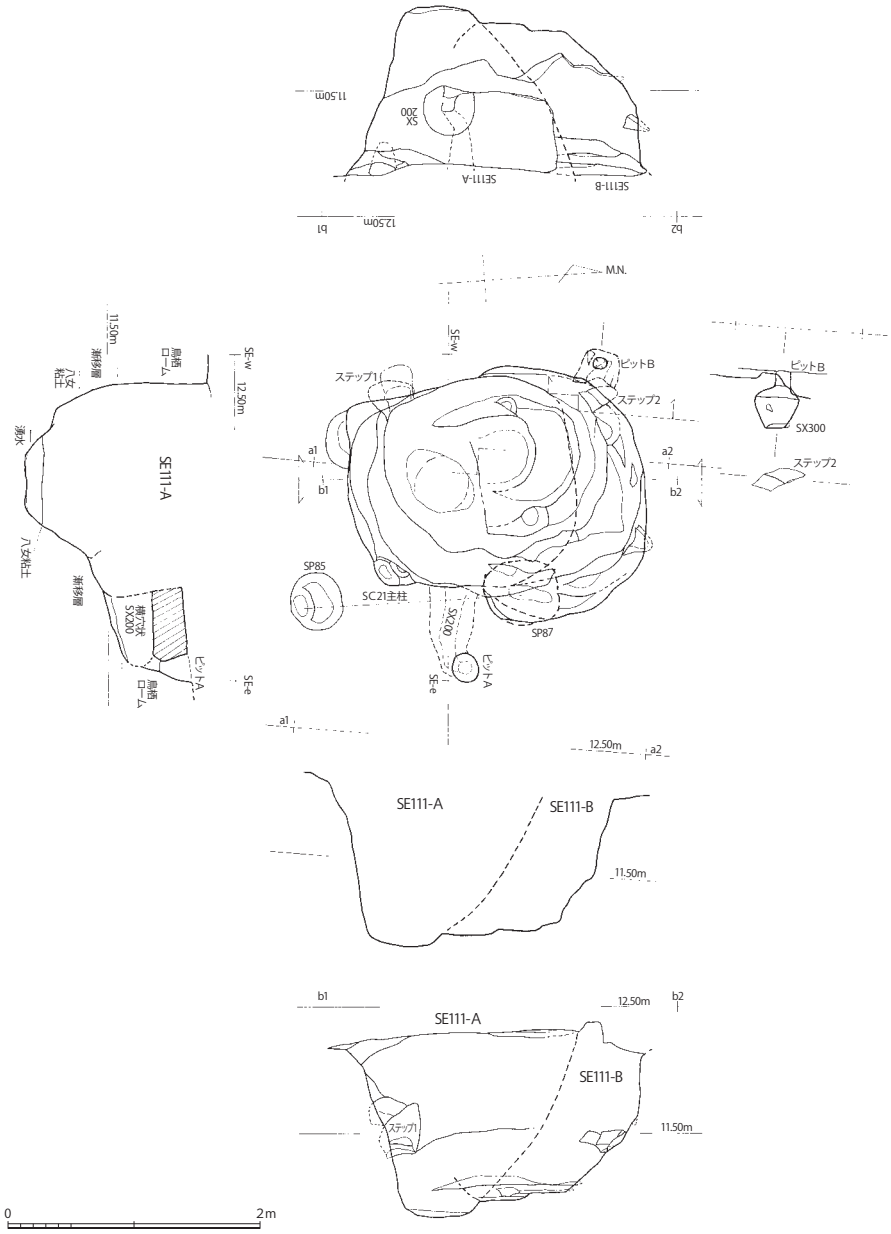


Fig.24　SE111実測図（1/60）

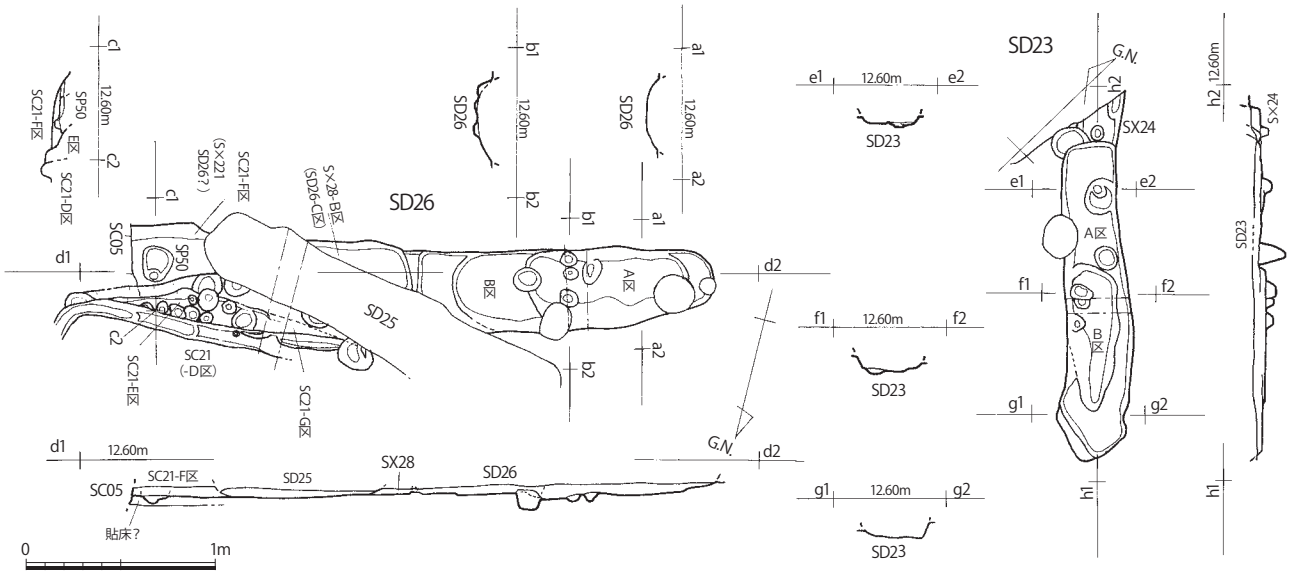


Fig.25　溝状土坑実測図（1/40）

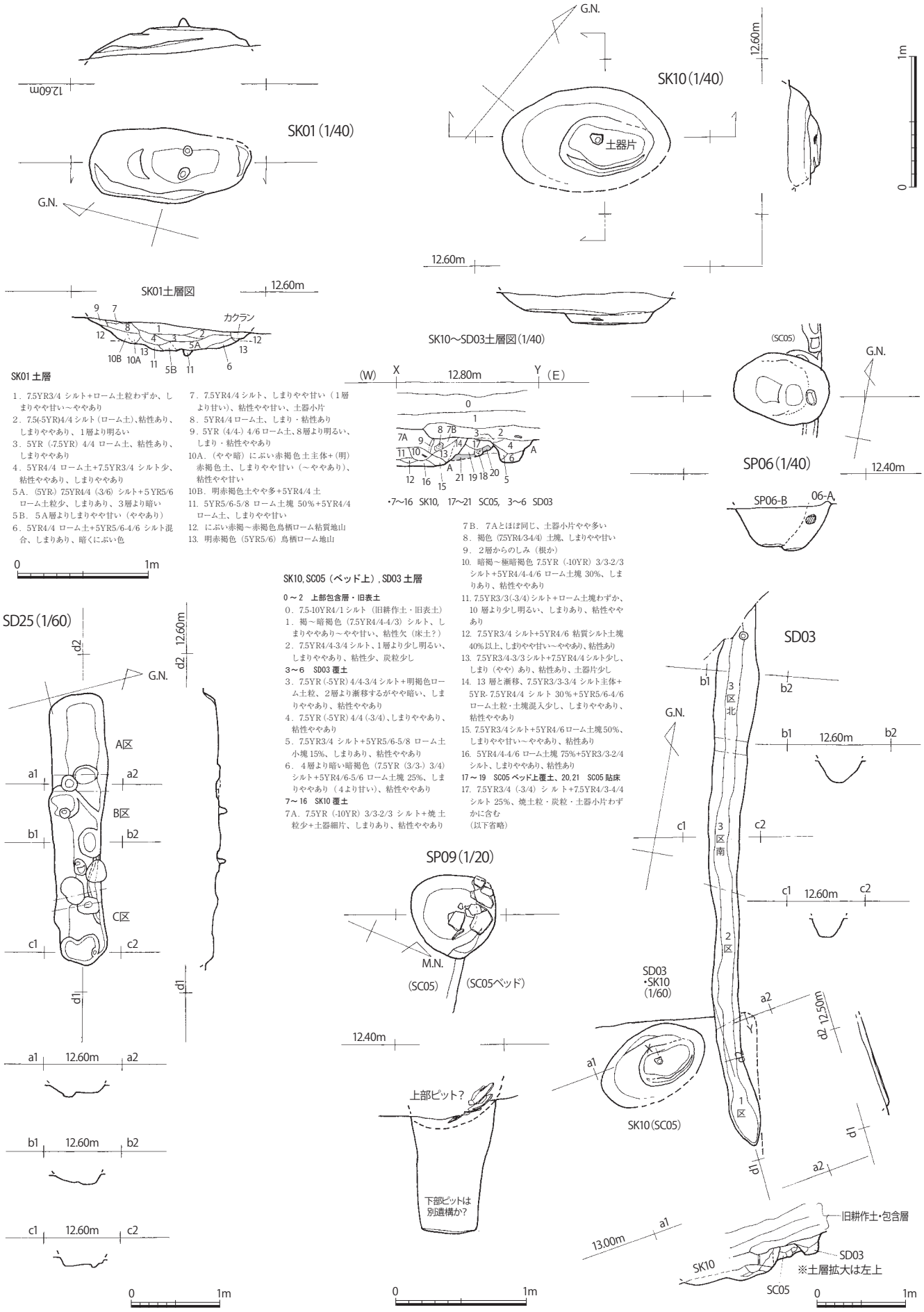


Fig.26　土坑、ピット、溝状遺構実測図(1/20, 1/40, 1/60)

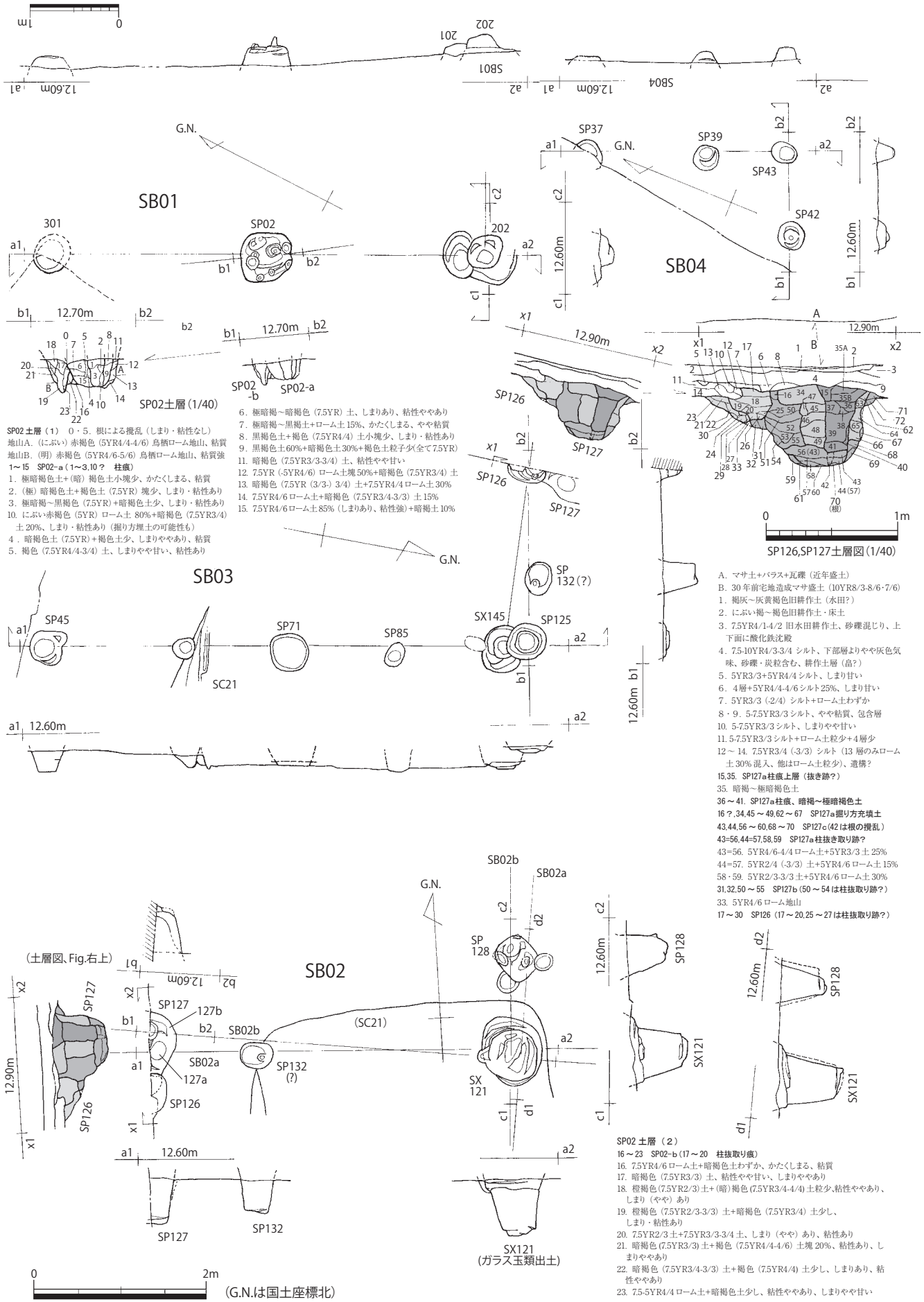


Fig.27 掘立柱建物実測図(1/60, 土層図1/40)

点では長軸 4.2 mとなる。そのほか、居間部南西隅には壁隅角に平行するＬ字状の仕切溝があり「ロ」に続いていた可能性がある。

SC21 からは**ガラス玉類が多数出土**した。80 点あまりのうち 15 点しか原位置をおさえていないが、遺構内を細かく小区で分け覆土を洗浄しており出土傾向が分かる。出土範囲は住居全面ではなく、炉址がある中央付近から北東側にかけて分布する（Fig.23，PL. 3-7，PL. 5-2）。大部分が最終床面直上と炉址出土であり（一部貼床や覆土にあるのは動植物などの土壌作用で上下移動したと考えられる）、すなわち**廃屋儀礼**での廃棄が考えられる。複数回の建替行為も含め、特殊な性格を持つ住居であった可能性がある。

SC21 の時期は（出土土器は Fig.28-17 ～ 34）、床面ないし覆土下層の土器（Fig.28-17,18,25,29,30,34）から弥生時代後期後葉新相を下限とし、建替の時期としては上限が後期中頃までの幅であろう。

•SX（SC）27（Fig.19）　Ⅱ区南東で「**SD23**（後述）を北東辺とし、その南西側にかけて、2.4 m（北西－南東）× 2.2 m（北東－南西）の貼床痕跡があった。SD23 を掘り方縁辺とする竪穴住居痕跡だろう。

（２）井戸　**SE111（Fig.24，巻頭図版２-4・5，PL. 4-1・8）**

SC21 西半の下部で検出した。当初、SC21 の貼床が厚く落ち込む範囲があり（SX80）、不審に思いこれを掘り抜いたら下から黒褐色土層を検出し、貯蔵穴ないし井戸の存在が判明した。掘削の結果、下部はすぼまり、湧水がある井戸と判明した。Ⅱ区とⅢ区に分かれて調査したため、上面で明瞭な切合いをつかめなかったが、不整円形プランが二つ重複し、最下部の凹みが二ヶ所あり、同一箇所での掘り直しと判断する。部分的に重複関係が確認でき、南側の **SE111-A** が北側の **SE111-B** を切ると考えられる。両者合わせて上面が南北 2.9 m × 東西 1.8 ～ 2.1 m、SE111-A は径 1.8 mの不整円形、SE111-B は南北 1.6 m × 東西 2.1 mである。いずれも断面は逆台形状で、最下部中央が凹む。深度は 111-A が SC21 床面から 1.3 m、西側遺構検出面から 1.6 m、111-B は SC21 床面から 1.2 mである。いずれも井戸側の痕跡はなかった。掘り方壁面には四方にステップ状の抉りこみがある。さらに 111-A 東壁では **SX200**、111-B では **SX300** の横穴状掘り込みがあり、いずれも上部からのピットがあるところで横穴が立ち上がり終わる。111-A の方が横への掘削が長い。類例不明で、どのような性格・機能のものか全く不明である。SE111 の時期は出土土器から（Fig.28-35 ～ 29-2）、弥生時代中期前葉、須玖Ⅰ式古相から新相の過渡期に廃棄されたと考えられる。

（３）溝状遺構

SD26（Fig.25 左，PL. 4-2）は SD25 に切られ、当初「**SX28-B 区**」および「**SC21-F 区**」とした遺構もその延長と考えるが、ならばSC05 にも切られることになる。長さ 3.1 m以上、幅 30 ～ 40㎝の溝状土坑で、深さ 10㎝までの遺存である。方位はＮ－ 76°－Ｅ。**SX28** が同一遺構ならば、南側に本来は展開する竪穴住居掘り方の北縁であろう。ただし SX28 からは弥生時代終末期の土器が出土しており（Fig.29-3,4）、SD26 より新しい可能性がある。**SD23（Fig.25 右、PL. 4-3）**は SC21 と SD25 を切る溝状土坑。北西の SX24 も連続する遺構とみる。長さ 1.7 m、幅 28 ～ 36㎝、深さ 8㎝未満の遺存である。方位はＮ－ 46°－Ｗ。既述だが、南西に続く **SX27 貼床痕跡**と関係する竪穴住居掘り方縁辺の可能性が高い。**SD25（Fig.26 左下、PL. 4-4）**は SC21 と SD25 を切り、SD23 に切られる溝状土坑。長さ 2.1 m、幅 34 ～ 42㎝、深さは 10㎝までの遺存である。方位はＮ－ 75°－Ｗ。溝内に小ピットが複数あり底面に凹凸がある。SD23 の状況から、この溝も可能性として削平された竪穴住居掘り方だろう。

SD03（Fig.26 右下，PL. 1-3，PL. 4-7）は SC05 の東縁を切り、北へ延びる溝である。長さ 6.3 mだが、北は調査区外に延び、南も削平のため途切れたものだろう。幅は 30 ～ 50㎝、深さは最深 25㎝の遺存である。若干蛇行し、北側はＮ－ 6°－Ｗ、南側はＮ－ 19°－Ｗとなる。古式土師器片が出土しているが、およそ北方位で後述の **SB03** と平行し、覆土が暗褐色でもあり、古代の遺構だろう。

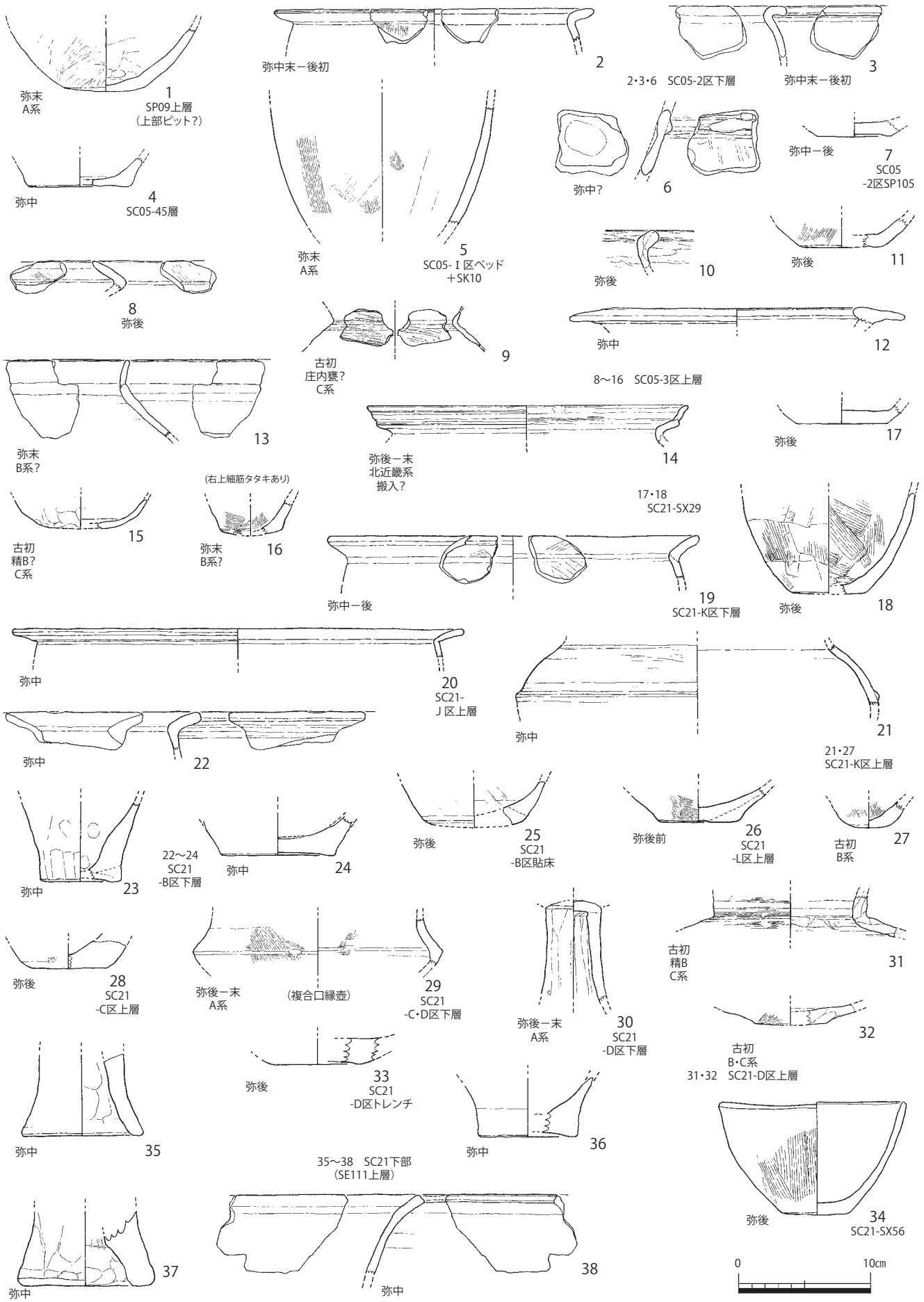


Fig.28　井尻B32次出土土器実測図(1)(1/4)

（4）土坑・ピット（Fig.26）

SK01（Fig.26 左上，PL. 2-2,3）は 60 × 124cmの隅丸長方形土坑。N － 15° － W。深さは 25cmの遺存。底面に杭痕跡が２つある。覆土は暗褐色～褐色で古代以降か。**SK10（Fig.26 右上，PL. 2-8）**は SC05 を切る 80 × 130cmの楕円形土坑。深さは最深 30cm（Fig.26 中央土層図）。覆土は極暗褐色土。長軸はN － 50° － E。多くの土器片が出土し（Fig.29-5 ～ 12）、古墳時代初頭ないし前期前葉古相（ⅡA～ⅡB期）だろう（中世土師器小片は混入）。**SP06（Fig.26 右中段，PL. 1-3,5）**は SC05 を切るとしたピットないし土坑。当初は SC05 の東壁溝 SD04 に切られると見たが（PL. 1-2）、掘削途中で逆とした。ただし SC21 の SX29 のような SC05 東辺の壁際土坑で重複関係が複雑である可能性もある。さらに精査の結果、**SP06 は A・B の新古**に分かれると判断した。両者は深度も異なり B が 32cm、A が 38cm。SP06-B が新しく 32 × 60cm、SP06-A は 54 × 70cm前後の楕円形。出土土器は（Fig.29-16 ～ 18）、弥生終末から古墳初頭（ⅠB～ⅡA期）。**その他のピット**では、SC21 覆土を切り込む **SP92（Fig.19・22）**とその上面からは**古代の瓦**が出土（Fig.30-1 ～ 3）。同じく SC21 を上から切る **SX（SP）123** と対になる可能性がある。

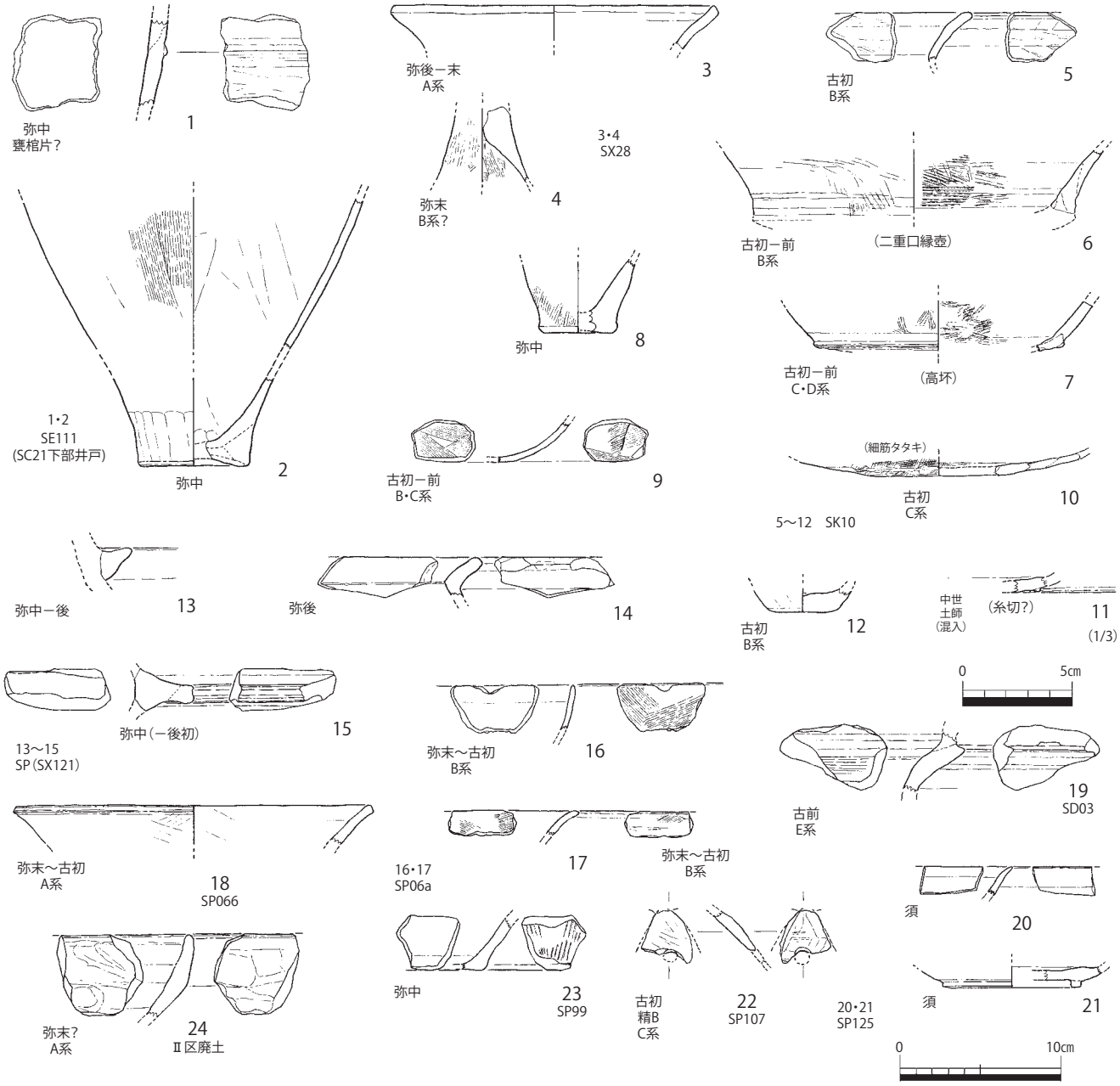


Fig.29　井尻B32次出土土器実測図（2）（1/4, 11のみ1/3）

SC21 北辺に切られる **SP129（Fig.19，PL. 4 - 6）**からは弥生中期（須玖Ⅰ～Ⅱ式）の土器片が出土した。

（5）掘立柱建物（Fig.27）

SB01（Fig.27 左上）は一辺２間の確認。SP02（PL. 2-4）は新古があり、南側 SP201・202 の重複からも建替だろう。SP301 － SP201 間は 4.7 m、SP202 までは 5.0 m。N － 27° － W。覆土から弥生時代から古墳前期。**SB02（Fig.27 左下）**は、南北 1.2 m以上×東西 4.25 m以上。SP128 と SP132 は束柱か。**SX121** と **SK127** が主柱である。SK127 は土層（巻頭図版 2-3）から柱の建替がある。SX121 と SP128 も柱圧痕が２つある。また 127a と 132、121 と 128 の柱間が一致する。**SB02-a** はN － 87° － W、**SB02-b** はN － 82° － W。**SX121 はガラス玉 10 点と鉄刀子**（Fig.30-5）が出土。「玉の緒を切る」行為を刀子で行い、共に廃棄されたか。SC21 を切り、弥生終末と考える。**SB03（Fig.27 左中段）**は１間以上×２間（SP85 と、SP71-SP45 間の小柱穴は束柱）、2.0 m以上× 5.6 m（以上？）の建物。N － 10° － E。柱穴は暗褐色覆土で（**SP126** 土層参照）、**SP125** から奈良時代の須恵器が出土し（Fig.29-20,21）、古代だろう。**SB04（Fig.27 右上）**は１間（以上？）×２間、0.95 m× 2.2 m。柱穴が小規模で、中世に下る可能性がある。

２．出土遺物

１．土器および土製品（Fig.28 ～ 29，Fig.30-1 ～ 3）

紙幅の都合により説明を省略する。各出土遺構、時期や系統などは略称で挿図に示した。その凡例は p.18 を参照。Fig.28-14 の北近畿系土器は特筆される。また Fig.30-1 ～ 3 は古代（奈良時代初期）の瓦である。

２．鉄器（Fig.30）

4 は摘鎌（穂摘鎌）。木柄痕跡の木質が一部残る。5 は刀子だが関がない形式。柄の木質痕跡がある。

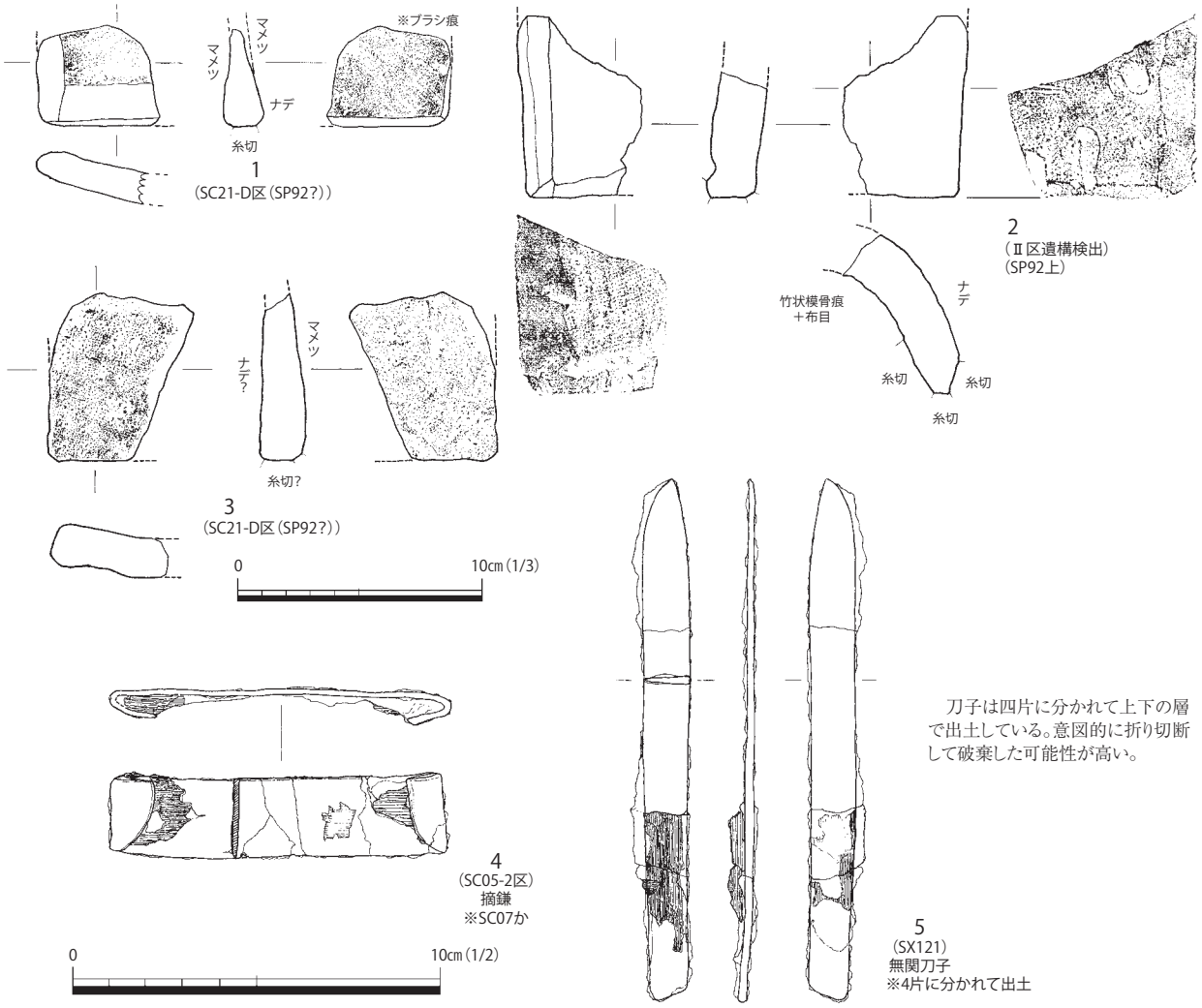


Fig.30　井尻B32次出土古代瓦(1/3)，鉄器(1/2)実測図

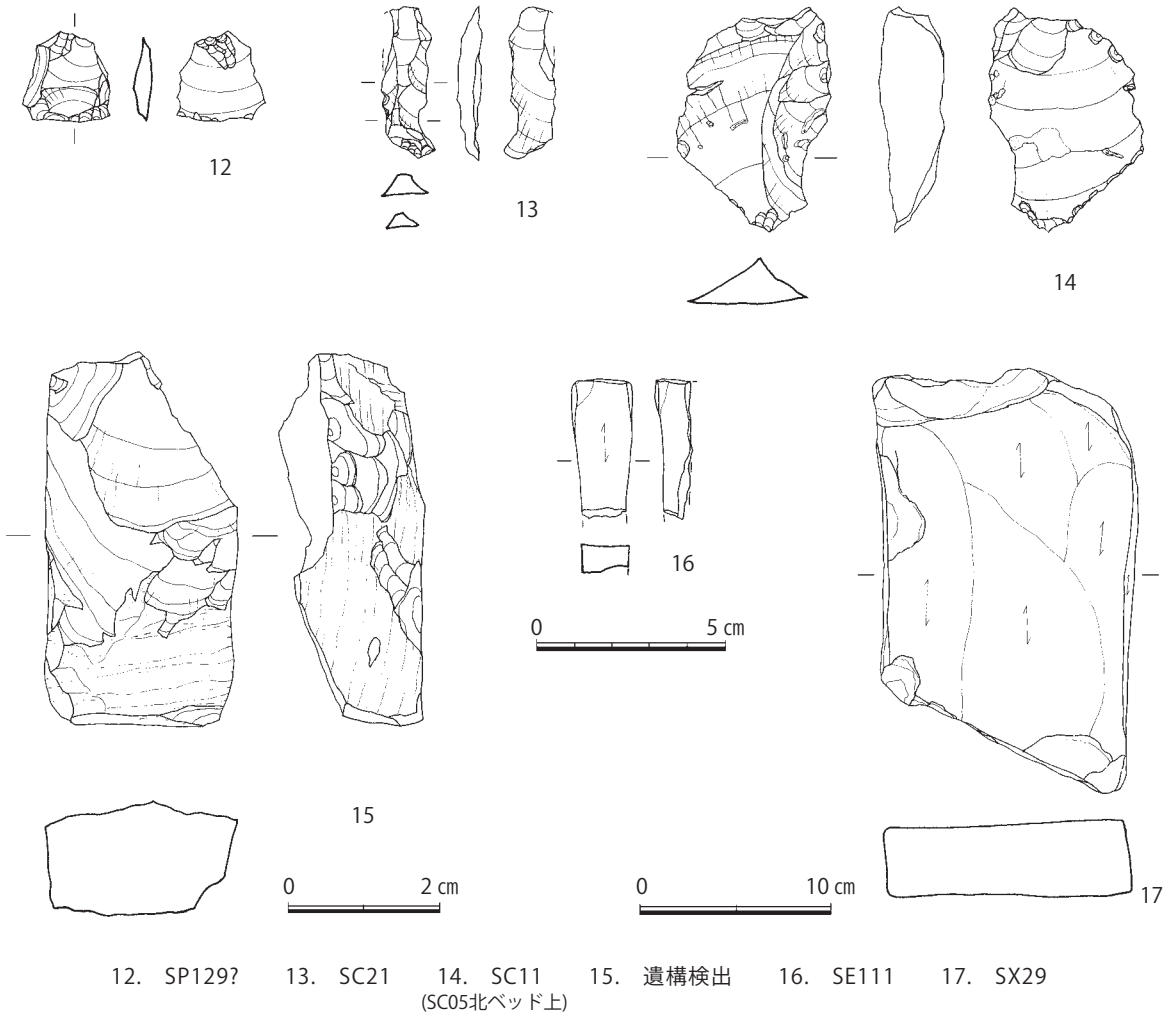
３．石器

32 次調査では主に弥生時代前半期の石器が出土し、その一部を図化した（Fig.31）。以下、各石器の概要や特記すべき事項について記すが、法量や詳しい観察については表２を参照されたい。

12 は SP129 周囲の遺構検出面から出土した黒曜石の使用痕剥片石器で、上下端に階段状剥離や微細剥離が認められる。楔型石器として使用されたと考えられる。13 は SC21 から出土した黒曜石の小型剥片で、風化がやや強く、左辺に微細剥離が認められる。細石刃の可能性が高い。14 は SC11（SC05 北ベッド上）から出土した黒曜石の使用痕剥片で、左辺から下端にかけての角度の小さい縁辺に微細剥離が認められる。削器として使用されたと考えられる。15 は遺構検出面から出土した黒曜石の石核で、2 ～ 4cm程度の剥片を剥離している。16 は SC21 下部井戸（SE111）から出土した頁岩の小型砥石で、四面の長軸方向に砥痕が認められる。17 は SX29（SC21 内）から出土した細粒砂岩の置き砥石で、前面と右辺面に長軸方向の砥痕が認められる。

その他、SC11 から黒曜石砕片、SX29 から石皿の可能性がある花崗閃緑岩、SX121 から黒曜石原石などが出土している。

石器の時期については、13 が細石刃であれば後期旧石器時代に属する。その他の黒曜石石器については、すべて伊万里市腰岳産で、中・小型石材からの石鏃・石錐・小型刃器等素材の獲得を目的とした剥片剥離に伴うものであり、弥生時代前半期の所産と考えられる。砥石等も弥生時代の所産と考えてよいであろう。この点は出土土器の傾向とも矛盾しない。（板倉有大）



12.　SP129?　　13.　SC21　　14.　SC11 (SC05北ベッド上)　　15.　遺構検出　　16.　SE111　　17.　SX29

Fig.31　井尻B32次出土石器実測図（12～15は1/1, 16は1/2, 17は1/4）

表１　井尻Ｂ25次出土石器観察表

*長さ・幅・厚さはcm。重量はg

番号	挿図番号	遺構	区	層位等	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考
30001	16-1	SC01	Ⅲ東	上～中層	黒曜石	調整剥片	3.35	2.2	1.05	5.3	石鏃・石錐未成品
30002		SC01	Ⅲ東	上～中層	黒曜石	砕片					
30003		SC01	Ⅲ東	上～中層	黒曜石	砕片					
30004		SC01	Ⅲ東	上～中層	黒曜石	砕片					
30005	16-10	SC05	Ⅴ	貼床下の窪み (SC03？)	黒曜石	石核	2.6	3.5	3.6	25.4	2cm程度の剥片を剥離
30006	16-2	SC01	Ⅲ東(北)	下層～床面	黒曜石	使用痕剥片	3	4	1.3	16.6	掻器として使用
30007		SC01	Ⅰ・Ⅱ外	SC06Ⅱ・Ⅲ側ベルト	黒曜石	砕片					
30008		SC01	Ⅰ・Ⅱ外	SC06Ⅱ・Ⅲ側ベルト	黒曜石	砕片					
30009		SK11		柱穴(SP)？	黒曜石	砕片					
30010		SC01	Ⅱ東	上～中層	黒曜石	剥片					楔形石核作出
30011		SC01	Ⅲ	SK22ベルト	黒曜石	砕片					
30012		SC01	Ⅳ	(上～)下層、床面	黒曜石	砕片					
30013		SC05	Ⅲ北	上～中層	黒曜石	剥片					
30014		SC01	Ⅳ南	(上～)下層、床面	黒曜石	砕片					
30015		SC01	Ⅳ	P049上	黒曜石	剥片					
30016	16-3	SC01	Ⅳ	P043	黒曜石	掻器	(1.7)	2.5	0.82	(3.3)	刃部未使用
30017	16-6	SC01	Ⅳ	No.7	砂岩	砥石	10	8	7.2	952.2	砥面3面、砥面幅3～4cm、幅1mm溝
30018		SC05	Ⅳ	No.4	頁岩	砥石					
30019		SC01	Ⅰ	SP153上	珪岩	棒状素材					
30020	16-5	SC01	Ⅳ	(上～)下層、床面	砂岩	小型砥石	(4.5)	1.15	1.2	(11.6	砥面4面
30021		SC02		西下 (SC05Ⅱ～Ⅲ？)	花崗岩	砥石					
30022	16-4	SC01	Ⅲ	No.10	片岩	石鎌か	(7.85)	4.1	0.6	(27.6	風化強い
30023	16-8	SC05	Ⅲ北(Ⅱ)	床面	凝灰岩	石庖丁	(3.1)	(2.05)	0.3	(2.7)	片刃状
30024	16-9	SX21北	SP64	19層	結晶片岩	石庖丁	(5.6)	(5)	0.6	(16.9	半月形。両刃
30025		SX21北	SP64	19層	結晶片岩	砕片					
30026		SX21北	SP64	19層	結晶片岩	砕片					
30027		SX21北	SP64	19層	結晶片岩	砕片					
30028	16-7	SC03	Ⅱ	下層～床面	玄武岩	磨製石斧	(2.1)	(1.7)	(2.7)	(18.4	分割破砕か
30029		SP004		上部	玄武岩	砕片					石棺材片か
30030				遺構検出一括	玄武岩	砕片					石棺材片か
30031		SP003		下層	玄武岩	砕片					石棺材片か
30032		SP003		下層	玄武岩	砕片					石棺材片か
30033		SP003		下層	玄武岩	砕片					石棺材片か
30034		SP003		下層	玄武岩	砕片					石棺材片か
30035	16-11			遺構検出一括	サヌカイト	剥片	4.55	1.25	1.15	4.4	クレステッド剥片。使用痕なし
30036		SC01	Ⅲ東	上～中層	泥岩	円礫					
30037		SC04		東SP038	黒曜石	剥片					

表２　井尻Ｂ32次出土石器観察表

*長さ・幅・厚さはcm。重量はg

番号	挿図番号	遺構	区	層位等	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考
50001		SE111 井戸		下部	玄武岩	円礫					
50002	31-16	SE111 井戸		下部	頁岩	小型砥石	(3.65)	1.6	(1)	(8.4)	砥面4面
50003	31-17	SX29 屋内土坑		No.5(SC21床面)	細粒砂岩	砥石	22.6	13.9	4	2041	砥面2面
50004		SX29		No.3(SC21床面)	花崗岩	棒状礫					
50005		SC21	L	上層	玄武岩	円礫					
50006		SC21	C	SP71	花崗岩	円礫					
50007		SX29	北半	下層(SC21床面)	花崗岩	円礫					
50008		SX29	北半	中層礫層 (SC21床面)	花崗閃緑岩	円礫					
50009	31-15			遺構検出	黒曜石	石核	4.9	2.55	1.9	29.1	2～4cm剥片を剥離
50010		SC11	2	上層	黒曜石	砕片					
50011	31-14	SC11	2	上層	黒曜石	使用痕剥片	3	2	0.85	3.6	削器として使用
50012	31-13	SC21	B	下層(～床面)	黒曜石	細石刃	2	0.6	0.3	0.35	風化中程度。微細剥離あり
50013		SX121	南側	柱穴？、上半部	黒曜石	原石					
50014		SP128			黒曜石	砕片					
50015	31-12	SP129?		SP129北地山上面	黒曜石	使用痕剥片	1.2	1.15	0.25	0.4	楔形石器として利用
50016		SX29		No.4(SC21床面)	花崗閃緑岩	石皿か					

※「SC11」はSC05北ベッド上

4．ガラス製品

・井尻Ｂ 32 次調査出土のガラス玉類について

谷澤亜里（九州大学附属図書館付設教材開発センター）

井尻Ｂ遺跡 32 次 SC21 および SX121 からは、多数のガラス製玉類が出土している。これらの資料の考古学的位置づけを明確にするために、製作技法と材質について調査を行った。以下に結果を報告する。

（1）資料と方法

SC21 出土からはガラス管玉 1 点、ガラス小玉 82 点、不明ガラス片 1 点、SX121 からはガラス管玉 1 点、ガラス小玉 9 点が出土している。ガラス管玉は 2 点とも整美な管状を呈し、目視で側面に孔に平行する条線が観察される。両端面は研磨されず歪である。SC21 出土の 1 点は青紺色透明、SX121 出土のもう 1 点は不透明赤褐色を呈す。ガラス小玉は目視においても、形状や孔内の状態などから殆どが引き伸ばし技法によるものとみられた。SC21 から青紺色 31 点、淡青色 49 点と、ややくすんだ淡青色～青緑色を呈すもの 3 点、SX121 からは青紺色 4 点、淡青色 5 点が出土している。不明ガラス片 1 点は完全に不透明で鮮やかな青紺色を呈し、弥生時代のガラスとは考え難い資料である。本来の形状に由来するとみられる曲面をもち、破断面の一部には鉄分が付着している。

これらの資料について、まず、落射光下、透過光下での顕微鏡観察を行った。ガラス内部に含まれる気泡の配置や形状を観察し、製作技法を判断することが目的である。続いて、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置を用いた材質調査を行った。現在、弥生時代から古墳時代のガラスは、融剤等の相違に基づく基礎ガラスのヴァリエーションと着色剤のヴァリエーションの精緻な分類体系が構築されている（肥塚ほか 2010）。今回の調査では様々な制約により定量値の算出は行わず、完全非破壊分析による定性分析の結果から、先行研究で設定されているガラスの種類のいずれに相当するかを判断するという手法をとった。分析条件は以下の通りである。

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光 X 線分析装置（エダックス社製／ Eagle- μ probe）／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：20kV・電流：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲：0.3mm φ／測定時間 120 秒

（2）調査結果

①ガラス管玉

青紺色透明の No.1 では孔に平行する気泡由来の空隙、赤褐色不透明の No.85 では孔に平行する条線や色むらが明瞭に確認され、引き伸ばし技法による製作を確かめることができた。

蛍光 X 線分析結果では、青紺色の No.1 は、カリウム（K）の強いピークが確認され、カリガラスを基礎材質とすると判断される。マンガン（Mn）、鉄（Fe）のピークと共にコバルト（Co）も検出されることから、弥生時代後期のコバルト着色カリガラスに通有の着色剤（肥塚 1995）が用いられていることがわかる。

赤褐色不透明の No.85 は、融剤に由来し、カリガラスとソーダ石灰ガラスの区分に関わるカリウムとカルシウム（Ca）の強度をみると、カリウムがやや強い。しかし、典型的なカリガラスと比べれば、カルシウムがかなり強く検出されている。これまで、弥生時代～古墳時代の赤褐色不透明・黄緑色不透明のガラスは、「高 Al ソーダ石灰ガラス」と理解されてきたが、近年、より詳細に検討すれば弥生時代後期の資料と古墳時代中期後半以降のもので材質が異なることが指摘されている。すなわち、弥生時代後期にみられるものは、古墳時代中期後半以降にみられるものに比べ、酸化アルミニウムや酸化チタンの含有量が少なく、基礎ガラスの材質にばらつきが大きく（肥塚ほか 2010）、「プロト高 Al タイプ」と呼ばれている（大賀 2014）。今回の分析では、定量値を算出していないため厳密な議論はできないが、No.85 が「プロト高 Al タイプ」に該当する可能性は指摘できる。なお、

着色に関連すると考えられる元素として、銅（Cu）がかなり強く検出されており、銅コロイドによる着色技法が想定される。この着色技法は、弥生～古墳時代の不透明赤褐色のガラス小玉で共通してみられる（肥塚ほか 2010）。

②ガラス小玉

孔と平行方向の気泡の配列や、孔と平行方向に変形する気泡の存在、孔内が平滑であることなどから、いずれも引伸ばし技法で製作されたものであることが確認された。淡青色の資料（No.32 ～ 80・90 ～ 94）では、気泡の量や状態の変異が大きく、青紺色のものに比べ散在気味の個体もあるが、引伸ばし技法の範囲内で把握できる。なお、No.86 では孔内に鉄片が噛み込んだ状態が確認される。同様な資料は他にもいくつかの事例を挙げることができ（比佐 2006）、製作過程において一定の頻度で生じるものと考えられる。

蛍光 X 線分析結果では、カリウムの強いピークが確認され、いずれもカリガラスと判断されるが、色調に対応して、着色剤は 3 種類が確認される。まず、青紺色透明のものは、マンガン、鉄の明瞭なピークとコバルトの存在が確認されることから、弥生時代後期のコバルト着色カリガラスに通有の着色剤が使用された、No.1 のガラス管玉と同様の素材であることがわかる。

次に、淡青色のものは、銅の明瞭なピークと鉄、鉛のピークが確認され、弥生後期の銅着色カリガラスに通有の着色剤（肥塚 1995）が用いられていることがわかる。No.32 ～ 34 のような緑味の強い個体も、着色剤の種類は共通している。近年、弥生時代後期のカリガラスのなかでも、コバルト着色青紺色のものと銅着色淡青色のものとでは、基礎ガラスが微妙に異なり、銅着色のものの方が酸化アルミニウムの含有量が多く酸化カルシウムの含有量が少ないと指摘されている（肥塚ほか 2010）。今回の分析では、定量値を算出していないため厳密な議論はできないが、分析結果のアルミニウムのピークを見る限りでは、先行研究の指摘と矛盾なく理解できそうである。

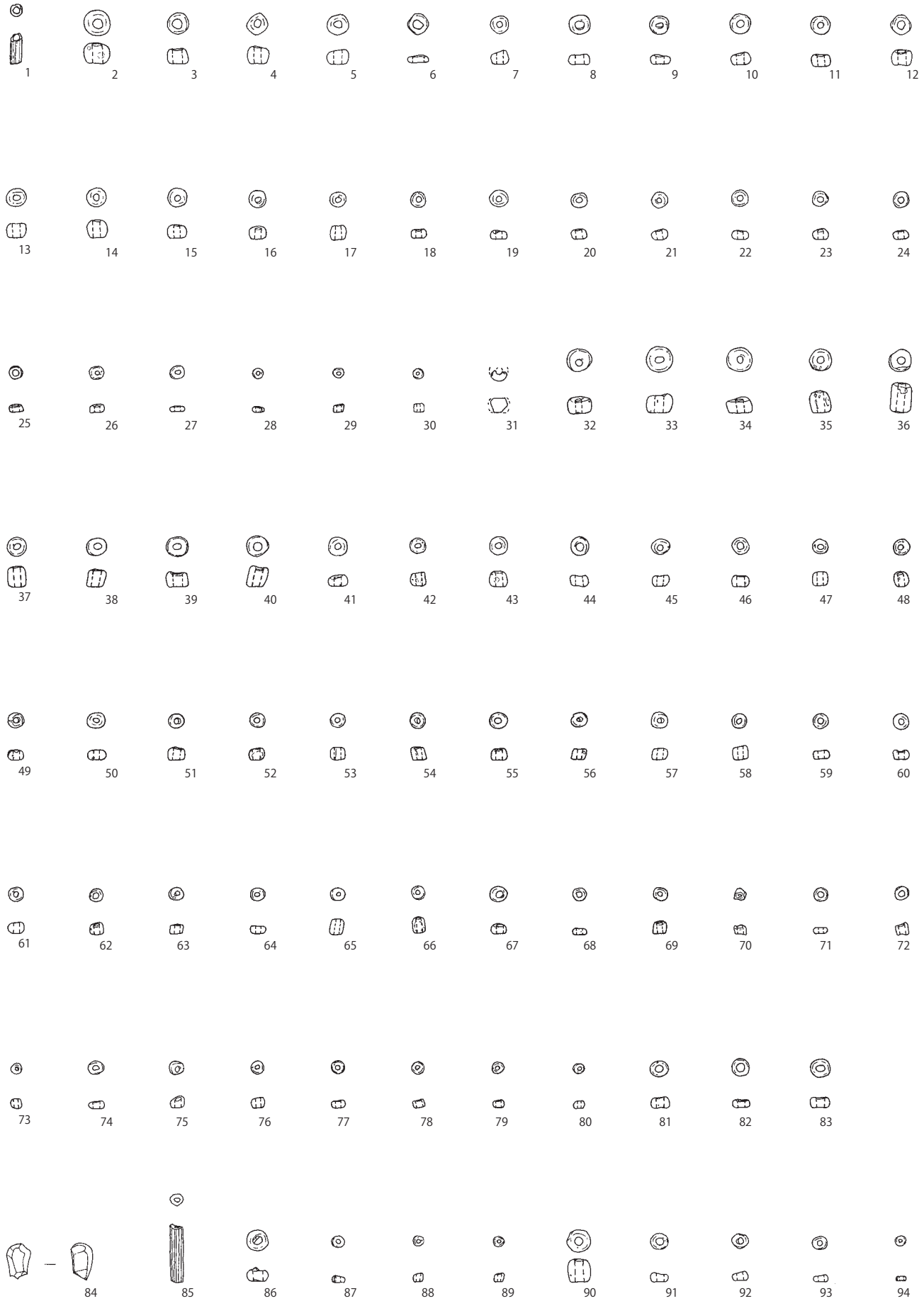
最後に、ややくすんだ淡青色を呈すものは、銅、鉄、鉛が確認される点は淡青色のものと共通するが、マンガンのピークも検出される点が異なる。同様な資料は、井原ヤリミゾ遺跡 2 号木棺墓（比佐 2006）などで確認されている。アルミニウムのピークに着目すると、青紺色のものより強い傾向にあるようだが、定量値を算出できるような追調査の必要があろう。

③不明ガラス片（No.84）

カルシウムのかなり強いピークが確認され、ソーダ石灰ガラスと判断される。アルミニウムのピークも明瞭である。着色に関わると考えられる元素では、銅のかなり強いピークと、鉄のピークが検出されている。マンガンやコバルトは検出されておらず、色調は類似しているが、カリガラス青紺色のものとは着色剤が異なることがわかる。現状では、同様な基礎ガラスと着色剤の組み合わせの資料は弥生時代には確認されておらず、位置づけには問題が残る。

（3）考察

以上、SC21 および SX121 出土のガラス製品は、不明ガラス片 1 点を除けば、いずれも引き伸ばし技法で製作され、銅コロイドで着色された赤褐色の管玉 1 点、コバルト着色カリガラスの管玉 1 点・小玉 35 点、銅着色カリガラスの小玉 54 点、マンガンを伴う銅着色カリガラスの小玉 3 点で構成されることが明らかとなった。製作技法と材質より、いずれも舶載品と考えられる。特にガラス管玉は、先行研究では CD 二塚山タイプ・CD 三雲仲田タイプ（小寺 2006）あるいは TY Ⅴ型・TY Ⅵ型（大賀 2010）と呼ばれ、弥生後期中頃～終末期の北部九州地域に分布が偏る点が指摘されており、この時期の北部九州地域の活発な対外交渉を示すものと理解される。ただし、赤褐色のものは流通量が多くは見込めないなかで、現状は墓からの出土が確認されない点は注意される。また、特に SC21 のガラス小玉は、北部九州の墓出土資料では弥生後期前半～中頃に主体となる種類（谷澤 2011）で構成されており、土器の示す時期（後期後半～終末期）とのずれが問題となる。以上をふまえると、副葬品として出土する玉類とそうでない玉類の出土傾向の比較が、今後の課題といえるだろう。



※番号は巻頭図版３・４、表３・４と同じ

Fig.32　SC21およびSX121出土ガラス製品実測図(1/1)

表３　SC21およびSX121出土ガラス製品一覧（１）

No	遺構	器種	色調	径(mm)	厚(mm)	重量(g)	基礎ガラス	着色剤	製作技法
1	SC21	管玉	青紺	2.20	5.60	0.025	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
2	SC21	小玉	青紺	5.00	3.80	0.110	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
3	SC21	小玉	青紺	4.20	2.90	0.057	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
4	SC21	小玉	青紺	4.15	3.25	0.066	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
5	SC21	小玉	青紺	4.10	2.70	0.049	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
6	SC21	小玉	青紺	4.10	1.35	0.020	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
7	SC21	小玉	青紺	3.65	2.70	0.041	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
8	SC21	小玉	青紺	4.00	1.90	0.029	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
9	SC21	小玉	青紺	3.80	1.75	0.028	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
10	SC21	小玉	青紺	3.95	2.15	0.033	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
11	SC21	小玉	青紺	3.70	2.20	0.040	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
12	SC21	小玉	青紺	3.80	2.70	0.046	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
13	SC21	小玉	青紺	3.90	2.60	0.048	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
14	SC21	小玉	青紺	3.85	3.20	0.061	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
15	SC21	小玉	青紺	3.55	2.50	0.035	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
16	SC21	小玉	青紺	3.35	2.45	0.028	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
17	SC21	小玉	青紺	3.00	2.75	0.031	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
18	SC21	小玉	青紺	3.10	1.55	0.018	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
19	SC21	小玉	青紺	3.40	1.45	0.018	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
20	SC21	小玉	青紺	3.20	2.80	0.021	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
21	SC21	小玉	青紺	3.20	2.00	0.023	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
22	SC21	小玉	青紺	3.30	1.60	0.020	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
23	SC21	小玉	青紺	3.10	1.85	0.018	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
24	SC21	小玉	青紺	3.00	1.60	0.018	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
25	SC21	小玉	青紺	2.65	1.50	0.014	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
26	SC21	小玉	青紺	2.70	1.45	0.014	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
27	SC21	小玉	青紺	2.55	1.00	0.010	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
28	SC21	小玉	青紺	2.20	0.95	0.008	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
29	SC21	小玉	青紺	2.10	1.85	0.008	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
30	SC21	小玉	青紺	1.90	1.65	0.007	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
31	SC21	小玉	青紺	－	2.80	0.017	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
32	SC21	小玉	淡青	4.70	3.10	0.081	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
33	SC21	小玉	淡青	5.00	3.60	0.109	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
34	SC21	小玉	淡青	5.00	3.00	0.082	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
35	SC21	小玉	淡青	4.10	4.10	0.092	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
36	SC21	小玉	淡青	4.25	5.50	0.134	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
37	SC21	小玉	淡青	3.70	3.90	0.070	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
38	SC21	小玉	淡青	3.40	3.25	0.047	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
39	SC21	小玉	淡青	4.20	2.75	0.054	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
40	SC21	小玉	淡青	4.05	3.90	0.070	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
41	SC21	小玉	淡青	3.70	2.25	0.035	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
42	SC21	小玉	淡青	3.10	2.70	0.032	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
43	SC21	小玉	淡青	3.40	2.90	0.037	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
44	SC21	小玉	淡青	3.40	2.00	0.026	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
45	SC21	小玉	淡青	3.30	3.00	0.024	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
46	SC21	小玉	淡青	3.25	3.05	0.022	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
47	SC21	小玉	淡青	3.00	2.55	0.030	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
48	SC21	小玉	淡青	3.00	2.70	0.030	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
49	SC21	小玉	淡青	3.00	2.00	0.017	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
50	SC21	小玉	淡青	3.35	2.00	0.025	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
51	SC21	小玉	淡青	3.05	2.40	0.024	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
52	SC21	小玉	淡青	2.95	2.20	0.023	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
53	SC21	小玉	淡青	2.80	2.40	0.022	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
54	SC21	小玉	淡青	2.85	2.40	0.027	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
55	SC21	小玉	淡青	3.25	2.25	0.027	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
56	SC21	小玉	淡青	3.10	2.05	0.022	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし

表４　SC21およびSX121出土ガラス製品一覧（２）

No	遺構	器種	色調	径(mm)	厚(mm)	重量(g)	基礎ガラス	着色剤	製作技法
57	SC21	小玉	淡青	3.10	2.20	0.027	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
58	SC21	小玉	淡青	2.85	2.55	0.027	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
59	SC21	小玉	淡青	2.90	1.60	0.017	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
60	SC21	小玉	淡青	3.20	2.00	0.021	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
61	SC21	小玉	淡青	2.90	2.10	0.021	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
62	SC21	小玉	淡青	2.70	2.20	0.018	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
63	SC21	小玉	淡青	2.65	1.85	0.015	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
64	SC21	小玉	淡青	2.80	1.45	0.013	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
65	SC21	小玉	淡青	2.45	2.90	0.023	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
66	SC21	小玉	淡青	2.65	2.65	0.023	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
67	SC21	小玉	淡青	3.00	1.90	0.015	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
68	SC21	小玉	淡青	2.60	2.40	0.010	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
69	SC21	小玉	淡青	2.65	2.30	0.017	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
70	SC21	小玉	淡青	2.25	1.95	0.009	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
71	SC21	小玉	淡青	2.70	1.20	0.009	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
72	SC21	小玉	淡青	2.50	2.30	0.020	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
73	SC21	小玉	淡青	2.20	1.70	0.008	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
74	SC21	小玉	淡青	3.00	1.40	0.012	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
75	SC21	小玉	淡青	2.65	2.20	0.014	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
76	SC21	小玉	淡青	2.50	2.00	0.017	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
77	SC21	小玉	淡青	2.50	1.40	0.011	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
78	SC21	小玉	淡青	2.55	1.65	0.011	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
79	SC21	小玉	淡青	2.35	1.40	0.010	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
80	SC21	小玉	淡青	2.05	1.50	0.011	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
81	SC21	小玉	くすんだ淡青	3.40	2.10	0.026	カリガラス	Cu(Mn・Fe・Pb)	引き伸ばし
82	SC21	小玉	くすんだ淡青	3.20	1.35	0.017	カリガラス	Cu(Mn・Fe・Pb)	引き伸ばし
83	SC21	小玉	くすんだ淡青	3.75	3.30	0.027	カリガラス	Cu(Mn・Fe・Pb)	引き伸ばし
84	SC21	不明破片	青紺	－	－	0.130	高Alソーダ石灰ガラス？	Cu(Fe)	不明
85	SX121	管玉	赤褐	2.50	10.55	0.075	高Alソーダ石灰ガラス？	Cu	引き伸ばし
86	SX121	小玉	青紺	4.10	2.10	0.041	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
87	SX121	小玉	青紺	2.30	1.20	0.007	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
88	SX121	小玉	青紺	2.10	1.55	0.007	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
89	SX121	小玉	青紺	1.90	1.60	0.009	カリガラス	Co(Mn・Fe)	引き伸ばし
90	SX121	小玉	淡青	4.40	4.15	0.098	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
91	SX121	小玉	淡青	3.20	1.55	0.017	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
92	SX121	小玉	淡青	3.20	1.80	0.015	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
93	SX121	小玉	淡青	2.70	1.30	0.009	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし
94	SX121	小玉	淡青	2.00	0.95	0.004	カリガラス	Cu(Pb・Fe)	引き伸ばし

＜参考文献＞

大賀克彦 2010「弥生時代におけるガラス製管玉の分類的検討」『小羽山墳墓群の研究』―研究編―　福井市郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会

大賀克彦 2014「相模からローマへ―ガラス研究の到達点から―」『久ヶ原・弥生町期の現在―相模湾／東京湾弥生後期の様相―』　西相模考古学研究

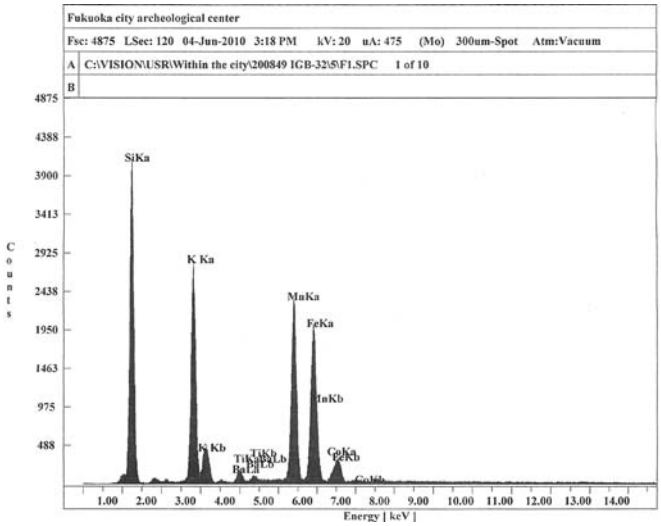
肥塚隆保 1995「古代珪酸塩ガラスの研究―弥生～奈良時代のガラス材質の変遷―」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集　同朋社出版

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566 号

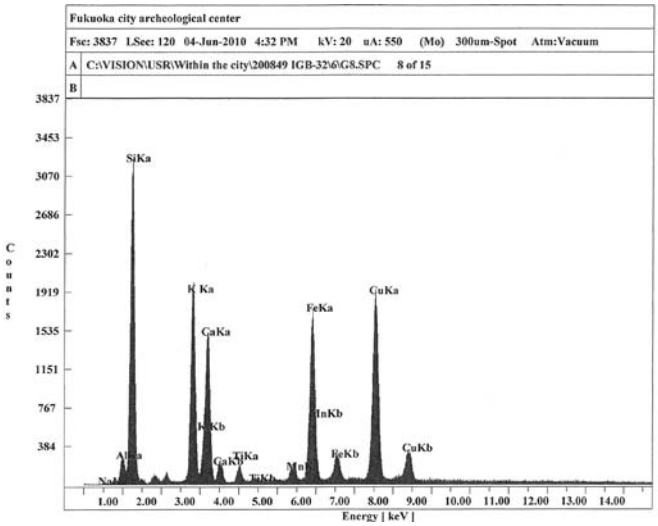
小寺智津子 2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化談叢』第 55 号

谷澤亜里 2011「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通―北部九州地域を中心に―」『九州考古学』第 86 号

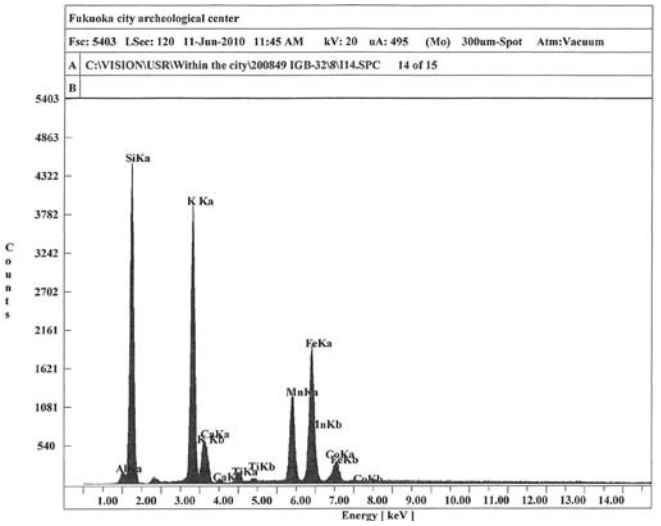
比佐陽一郎 2006「ガラス製玉類の科学的分析：前原市三雲・井原ヤリミゾ 2582・2583 番地出土ガラス玉の調査について」『三雲・井原遺跡：前原市文化財調査報告書』第 92 集



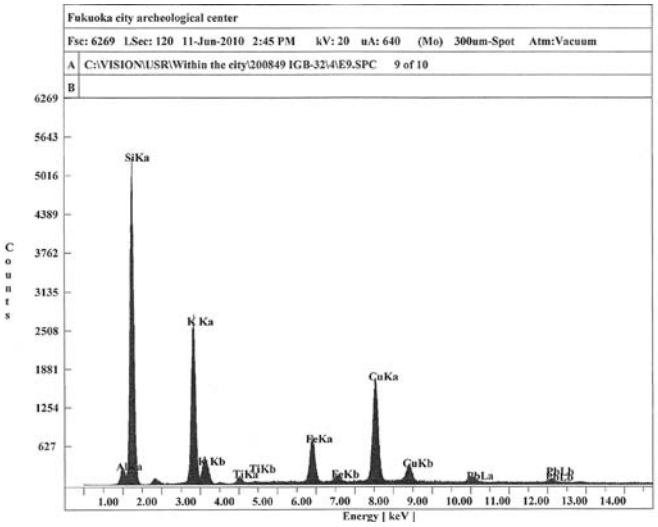
No.1（青紺色ガラス管玉）



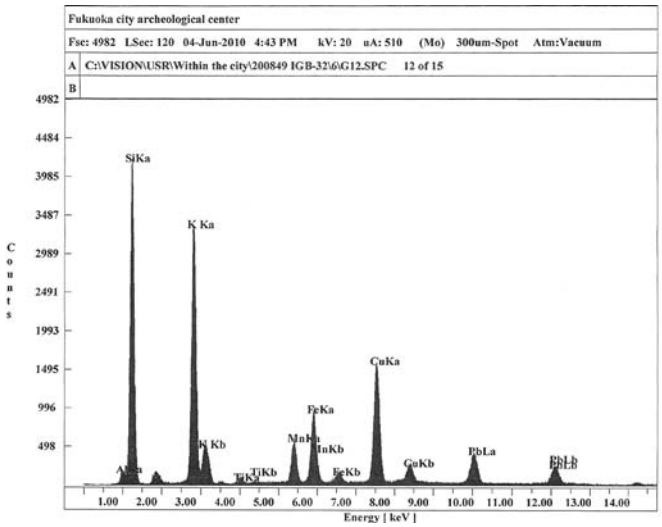
No.85（赤褐色管玉）



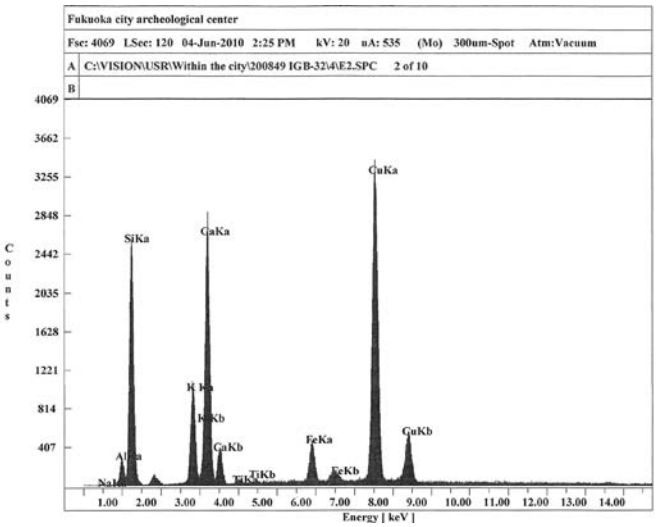
No.86（青紺色小玉）



No.42（淡青色小玉）



No.82（くすんだ淡青色小玉）



No.84（青紺色ガラス片）

Fig.33　ガラス製品の蛍光X線分析結果

１．井尻B32次Ⅰ区全景（南から）

２．B32次Ⅰ区遺構検出状況（南から）

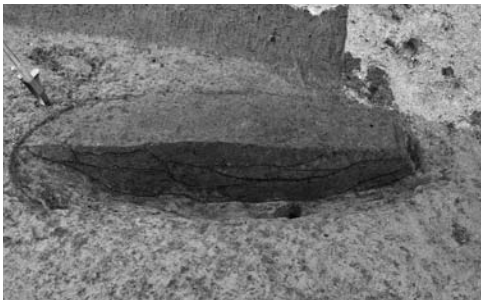
３．Ⅰ区SC05掘方（南東から）

４．Ⅰ区SC05北側・北西側、SD03土層
（南東から）※SD03土層は加筆

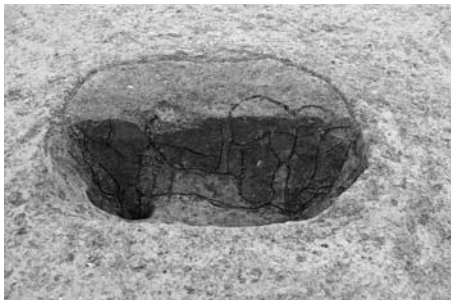
５．Ⅰ区西壁SC05・SC07南北土層（東から）

1．Ⅰ区SP09遺物出土状況（南から）

2．SK01完掘状況（南から）



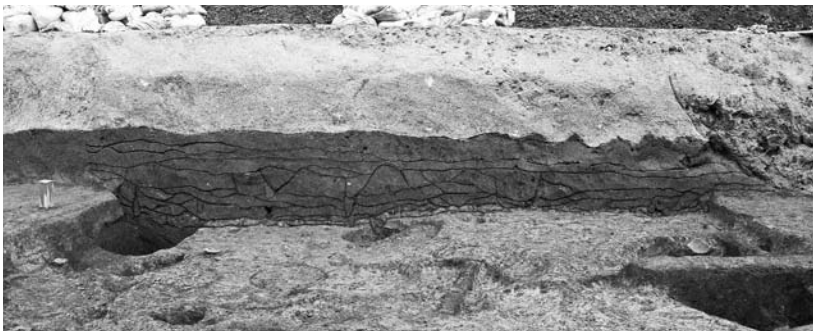
3．Ⅰ区SK01土層（西から）



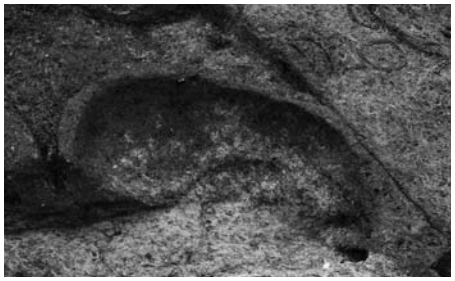
4．Ⅰ区SP02土層（西から）

5．Ⅰ区調査区南壁面土層（北から）

6．Ⅱ区SC05-2区土層（北から）

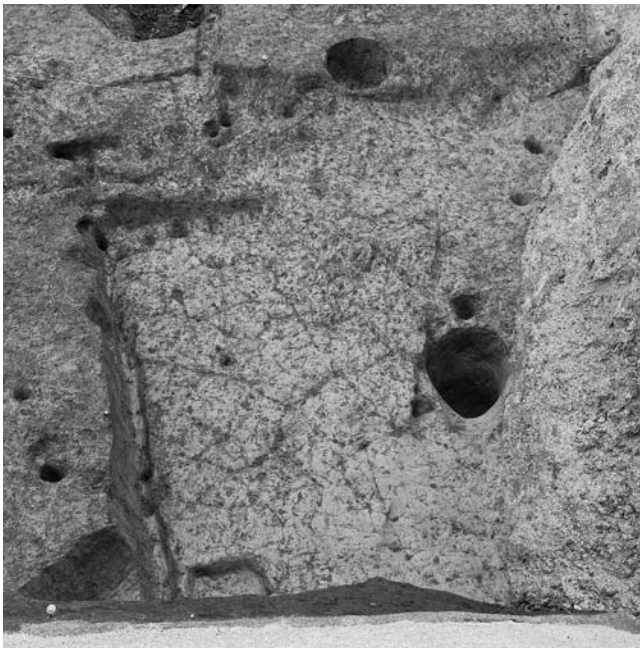


7．Ⅱ区北壁SC21東西土層（南から）



8．Ⅱ区SK10（南から）

9．Ⅱ区遺構検出状況（SC05とSC21の重複関係）
（東から）※白線は加筆（精査後SC21が新とする）



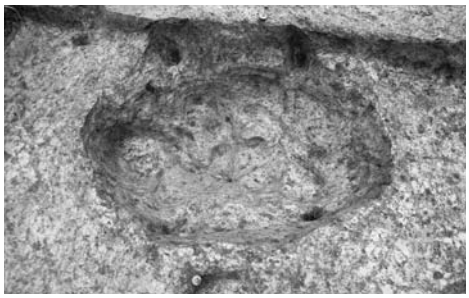
10．Ⅱ区SC05完掘状況（南から）

1．井尻B32次Ⅱ区全景（東から）

2．Ⅱ区SC21西壁検出状況
（建替痕跡）（南から）

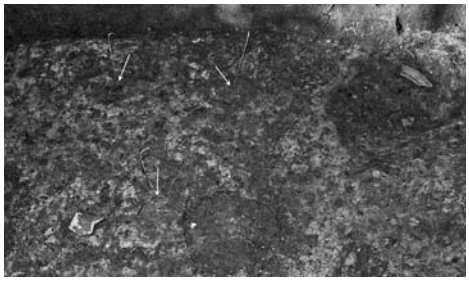
3．Ⅱ区SC21東SX29屋内土坑土層
（北から）

4．Ⅱ区SC21東SX29屋内土坑
遺物出土状況（南から）



5．Ⅱ区SC21東SX29屋内土坑
完掘状況（西から）

6．Ⅱ区SC21床面炉址SX30土層
（東から）

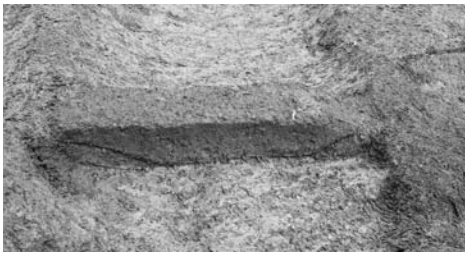


7．Ⅱ区SC21-B区床面ガラス小玉
出土状況（南から）

8．Ⅱ区SC21南東隅SX56土器
出土状況（北から）

1．Ⅱ区SC21掘方およびSE111南半（北から）

2．Ⅱ区SD26-A区東土層（西から）



3．Ⅱ区SD23-B区西土層（東から）

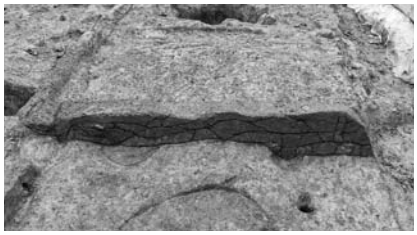
4．Ⅱ区SD25-C区西土層（西から）

5．Ⅲ区SC21上部遺構掘削状況（東から）

6．Ⅲ区SP129遺物出土状況（南から）

7．Ⅲ区東半調査状況（南から）

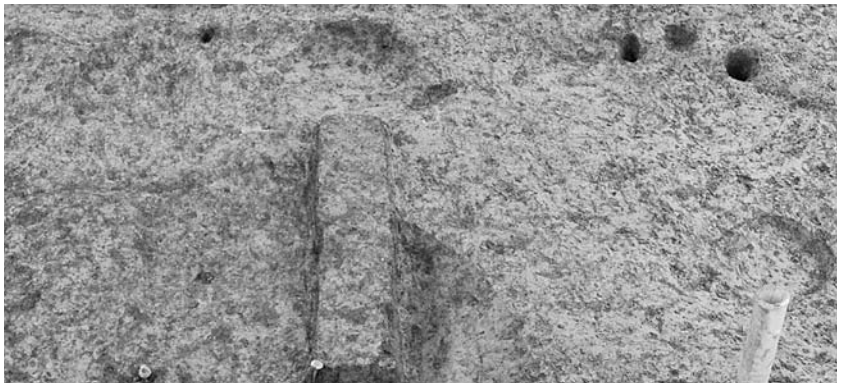
8．Ⅲ区SE111北半完掘状況（南東から）



1．Ⅲ区SC21北部南北土層（西から）

2．Ⅲ区SC21北西-床面・ガラス小玉検出作業状況（北西から）

3．Ⅲ区SC21北部床面検出状況（西から）



4．Ⅲ区SC21北部掘方完掘・SE111上面検出状況（南から）

Ⅲ．調査のまとめ

1．北部九州における弥生時代後期から終末期の集落出土のガラス小玉について（予察）

32 次 SC21 からは、80 点以上（SX121 を含めて 90 点以上）に及ぶガラス小玉が出土していることが注意される。福岡県域における住居出土の玉類については井英明氏が検討を行っており、多数のガラス小玉を出土する住居は弥生時代後期に集中すること、その分布は玄海灘沿岸でも糸島平野・福岡平野と、筑紫・朝倉地域に集中することが指摘されている（井 2004）。このような傾向は、同時期の副葬品として出土するガラス小玉の傾向ともおおむね調和的だが、仔細にみると以下の相違点が注意される。まず、墓出土資料では後期前半から中頃と後期後半から終末期の種類構成の違いが明確で、前者では引き伸ばし技法によるガラス小玉でも、淡青色カリガラス・青紺色カリガラスの小型品が主体となるのに対し、後者では青紺色カリガラス／ナトロン主体ガラスの大型品、淡紺色高 Al ソーダ石灰ガラスの小型品、紫紺色カリガラスの小型品が主体となる（大賀 2003、谷澤 2011）。また、一度に使用される数量は、後期前半～中頃のほうが圧倒的に多く、後期後半から終末期は出土量の減少と共に、三郡山地以東への分布が目立つようになる（谷澤 2011）。

このような変化は、住居出土の玉類の出土傾向においては、やや不明瞭である。墓出土資料のような後期後半での出土数の激減はみられないようであり、本報告の SC21 のように、後期後半以降は副葬事例に乏しい福岡平野でも出土がみられる。また、ガラス小玉の種類構成が、淡青色カリガラス・青紺色カリガラス製の小型の引き伸ばし小玉を主体とすることが多く、後期後半～終末期の副葬品に特徴的な種類構成のものはほとんどみられない。

以上は、弥生時代後期から終末期の北部九州地域におけるガラス小玉の流通の理解にあたり重要な現象と考えられる。今後、さらなる検討が求められよう。（谷澤亜里）

＜参考文献＞

井英明 2004「福岡県下における玉類を出土する竪穴式住居跡の研究的予察」『専修考古学』第 10 号
大賀克彦 2003「紀元 3 世紀のシナリオ」『風巻神山古墳群』（福井県）清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ
谷澤亜里 2011「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通―北部九州地域を中心に―」『九州考古学』第 86 号

２．井尻Ｂ 25 次および 32 次調査の成果と井尻Ｂ遺跡の弥生時代集落の展開について

井尻Ｂ 25 次では、弥生時代中期前葉（須玖Ⅰ式期）から後期前葉までの竪穴住居の重複や後期初頭の井戸、その後に展開するとみられる柱穴群、掘立柱建物（倉庫など?）を確認した（弥生時代中期～終末期の時期区分は久住・久住 2008、終末期～古墳前期は久住 1999）。出土遺物からすると、中期前葉から古墳時代初頭までは、何らかの集落遺構が継続的に存在していた可能性が高い。これらに対応する中期前葉から後期中葉までの墓地は、17 次Ｅ区・16 次から 27 次にかけて分布すると想定されるが（本報告「Ⅰ．はじめに」参照）、後期後葉から古墳時代初頭の墓地は不明確である。また 25 次では弥生時代前期後半と思われる小型木棺墓が検出され、他の土坑にも土壙墓の可能性があるものがあり、周囲に前期～中期初頭の墓地の展開が想定できる。課題としては、前期から中期初頭の集落遺構が不明確なことであるが、井尻Ｂの北にある比恵・那珂遺跡群の集落展開を参考とすれば（久住 2008）、おそらく弥生時代前期頃の集落は、井尻Ｂの段丘縁辺部に小規模な形で存在すると予想する。

32 次では中期前葉の井戸があり、これは須玖Ⅰ式新相前半（田崎博之 1985 の「須玖Ⅰ式新段階」の古相様相）に埋没しており（掘り直しがあり掘削時期はさらに古いだろう）、これまで井尻Ｂでは最古の井戸であった 3 次井戸 40（福岡市第 411 集）とほぼ同じである。後期後葉以前（後期中葉?）には竪穴住居 SC05 があり（SC21 より古いが時期は不確定）、後期後葉に何度か建て替えがある SC21 がある。SC21 の廃絶時にはガラス玉類を床面に散布する儀礼が認められる。SC21 を切る終末期（?）の掘立柱建物 SB02 は一度建替があり、やはり廃絶時に柱穴の一つ（SX121）にガラス玉類と刀子を廃棄する儀礼を行っている。ガラス玉類には珍しい赤褐色の管玉もある（他に三雲遺跡仲田Ⅰ-16 包含層、南八幡 9 次 SC05、今宿五郎江 4 次包含層上層）。他に特別な遺物はないが、このような儀礼が連続的に行われる空間は、上位階層の居住域の可能性を考慮しておく。その後、土坑（SK10）や柱穴から古墳時代前期前葉古相（ⅡＢ期）までの遺物があり、そこまでは集落が継続する。SC05 上部に想定した小竪穴 SC07 は終末期である。中期後葉～末（須玖Ⅱ式）から後期中葉までの遺構は明瞭でないが、少ないものの各時期の遺物がある。SP129 は中期後半の土器片が出土する。SC21 と重複する SD23（＋ SX27）、SD25、SD26（SC05 より古）は、削平された竪穴住居の掘方とみられ、後期から古墳時代初頭であろう。32 次の南西にある 10 次ではＬ字に曲がる幅広の溝１があり（第 678 集）、溝の規模・断面形や土器組成（脚付精製小型丸底壺あり）から方形周溝墓だろう。一辺 20 m 前後を想定する。ⅡＢ期であり周囲の集落の消長に一致する。墓地化により周辺の居住域が廃れた可能性がある。

このように井尻Ｂ北部の東（25 次）、西（32 次）のいずれも弥生時代中期前葉から後期、終末期、古墳時代前期前葉古相（ⅡＢ期）までは集落遺構が存続している。この間に都市計画道路御供所井尻線建設に伴う 14 次から 17 次の長大な調査があるが（第 736・787・834・918 集）、その傾向は同じである。ⅡＣ期に井尻Ｂの集落遺構が激減する。これは、すでにⅡＡ期から始まる東方の笹原遺跡への移転と（笹原４次報告、福岡市第 1224 集）、井尻Ｂの「墓地化」の結果であろう。遺構変遷と出土遺物からみて、25・32 次調査の成果でも裏付けられるように、井尻Ｂ遺跡北部の集落では中期前葉からⅡＢ期までの間に「断絶」はないはずだが、「後期前葉」の断絶を主張する向きがある（小澤佳憲 2013）。それによると「後期前葉に突如として集落の規模が縮小する」という（小澤 2013；167 頁）。ここでいう「後期前葉」は、図示された遺構の時期から（同 168 頁「図 149」右上）、筆者の「後期初頭」の一部と「後期前葉」であるが（17 次Ｃ区 SC01 は後期初頭～前葉、同Ｃ区 SE01 と同Ｂ区 SE4154 は後期前葉）、問題は次の「後期中葉」（前掲図左下）とされる時期にも、「後期前葉」とすべき遺構がある（4 次 SK10、17 次Ｃ区 SE04）。他に 17 次Ｂ区 SC4336・4636 は後期前葉とみられ、他にも重複の前後関係や出土遺物から後期前葉の可能性がある掘立柱建物や土坑も分布するので、「後期前葉に縮小」とは必ずしも言えない。井戸が継続して存在すること自体が集落の継続性や集住性を意味する（久住・久住 2008）。「後期後葉～末」（前掲図右下）が急増するように見えるのは時期幅が広いことを考慮して、同時期遺構の分布は差し引く必要がある。さらに上記論考では、井尻Ｂ南部で後期前葉から中葉の遺構がほとんどないとされているが、すでに指摘したことがあるがこれは誤りである（久住 2010）。6 次の青銅器鋳型出土の住居跡 6 とそれに伴う土坑は後期前葉～中葉（土壙 15 は後期前葉、土坑 6 は後期前葉～中葉、土壙 10 は後期中葉）、住居跡 26 は後期中葉である（第 529 集）。南端の 34 次では当該期の墓地に関わる遺構が継続している（第 1106 集）。井尻Ｂの南部域も、北部域ほどの密度ではないが、集落が散漫に広がり継続していたとすべきである。南部域の遺構密度が後期後葉以降に増えるのは事実だが、同時期存在を見極める必要がある。後期初頭から前葉の集落断絶論が多いが、それを前提とせず、実態に基づき検証と修正をする必要がある（久住 2010）。

<参考文献>※「第○○集」は「福岡市埋蔵文化財調査報告書」の集数である。
久住愛子・久住猛雄 2008「九州Ⅰ―福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について―」『井戸再考』第 57 回埋蔵文化財研究集会／久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ／田崎博之 1985「須玖式土器の再検討」『史淵』第 122 輯／久住猛雄 2008「福岡平野　比恵・那珂遺跡群」『弥生時代の考古学』８　集落からよむ弥生社会，同成社／小澤佳憲 2013「弥生時代の集落の変遷と社会」『新修 福岡市史―特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史』／久住猛雄 2010「弥生時代後期の福岡平野周辺における集落動態（1）」『市史研究ふくおか』第５号

報告書抄録

ふりがな	いじりびーいせき25			
書名	井尻Ｂ遺跡25			
副書名	―第25次，第32次調査の報告―			
巻次	25			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	1251			
編著者名	久住猛雄			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目8-1　電話番号　092-711-4667			
発行年月日	西暦2015年3月25日			
遺跡名ふりがな	いじりびーいせきだい25じちょうさ			
遺跡名	井尻Ｂ遺跡第25次調査			
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくいじり１ちょうめ754ばん2のいちぶ			
遺跡所在地	福岡市南区井尻一丁目754番2の一部			
市町村コード	40130	遺跡番号	0090	
北緯	33°33′22.0″（世界測地系）	東経	130°26′29.0″（世界測地系）	
調査期間	平成18(2006)年5月15日～5月31日			
調査面積（㎡）	80.04㎡			
調査原因	個人専用住宅建設			

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代，古墳時代	竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓、土壙墓（？）	弥生土器、古式土師器、土師器、石器（総量６箱）	主に弥生時代中期前葉（須玖Ⅰ式期）から後期および、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉までの集落（居住域）の展開を確認した。重複する竪穴住居のうち３棟は弥生時代中期前葉～中頃（SC03・04・05）で、１棟のみ後期前葉ないし中葉である（SC01）。出土土器は須玖Ⅰ式期が多く、弥生時代中期後半から後期後葉は比較的少ないが各時期のものがある。さらに弥生時代終末期から古墳時代前期前葉のものが主に柱穴から出土し、その時期は小規模な掘立柱建物（倉庫か）が展開していたとみられる。掘立柱建物には１×１間ながら棟持柱が推定できるものもある（SB01）。なおSC01に切られた小規模な井戸があり（SE07）、後期初頭～前葉前後とみられる。いずれにしても土器の時期幅から集落の継続性が推定できる。 竪穴住居の展開以前には、弥生時代前期後半から中期初頭の土器が僅かにあり、竪穴住居住居の下部から小型木棺墓（SX123）が確認されたほか、一部の土坑は土壙墓であった可能性がある。 古墳時代前期後半以降は遺構がないが、中期頃の土師器がわずかにある。また遺物は不明確だが、覆土の土色・土質から古代頃と推定される柱穴もあり、当該期の集落の一端が広がっていた可能性もある。

遺跡名ふりがな	いじりびーいせきだい32じちょうさ			
遺跡名	井尻Ｂ遺跡第32次調査			
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくいじり１ちょうめ712ばん7			
遺跡所在地	福岡市南区井尻一丁目712番7			
市町村コード	40130	遺跡番号	0090	
北緯	33°33′18.6″（世界測地系）	東経	130°26′26.2″（世界測地系）	
調査期間	平成20(2008)年11月10日～12月5日			
調査面積（㎡）	98.90㎡			
調査原因	個人専用住宅建設			

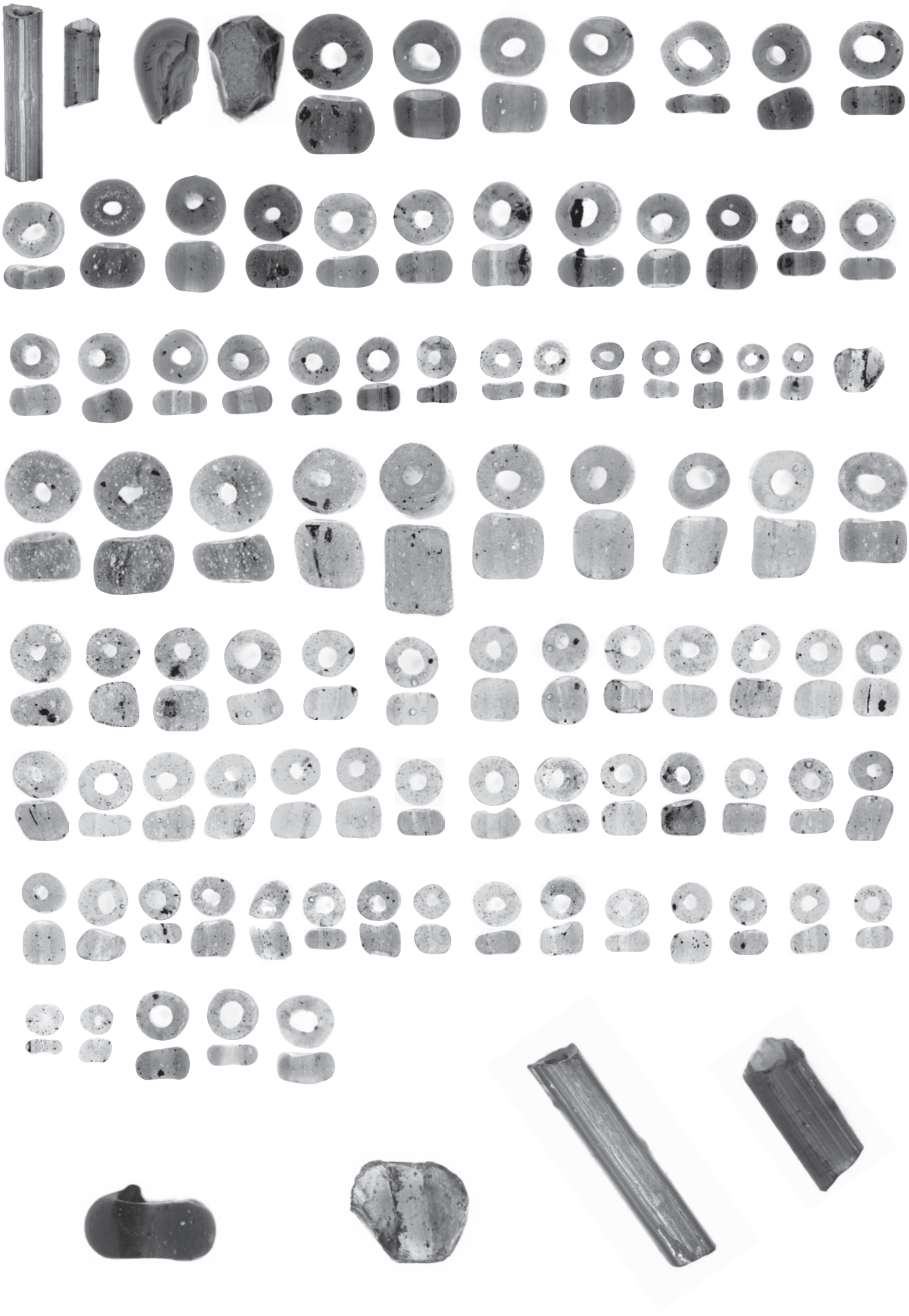
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代，古墳時代，奈良時代	竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、溝状遺構	弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、石器、鉄器（以上、総量７箱） ガラス玉類（計94点）	竪穴住居は２棟が確実にあり、重複する。このうち新しいSC21は同一地点で複数回の建替があり、最終段階の住居床面を中心に覆土からガラス小玉・管玉が出土した。弥生時代後期後葉である。SC21は覆土の大半を土壌洗浄し、床面直上を中心に83点のガラス玉類を検出した。また、周囲に同時期の青銅器工房なども分布し、工房の可能性も考慮される。さらにSC21を切るSX（SP）121からも10点のガラス玉類を検出した。これは掘立柱建物（SB01）の柱抜き取りに関わる祭祀であろう（弥生時代終末期）。ガラス玉類廃棄の祭祀を行う遺構が連続する当該区域は、集落でも上位階層が関わる空間かもしれない。 SC21に切られるSC05は後期初頭～前葉前後とみられるが、上部に不明確ながら終末期の小型竪穴があった可能性がある（SC07）。さらに検出時に貼床状の範囲が認められたり、「溝状土坑」としたものは削平された竪穴住居の掘方であった可能性がある。 井戸（SE111）はSC21貼床下部で検出した。２基の重複（掘り直し）の可能性がある。弥生時代中期前葉であり、25次SE07と同様に比較的古い。柱穴には弥生時代および古代の掘立柱建物を構成するものがありそうである。柱穴には瓦を伴うものがあり、周囲の飛鳥時代末～奈良時代前期の官衙遺構群との関連が考えられる。溝状遺構SD03は、遺物は少ないが覆土や方位（ほぼ南北）から古代の可能性がある。

井尻B遺跡25

― 第25次、第32次調査の報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1251集

2015 年 3 月 25 日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目８番１号

印刷　田堀印刷有限会社
福岡市中央区草香江1丁目８番24号